

〔作家〕 眞門にて見臨賈自ら一家を作せる者な作家と稱す。

〔青州布衫の話〕 趙州從諗禪師、因唐問。高法諱。

平拂袖し走り出つ、行くこと三五歩して却回して曰く、聞得た。予曰く、作麼生。平即ち所解を演ふ。甚だ隨當なり。予が曰く、時はれ細雨連日、備如何が留め得て一滴も濡らざる事を得ん。平が曰く、未生以前に止め得たり。予が曰く、往々に恁麼に云ふ。平即ち塵を打つこと一掌。予吹くこと兩三吹して、今時の作家に觸着すれば坐上大に塵を惹く。平又低頭して出つ、須臾にして歸來りて曰く、和尚の爲めに十方刹土の細雨を止めて點滴もまたもらさず。予が曰く、作麼生、平即ち所見を演ふ。予微々として笑ふ。平歡喜にたえず、走りて惠昌禪尼の老室に入りて前話を舉す。尼が曰く、居士少しきを得て足れりとする事なかれ。老尼今日に衰盡せり、人を得ざれば起つことを得ず、願はくは居士隻手を動かさずして、尼をして起しめ得てんや、平茫然たり、尼が曰く、居士早々なることなかれ、向きに云ふことを聞かずや少しきを得て足れりすと。平慙慙して寺に歸る。尼亦亦隨ひて寺に入り來りて、前話を舉して相報じ且つ大笑す。平忽然として入りきたりて曰く、適來錯りて敗闕を取り了る、願はくは大姉再び問ふこと一遍せよ。尼即ちいはく、居士願はくは隻手を動かさずして、老尼をして起しめよ。平即ち所見を演ふ。尼大に驚きて舌を吐く。予即ち青州布衫の話と授與して曰く、祖々相傳底の秘訣なり、謹て子細に參究

一踏何處。趙州曰。我在青州。作一領布衫。重七斤。

〔園地一下〕 因は案、亦案なるが、音悟の時不覺の一擊を云ふ。

〔燈籠跳入露柱〕 燈籠跳入露柱、佛殿走出山行、傳大士の須なり。  
〔人從橋上過〕 傳大士須。空手把動。順。步行騎水牛。人從橋上過。橋流

すへし。容易にすることなかれ。平即ち禮三拜して辭し去る。

右巷原の山梨平何某、幾かに一二夜の苦吟に依つて大事を發明せしこと、會元にも傳灯にも聞き及ばざるためしにて、實に去ぬる五月二十一日の夜の事に侍る。返すも最初の入理は急切に觸み進むに越へたることはあるへからず、時々思ひいだして少しづつ、相勸むる分際にては、中々三四十年を歴るども、見性は存しも依らず、月日を重ぬるに隨ひ、次第に疲れよわりて、妄想情念に勝つこと能はず、果ては念珠打ちつまくりて、打泣き打泣き念佛するより外は、是れあるへからず、虫歯の藥にもならざる修行なるへし。誰れにもせよ二度三度も呼吸の息も絶え果てよ、自ら生死を辨まへぬはと觸み進まされは、しかとしたる得力は、努を是れあるへからず。縱ひ一旦園地一下の得力これありて後も、動靜の二境を嫌はず、正念工夫の相續肝要たるへし。次に燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走りて山門に出て、人は橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れる。南に向ひて北斗を見る等の語話、掌上を見るか如く分明に見得すへし。而して後に最後向上の一着あり、之を法窟の爪牙奪命の神符といふ。謂はゆる疎山善塔の因縁、南泉遷化の話、鹽官犀牛の扇子、翠巖夏末の話、乾峯三種の病、是れ等の因縁逐一透過し了りて、万里の異郷に妻子の面を見る



水不流。  
 「向南看北辰」傳  
 大士の頌なり。  
 「疎山、南泉、乾峰」  
 遠羅天釜の十二頁  
 の上に出つ。  
 「國官」國官和尙  
 一日喚侍者。爲  
 我將。摩牛扇。來。  
 侍者云。扇子破也。  
 官云。扇子既破。  
 還。我摩牛兒。來。  
 侍者無對。  
 「單殿」單殿和尙  
 夏末。示。來。云。一夏  
 以來。爲。兄弟。一既  
 話。看。單殿。眉。毛  
 在。麼。

か如くならざれば、即ち真正參玄の止士と稱すること許さず。右老原の一件問答もよひ  
 たる人々は、僧俗ともに俄かに精進勇猛の精神を振ひて、勵み進むこと前日に十倍し侍る。  
 然らば則ち是れに過ぎたる法語はあへからずと、荒増し奮付進し候。文字の身爲、語録  
 の謬も多く侍れば、努々他見之れあるべからず。穴賢。

假名法語終

遠羅天釜

自隱禪師

答錫島攝州侯近侍書  
 日の昨は遠路御使札益を御勇健にて朝鮮入御馳走首尾よく相濟、御安堵の旨一段の御事  
 に候。草履恙なく罷在候。是れ又高慮を勞せられ間敷候。且又動靜二境の上は於て御工  
 夫怠慢なく御心掛なされ候條、珍重の御事に候。其外に書中は仰越され候件を、逐一老僧  
 が野情に相契ひ、御奇特千萬の御事、如何許か悦び入候。總じて一切の修行者、精進工夫  
 の間に於て心掛悪しく侍れば、動靜の二境は障へられ、昏散の二邊は隔てられ、心火逆上  
 し、肺金痛み悴け、元氣虚損して難治の病症を發するも間々多き事に侍り。又内觀の眞修  
 に依て能く、修鍊致し侍れば、至極養生の秘訣に契つて、心身堅剛に氣力丈夫にして、  
 萬事輕快に法成就にも到る事に候。去程に大覺調御も阿含部に於て、右の趣を委しく教諭  
 されあり、天台智者大師も、其大意を汲み、摩訶止觀の中に、正實に示置かれ侍り。書中の  
 大意は、縦ひ何分の事致と披覽し、何分の法理を觀察し、或は長坐不臥し或は六時行道す

「昏散の二邊」昏  
 沈、散亂の二病を  
 云ふ。

「大覺調御」釋尊  
 のことなり。



〔無汗、丹田〕氣  
は臍下二寸半の  
處、丹田は二寸の  
處を云ふ。

と云へども、常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ、塵務繁業の間、賓客接讓の  
席に於ても片時も放退せざる時は、元氣自然に丹田の間に充實して、臍下氣然たる事未だ  
能打せざる術の如し。若し人養ひ得て斯の如くなる時は、終日坐して會て飽かず、終日爾  
じて會て倦まず、終日書して會て困せず、終日説て會て屈せず。縦ひ日々に高善を行すと  
云へども、終に退情の色なく、心量次第に寛大にして、氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏  
の日も扇せず汗せず、玄冬素雪の冬の夜も襪せず爐せず、世壽百歳を圓みすと云へ共、齒  
牙轉た堅剛なり、息らざれば長壽を得。若しそれ果して斯の如くならば、何れの道か成せ  
ざる、何れの戒か持たざる、何れの定か修せざる、何れの徳か充ざらん。若し又如上の  
故實に達せず、眞修の秘訣を暗せず、妄りに自ら語解了知をもとめて、觀理度に過ぎ、思  
念節を失する時は、胸膈否塞し、心火高ふり上り、兩脚水雪の底に浸すか如く、雙耳溪聲  
の間を行くに齊しふして、肺金痛み悴け、水分枯渴して、終に難治の重症を發して、命根  
も亦保ち難きに至る、是れたら眞修の正路を知らざる故なり、寔に悲しむべし。蓋し摩訶止  
觀の中に假縁止歸眞止と申す事の侍り、只今申し談する内觀の法とは、かの假縁止の大略  
にて侍り。老夫も若かりし時、工夫趣向悪く、心源湛寂の處を佛道なりと相心得、動中を

嫌ひ靜處を好んで、常に陰僻の處を尋ねて死坐す。假初の塵事にも胸塞り、心火逆上し、  
動中には一向に入る事を得ず、舉措驚悲多く、心身鈍へに怯弱にして、兩腋常に汗を生じ、  
雙眼断えず涙を帯ふ、常に悲歎の心多く、學道得力の覺えは毛頭も侍らざりき。何の幸ぞ  
や、中頃より知識の指南を受けて、内觀の秘訣を傳受し、密々に精修する者三年、從前難  
治の重病は、いつしか霜雪の朝暉に向ふが如く次第に消融し、宿昔齒牙を挾むこと得ざる  
底の難信難透難解難入底の惡毒の話題は、病に和して氷消し、今歲從心の齡を経ると云へ  
ども、三四十歳の時より氣力十倍し、心身ともに勇壯にして脇席を濕さず、恣に偃臥せさ  
る者、動もすれば二三七日を経る事間、これあれども、心力衰減せず、三百五百の燕頰虎頭  
に圍遶せられて、經論を講演し語録を評唱して、三句五句を経れども、會て疲倦の色なき  
者は、自ら覺ふ此の内觀の力による事を。初め養生を第一とし、内觀工夫の間求りざるに、  
不慮の悟省得力幾度と云敷を知らず、只動靜の二境を嫌はず取らず密々に進修しもて行く  
事、第一の行持に侍り、往々に靜中の工夫は思の外に歩行く様に思はれ、動中の工夫は一  
向に歩行かぬ様に覺えらる事侍れど、靜中の人は必ず動中に入る事得ず。會ま動境塵  
務の中に入る時は、平生の會處得力は迹形もなく打失し、一點の氣力無くして、結句尋常



一向に心かけされ無き人よりは劣りて、許すの事にも動轉して、思の外に悪病なる心地  
 あつて、単任の勤も間多き者に侍り、然らば則ち何を指してか得力と云はんや。去程に大  
 慧禪師も動中の工夫は、静中に勝る事百千倍倍と申置かれ侍り、博山は動中の工夫成じ上  
 らざる事、二百三十斤の重擔を荷ふて半額嶺頭に上るが如しと申されき。蓋しが云ふは  
 どて静中を捨嫌つて、故意に動處を求め玉へと云ふにはあらず、只動靜の二境を覺えず知  
 らぬ程工夫純二なるを貴とす。この故に昔も、真正參禪の弟子は行て行く事を知らず、坐  
 して坐する事を知らずと。中に就て眞實自性の淵源に徹底して、一切處に於て受用する底  
 の氣力を得んとならば、動中の工夫に越えたる事は侍るべからず。譬へば茲に何百兩の黄金  
 ありんぞ人をしで守護せしめんは、室を閉ぢ扉を鎖して其傍に坐し、守て人にも取られず  
 奪はれずとて、中々氣力有らんとする者の手柄とも勤とも申さるべき事に非ず、是れを三  
 乘聲聞の自了偏枯の修行に比す。又二人有り、群盜蜂の如くに起り、凶黨蜂の如くに馳廻  
 らんず中を其の金を持して何某の處まで贈り届はよと命せられたらんは、彼勇膽氣あり  
 て大劍を挟み、脛高く賽げ、かの金を取て棒頭は突掛け打倒けて一交もせで、彼の所へ贈  
 届けで少しも恐るゝ氣色なぐれば、天晴甲斐々々しき働き、大丈夫の氣象とも稱嘆すべ

〔欲絶一乘〕二句  
 は三圖聖賢師大  
 師の信心歸に出  
 つ。

〔在欲行脚知見力〕  
 在欲とは欲界に在  
 るの義なり。

事なり。これを圓頓菩薩の上求菩提の下化衆生の眞修に比す。何百兩の黄金とは正念  
 正法堅固不退の壮志を本へり、群盜蜂の如く凶黨蜂の如しとは、五蓋十纏五欲六邪即妄念  
 と云へり、彼の勇猛は眞正參禪圓頓究竟の止まると云へり、何某の處とは、常樂我淨の四  
 無具足寂寂彼岸の寶所と云ふべし。その故に清光の眞正參禪の君子、聲色香味に向て坐臥ま  
 へんと。往々古の二乘聲聞なるとして輕しむれども、見道の力は、菩薩の光も、今の世の人  
 女の及ぶべし事難しき事なり。只修行の趣向も、空閑の處をのみ好みて、都て菩薩の威  
 儀を知らず、佛閉土の因縁なき故に、如来良師諸野干の身に比し、淨名は無群散離の都類  
 なりて呵責し玉ゆ。三祖大師の宣は、一乘の功、無二座と。是又六塵を好む  
 には排す、氷山の氷に氷れを氷れ少しも眞の體知る如く、平在六塵の止に於て、取るを得  
 はずして間斷なく正念正法相續せよとの心を持た。若し又一向に六塵を避けて氣風を避れ  
 ば、覺えずに乘の白雲を覆ひて、水も動道を成せぬと云ふ。永嘉大師は在欲行脚知見力、  
 此處住持無事不取道宜ひき。是亦亦在欲に耽著を戒むるの心成侍ら。五欲六塵の上には  
 在るの處の泥土なきが如く、在るの處の塵土なきが如く、在るの處の塵土なきが如く、然るに由縁野干に  
 在るの處の塵土なきが如く、在るの處の塵土なきが如く、在るの處の塵土なきが如く、



金、玉、珠、寶、珍、物、なる者、悉く棄て、夫れ見性の眼、なれば、處處を相應する事、餘はば、思の儀  
 に、遠慮大師云く、若し彼、冥、佛、道、に、是、見、性、と、云、は、及、急、の、法、實、相、唯、有、其、乘、の、知、見、開、が  
 ば、六、塵、即、ち、禪、定、五、欲、即、ち、禪、定、の、本、故、に、は、諸、賢、聖、諸、佛、は、禪、定、中、な、る、べ、し、と、云、は、果、以、て、修  
 る、は、彼、の、山、林、に、在、り、禪、定、を、行、す、る、處、と、得、功、禪、境、の、間、を、隔、た、た、る、火、裏、の、遠、は、世、間、希、存、の  
 行、者、な、り、に、禪、定、し、玉、玉、正、上、非、定、の、永、壽、は、天、台、の、三、禪、即、ち、の、坐、具、に、遠、し、止、観、の、修、行、は、精、ひ  
 く、銀、鏡、し、玉、ひ、た、れ、ば、佛、中、は、四、威、儀、に、應、に、禪、觀、に、冥、す、と、稱、意、た、る、程、な、れ、ば、片、言、隻、字、  
 といふ、も、中、々、空、易、の、理、に、非、ず、四、威、儀、に、常、に、禪、觀、に、冥、す、と、は、四、儀、即、ち、禪、觀、に、禪、觀  
 即、ち、四、儀、な、る、因、冥、合、じ、た、る、境、界、と、云、へ、よ、其、後、の、善、體、は、遠、揚、と、起、た、す、以、て、諸、の、應、儀、を、現、於、  
 説、き、た、を、以、し、と、同、し、機、能、な、り、し、を、れ、遠、は、水、中、に、さ、け、る、華、な、る、故、に、火、邊、に、近、く、時、は、坐、處、に  
 枯、凋、む、事、な、り、然、れ、ば、火、氣、は、遠、は、上、も、な、く、散、葉、な、る、事、や、然、る、に、火、裏、よ、り、さ、出、た、ら、ん  
 遠、は、火、烈、火、は、向、と、種、い、よ、大、く、色、香、を、増、し、て、聞、は、し、み、る、事、也、彼、の、五、欲、を、過、越、つ、て、最、初、よ  
 り、修、行、し、た、身、を、是、は、經、に、我、法、の、因、空、は、通、じ、上、見、道、如、何、許、り、明、か、な、身、也、佛、中、を、離、れ、  
 中、に、向、は、時、は、の、眼、眼、の、水、を、失、へ、る、事、等、ひ、也、彌、猴、の、林、樹、を、離、れ、た、る、は、似、有、る、筆、跡、の、氣、を、離、  
 ら、し、て、左、な、が、ら、水、中、の、蓮、の、火、氣、に、過、て、忽、ち、眞、悟、する、が、如、は、た、若、し、其、平、生、六、塵、の、上、に、於

本、益、く、精、彩、を、著、り、こゝろに無、雜、打、成、こゝろに片、は、し、て、感、應、を、修、す、其、後、の、何、百、萬、の、黃、金、銀、珠、世、の、時  
 塵、を、用、け、し、人、の、知、く、益、を、修、修、入、り、修、の、氣、象、を、觀、立、た、す、片、時、其、國、斷、妄、の、斷、滅、維、な、ら、ん、  
 故、に、忽、ち、自、心、の、源、海、を、欲、翻、し、生、死、の、命、根、を、照、斷、也、と、云、は、虛、空、消、滅、し、と、云、は、鐵、山、崩、落、する、處、の、大、歌  
 聲、も、ら、ん、と、云、は、彼、の、水、邊、よ、り、さ、出、た、る、蓮、華、の、水、氣、は、遠、は、上、も、な、く、散、葉、な、る、事、や、然、る、に、火、裏、よ、り、  
 故、に、火、氣、即、ち、禪、定、の、本、故、に、は、諸、賢、聖、諸、佛、は、禪、定、中、な、る、べ、し、と、云、は、果、以、て、修、  
 る、は、彼、の、山、林、に、在、り、禪、定、を、行、す、る、處、と、得、功、禪、境、の、間、を、隔、た、た、る、火、裏、の、遠、は、世、間、希、存、の  
 行、者、な、り、に、禪、定、し、玉、玉、正、上、非、定、の、永、壽、は、天、台、の、三、禪、即、ち、の、坐、具、に、遠、し、止、観、の、修、行、は、精、ひ  
 く、銀、鏡、し、玉、ひ、た、れ、ば、佛、中、は、四、威、儀、に、應、に、禪、觀、に、冥、す、と、稱、意、た、る、程、な、れ、ば、片、言、隻、字、  
 といふ、も、中、々、空、易、の、理、に、非、ず、四、威、儀、に、常、に、禪、觀、に、冥、す、と、は、四、儀、即、ち、禪、觀、に、禪、觀  
 即、ち、四、儀、な、る、因、冥、合、じ、た、る、境、界、と、云、へ、よ、其、後、の、善、體、は、遠、揚、と、起、た、す、以、て、諸、の、應、儀、を、現、於、  
 説、き、た、を、以、し、と、同、し、機、能、な、り、し、を、れ、遠、は、水、中、に、さ、け、る、華、な、る、故、に、火、邊、に、近、く、時、は、坐、處、に  
 枯、凋、む、事、な、り、然、れ、ば、火、氣、は、遠、は、上、も、な、く、散、葉、な、る、事、や、然、る、に、火、裏、よ、り、さ、出、た、ら、ん  
 遠、は、火、烈、火、は、向、と、種、い、よ、大、く、色、香、を、増、し、て、聞、は、し、み、る、事、也、彼、の、五、欲、を、過、越、つ、て、最、初、よ  
 り、修、行、し、た、身、を、是、は、經、に、我、法、の、因、空、は、通、じ、上、見、道、如、何、許、り、明、か、な、身、也、佛、中、を、離、れ、  
 中、に、向、は、時、は、の、眼、眼、の、水、を、失、へ、る、事、等、ひ、也、彌、猴、の、林、樹、を、離、れ、た、る、は、似、有、る、筆、跡、の、氣、を、離、  
 ら、し、て、左、な、が、ら、水、中、の、蓮、の、火、氣、に、過、て、忽、ち、眞、悟、する、が、如、は、た、若、し、其、平、生、六、塵、の、上、に、於



大師の氣宇生の如しと雖も此の天機は、亦あやむるに難きとん。此の時以當りて諸佛來生  
 也。是れ幻住死涅槃者如非事天竺地獄と教見し、佛界寶宮と稱せし、佛國の上界と稱せし、  
 悉に百千無量の法門、教誨相影の妙義を説き宣ふ。二劫の音聲と利益し、塵沙劫を經か  
 彌陀法、永劫大法施を行して曾て乏じざる事なく、空華の真有と義開し、谷響の法門を建立  
 し、時に壽命の神符を掛け、口は法施の法牙を咬嚼して、十方世界の獅子を稱善し、剣を  
 拔き、袂を揮て、塵沙劫を度す事なく、一箇半箇牙の如く、口は法施に似たる法の凶惡無義  
 の鈍喙漢を打出して、以て佛祖の深恩を報答す。是れを佛國土の因縁、菩薩の教誨と云ふ。  
 是れはこれ真夫に傑出する症の大丈夫兒生平の難業なる。彼の殺淨無事の處は、亦またの難  
 神を認得して現世なりと相心得、昔唐淨慧也、却て是れなりとす。此の無礙禿奴の業は、亦  
 此の曾大起の事を得ん。是れ等の業は、終日無礙を行はば、終日有礙を討じ、終日無作  
 を行して、終日有作を打す。樹が故じ、見道分明ならず、觀むは法性の眞際を窮むるは故  
 也。惜心入も再び得難きは生て首龍の空谷は入も如く、鬼の精末を許さず我觀すのゆゑ大起  
 也。過すて、若じかりし三劫の善業も、亦た立脚も、亦た是れ是れ道徳の難事なり。見性  
 本より真ならずるが故に、一生空しく心力を勞せ盡し、終に方寸の功を立する事能はば、

〔金仙氏〕 聖書の  
 ハムナト云ふ。

定に辨むべし。去程に時宗二種上人の如きは、種子を顯現打掛射す事、亦たなり。二度三度  
 此入りぬれば、再びかゝる事なす。打掛は、東は奥州出羽の樂、西は筑紫博多の浦の  
 奥までも告廻り給ひけるが、終に再良の開祖に現る。此の住生の大事と決然し給ひける事。  
 定に讀み苦悶ならず。つら／＼外界の始終を思ふた。天竺に生ずべきは、福地足らず、  
 三劫に積すべきは、罪業足らず、終此の空慧觀空の生を得得ぬ。その中國聖大臣長者居  
 士等の人々は、前生多少の善縁を修む、并多の勝因を種支來れども、天上へ生ずべきには  
 福力足らずして、今大徳富貴の家に生れて、臣妾を前後に従へ、寶財を左右に兼ねて、何  
 の辨もなく、萬民を憐ます。土産をも遣はず、糧食の心も多うて、今日も惡業惡因、明  
 日も亦殺業苦種、多少の福徳を獲ひ來て、徒に空慧の榮耀とのみ極め、眼もなまら罪業  
 に仕かへて、福ももて果しもなき惡趣の巷へ立歸り玉ふは、世間に限るもなき事に待ぬ。  
 只返す／＼も内觀の秘要を捨置かす、熱候是れもたし。内觀の眞修は、第一養生の秘術  
 也して、仙人鍊丹の大事に突へぬ。その初めは金仙氏に起つて、中頂天台の智者大師に垂  
 て、摩訶止觀の中に精しく口授し玉ふ。吾壯年の頃、是れを讀み、百歳先生に聞ひり、  
 白鶴は、城州白川の巖窟に隠れて、閉く壽齡三百四十歳と聞すと、時の人は是れを稱して白



曲仙人と云ふ、故の本山氏の師範なはと。唯が言に申く、凡人生を養ふの術は上部は常に  
 清涼みちた事を要し、下部は常に温暖ならん事を要す。須らく知るべし。元氣を上下に  
 充たしむるは、是れ生を養ふ至要なる事を。往々に神丹は五行合せて鍊ると云ふ事のみ  
 聞きて、水火木金土の五行は、即ち眼耳鼻舌身の五根なる事を知りて、五根を聚めて、神  
 丹を鍊るとは、如何なる事ぞと云はば、蓋し五無漏の法あり、眼鼻より見えず、耳より聞か  
 ず、舌より言はず、身より觸れず、遺尿より漏れず、遺精より漏れず、遺汗より漏れず、遺  
 精として目前は充つ、是れ即ち彼の正嗣氏の謂はるる浩然の一氣なり。是れを引て、神  
 氣海丹田の間に收めて、歲月を重ね、是れを守りて守りて去らば、是れを養つて無漏にし、幸  
 る時、覺えず丹竈を掀翻して、内外中間を致四維、神氣は是れ一枚の大還丹、自己即ち是れ  
 天地に先つて生ぜず、虚空に後れ死せざる底の長生久視の大神仙なる事を得得せざるは、  
 は於て、大器と提て、醉酪となし、原土を變じて黄金とす。是故に言ふ、還丹は神丹也。此の鍊  
 成は金と。白玉精白の養生之要。先ず此の鍊形。鍊形之妙。在り乎神丹。神丹則氣聚。  
 氣聚則丹成。丹成則形固。形固則神全也。須らく知るべし、丹は果して外物は非ざる事也。  
 蓋し地は玉田あり、梁田あり、玉田は珠玉を産するの地、梁田は木石を産するの地、人に氣

海丹田あり、氣海は元氣を收養の實所、丹田は神丹を精鍊し養算を保護するの城府なり、  
 古に云ふ、江海所以能爲百谷王者。以其善下之也。滄海既に海水の下を由りて百川  
 を含容して増廣せし。氣海既に五内の下に居し、真氣を收めて儲く事なれば、神丹を  
 成就し仙都に入る。丹田なる者、身三處、吾が謂はるる丹田は、下丹田なる者なり、氣海  
 丹田各々臍下に居す。一實は以て二名あるが如し。丹田は臍下三寸、氣海は寸半、真氣常  
 に此の所に充實して、身心常に平坦なる時は、世壽百歳を聞すと云ふとも、靈變枯れず、  
 牙動がま、眼力たゞ、鮮明はし、皮膚次第に光澤あり、是れ則ち元氣を養ひ得て神丹成  
 熟したる效驗なり。壽算限り有るべからず、但修養の功の精進如何に在らんのみ。吾の神  
 醫は、未だ病ざる先を治す。凡人をして心を攝り氣を養はしむ。庸醫は是れに反す。已  
 に病ひの後を見て、針灸藥の三を以て之れを治せんとす。救はざるもの多し。大凡精氣神  
 の三の物は、一身の柱礎也。至人は氣を惜み、使はす。蓋し生を養ふの術は、國を守るが如  
 ち、神は君の如く、精は臣の如く、氣は民の如し。夫れその民を愛するは、其國を全する  
 所以なり。其氣を惜むは、其身を全する所以なり。民散する時は國亡ぶ、氣竭する時は身  
 死す。此の故に聖主は常に心を下に専らして、庶民は常に心を上に忝にす。止に忝にする時



は、九願を待み、百餘權に倣つて、實て民間の窮結を顧ることなし、歛臣貪り掠めて、  
 隣吏偽り制り、野に菜色多く、國に饑饉倒る、賢良濬み置れ、臣民賤り恨み、終に民庶を  
 塗炭にし、國脈永く断るに至る。心を下に専にする時は、常に民間の勞疲を忘る事なく、  
 民肥を圖強く、命に逸するの臣民なく、境を侵すの敵國なし、人身も亦然り、至人は常に  
 心氣をして下に充しむ、此の故に七凶内に動く事なく、四邪外より侵す事能はず、醫術究  
 ち心神健なり、身終に針灸の痛痒を知らざる事、強國の兵の刁斗の聲を聞かざるが如し。  
 岐伯昔し黃帝の問に答ふ、恬淡虛無なれば、真氣これに従ふ。精神内に守らば、病安ん  
 りわ來らんと。今の人はこれに反す、生よが死に至るまで、主心片時も内を守る事なし。  
 主心とは何物と云ふ事を、人知らず、無知なる事大馬の目には足に任せて走るが如し。危  
 きがな。兵家に云はすや、驚恐安りに起るは、主心定まらざる故なりと。蓋し主心内に守  
 る時は、憂恐恐怖安りに生ずる事なし。若し人片時も主心なき時は、死人は如同く、或は  
 放隊邪侈至樂すと云ふ事なし。譬やば茲に一箇の舊宅有らんに、衰朽渡困、破壁畫の老女  
 たりと云ふを、主の有らざる家は、故なくして他の人安りに出入する事吐かず、其  
 家も主人を失する時は、賊盜も潜み休み、乞兒も亦來り宿し、狐鬼竊ひ走り、狸鼠竊れ

睡る、閉神畫さけひ、野鬼夜吟す、千妖百怪、群邪の窟宅とならん。人身も亦然り。正念工  
 夫の主心、騰輪氣海の間に盤行なると洵居るたるが如く、凜然として主張する時は、三點  
 の妄念情量なく、半點の思想下度なくして、天地一指、萬物一馬、厚重山の如く、寬大海  
 の如くなる底の一員の大丈夫、佛祖も手を挟む事能はず、魔外も窺知る事得ず、日々は万  
 善を行して以て倦む事なし、諍つべし真正報恩底の佛子なりと。其人忽ち邪境に乘はれ、妄  
 縁に引れて、覺えず正念工夫の主心を打失す、愚れを忽然念起名爲無明と云ふ。煩惱の邪  
 魔峰の如くに起り、邪見の妖魅蟻の如くに競ふや四大夢幻の廢舎、五蘊空華の朽宅、忽ち  
 化して魔魅の住處となりぬ。千態萬狀、日々に幾萬種の生死ぞや。外面は高蹈したる君子  
 の風標われども、内心は夜叉の變態多きが如し。心上は鎮へに入島の合戦より苦しく、胸  
 中は常に九國の兵亂よりも煩はし。恰も長者火宅の譬へに等し、是れを生死常夜の業海と  
 云ふ。若し夫れ正念工夫の船筏、精進勇猛の機帆なくんば、識浪情波の急流におし浸され  
 て、臭烟毒霧の暗區を越得て、四徳の彼岸に到る事を得んや。悲哉、人々如來の智慧徳相  
 を具足して、少しも缺くる事なく、箇々佛性の如意寶珠を圓備し、鎮へに大光明を放つて、  
 娑婆即寂光の淨刹毘盧法性の眞土に住みながら、慧眼未だに盲たる故に、娑婆なりと見錯

〔四徳〕常、樂、  
 我淨なり、不遷を  
 常と名け、安穩を  
 樂と名け、自在な  
 我と名け、無漏を  
 淨と名け、これを  
 佛の四徳とす。



り、衆生なりと思ひ違へて、得難き人身逢ひ難き一生を、闇々と牛馬などの無智昏愚なる如く、何の辨もなく明し暮して、苦しかりし三塗、悲しかりし六趣の老を吟ひ過りて、少しも變遷あらざる舍那常寂の眞土を把えて、地獄なりと恐れ迷ひ、無間なりと泣き苦しむ。是れ只世の常、取るにも足らぬ斷無の小見に倣り、片腹痛き少し許りの口耳の學解に倣て、佛法を信せず、正法を聞かず、虛日をのみ利て、正念工夫の主心と片時も守る事なき人々のなれの果なり。悲みても尙悲むべきは、流轉永劫の罪累、恐れても尙恐るべきは、生死長夜の苦果なり。天下の三聖人なりと崇められさせ給ふ延喜天曆の帝さへ、焦熱の猛火に黒ませ給ふを、笙が岩屋の日藏上人は、まのあたりに見奉りたりしに、我は累劫小國の主たる事を持ち、穢慢甚たしかりし罪にて、斯くは成りたるぞと責ひけるをぞ。修行朝臣は、和漢の才に長じ、手迹麗しくおはして、法華經三百部まで書寫し給ひたれども、正念工夫おはさざりければ、苦趣に墮して、紀の友朋の許に來りて救ひを乞ひ給ひけるをぞ。又本朝無雙の名將なりと稱せられ給ひて、目に餘女たる驍敵を従へ、至朝の宸襟を休め奉り、南都北京の貴僧高僧も加持しめりたりける天子の御備と、驍のすひまじして鼓音にて鼓を扱ひたる如く治し上りたる程の八幡殿さへ、閻王の腹に墮き給ひ、多田清仲は、病中閻王

の使に召されて、冥府の有様を見たり蘇生し、殊の外に恐怖し給ひて、直に六角堂に入り入道し念佛し給ひけるに、汗と涙と墨を打過しけるをぞ。六國を并吞し、四海を兼括して、八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も、鬼趣に墮して苦を受け、周の武帝は、魏梁の責を受け、身雄天下に聞えたりける秦の白起は、糞泥獄に沈みて、後ら明の洪武の始め、吳山の三茅觀なる處に於て、雷白き蜈蚣の長け尺餘なるを震殺しけるに、背に白起と云へる文字ありくと記しき由、罪業の空し難き事知るべし。謂ふ事勿れ、塵務繁に於て參禪に暇なく、世事紛紛として工夫積ま難しと。須らく知べし、眞正參禪の禱子の前に、塵務なく世事なき事ぞ。譬へば茲に二人あるに、往來結縛たる者、稠人廣衆の中に於て、銷まつて二三片の金子を遺落したるに、人目しげしきで棄てや置ぐべき、物屬して奪はずやあるべき、多の人々を拵りけりといつても、一回尋ね出して我手に入らざらん限は、心頭休憩する事能はじ。然らば賭ち塵務繁しとて參禪を怠り、世事煩しとて工夫を廢せん人々は、諸佛無上の妙道を以て、彼兩三片の黄金程には貴び惜まざる者に非ずや。塵務の上、世波の間に於て、彼の黄金を遺落したりし人の如く、專一に究明したらんには、誰か歡喜の眉を開かずらんや。此の故に妙趣大師云ふ、見るやいかば如茂のまをひ



〔阿修羅〕梵語、此に無酒または無端正云ふ、海岸海底或は須彌山の巖窟に居す、精進の念多く、常に闘戦を好む云ふ。

の胸くらへかけつかへずも坐禪なりけり」と。眞珠若生は此の意を述べて、看經すべからず坐禪すべし。掃地すべからず、坐禪すべし。茶の實種のべからず、坐禪すべし。馬に乗るべからず、坐禪すべし。こは是れ眞正參禪底の古實なり。吾が正受老人常は云ふ、不斷坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巻、號哭悲泣の室、相撲搦毬の場、管絃歌舞の席に入りても、安排を加へず計較を添えず、束ねて一則の話題を作して一氣に進退退かす。聲へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて、三千大千世界を遊ること千回百匝すと云へども、正念工夫片時も打失せず、相續不斷なる。是れを名けて眞正參禪の弟子とす。十二時中。只面皮を冷却し、眼目を冷却して、遠慮も人情を交へざれと眞定に貴ぶべし。兵法は亦云はすや、且戦且耕。是萬全之良策也。參學もまた爾り。工夫は且戦ふの眞修、内觀は且耕の至要、鳥の雙翼の如く、車の兩輪の如し。内觀の秘訣は、予向きに江湖參立の弟子の爲に夜船閑話に書し了れり。手常にこれ等の趣を以て弟子の禪病を教ふ事、幾人と云ふ數を知らず。中に就て、重症必死に垂んとする者八九を治す。學者必ず内觀と參學を共に合せ並行せしめて以て、生平の本志を成せよ。學道の人縱ひ參じて五派七流の大事を究得るをも、若し夫れ短壽ならば、何の用を成すに堪えんや、縱ひ又内觀の力に依て、彭祖が八百の歳時を閱

すと云ふとも、若し夫れ見性の眼無くば、たは是れ一箇老木の守屍鬼何の好事かあらん。若し又枯坐默照を以て足れりせば、枉て一身を銷し、大は佛道に違せん。たは佛道に違するのみに非ず、大は世諦もまた廢せん。何が故ぞ、若し夫れ諸侯大夫は、朝覲を忘るが國務を廢じて枯坐默照し、武夫は、射御を疎にして武術を忘れて枯坐默照し、商賈は、戶居を領し算盤を碎きて枯坐默照し、農夫は、耒耜を擲ち耕耘を止めて枯坐默照し、工匠は、繩墨を捨て斧斤を抛ち枯坐默照せば、國衰へ民流れ、賊盜頻りに起りて國を危からんか。然らば則ち衆民脚が僕みて必ず云はん、禪は極めて不祥の大兆なりと。殊に知らず。古へ禪林の盛なりし時、南嶽、馬祖、百丈、黃檗、鹿巖、臨濟、麻谷、興化、盤山、九峯、地藏等の諸聖、塊石搬土、水薪菜蔬、作務普請の鼓を鳴して、専ら動中の得力を求む、此の故に百丈大師曰く、一日不作。一日不食。是れを動中の工夫、不斷坐禪と云ふ。此の風近代地を拂つて盡く。蓋し斯くいへばとて、坐禪を嫌ひ靜慮を誇るに非ず、大凡一切の賢聖、古今の智者、禪定に依らずして佛道を成就する處、半箇も亦無し。夫れ戒定慧の三要は、佛道高古の大綱なり、誰か敢て輕忽にせんや。然るに向きは禪はゆる禪門の諸聖の如きは、超宗越格、眞取無上の大禪定、擬議するときは、則ち雷聲は星飛ぶ。抵羊の眼、



孤理の智、如何ぞ敢て窺ひ知る事を得ん。縦ひ又黙照枯坐して立地に成佛し、立地に大光明を放つ底の好事ありとも、諸侯大夫士庶民家萬般の公務千般の家事ある、何の暇もつてか片時も打坐する事を得んや。此に於て、病と稱して公務を通れ、家業を廢して、三三七日の三室を閉ち戸牖を鎖して幾枚の團蒲を重ね、一枝の香を挿んで坐すと云へども、平生の座務に疲れて、一寸坐すれば一寸睡り、三合の坐禪には、千萬斛の妄想を集ひ、既にして、眼を瞠り牙を咬み、拳を握り梁骨を堅起して坐すれば、萬般の邪境、頭を敲つて生ず、茲に於て額を撲め眉を皺めて、覺えず悲泣して曰く、官途道業を妨げ、仕路禪定を障ふ、しかど官を辭じ印を解き、水邊林下寂寞無人の處に在て、恣に禪觀を修じ、永劫の苦輪を遁れんとす。大に銷り畢れり、大凡人の臣たるの道は、主君の飯を喫して、主君の衣を纏ひ、主君の帯を結んで、主君の刀を帯ふ、水も亦他處より擔ひ來るに非ず、耕すして食ひ、織らずして纏ふ、身體手足髮毛爪齒、總に是れ君恩の所成なり。恁麼にして成長以來て、三四十歳に至て、主君の政事を助け、専ら王佐の才を抽て、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、専ら君恩に報答すべき時到来て、袖裏に密に念珠をつまみ、口頭曲に佛號を唱へて出仕に備く、公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなきて、動搖すれば病と稱

〔經に曰く〕 法華經を指す。

じて堪かんぞす。恁麼の志行にして、縦ひ三年五歳陰解の處に在て、精進刻苦し、思想盡き情念止むに似たりと云へども、肝膽傷み悴け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落るを聞ても、胸間裂くるが如し。大將にも諸卒にも何の専途にか立べき、萬一國家の大事あらんに、かゝる人石を引て、虎口の門戸を堅めたらんに、敵軍潮の如くに湧き、旌旗雲の如くに覆ひ、火炮は電の落ちかゝるが如く響きわたり、貝鐘は山も崩るゝ許り轟き鳴り、戈戟は氷の如く抜き連れたるを見聞かは、飲食烟に入らず、泥濘にふるへて、手綱とる事さへ叶はず、駭かばにすがり平みて、動もすれば自ら震ひ落ちんとす、果は歩兵の爲に獲らる。何が故そ斯の如くなる、たは是れ三年五歳寂默枯坐の致す所なり。縦ひ熊谷平山などか如き勇士たりとも、斯の如く修行したらんには、豈震へさらめや。此の故に祖師大悲善巧有りて、この正念工夫、不斷坐禪の正路を指す。諸侯は朝觀國務の上、士人は射御書數の上、農民は耕耘稼穡の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡績機織の上、若し是れ正念工夫あらん、直ちに是れ諸理の大禪定。此の故に經に曰く、養生産業皆與實相不二相違背と。若し夫れ正念工夫なくんば、老狸の空穴に眠るが如けん。悲ひべし、此の道今人棄て、土の如くなる事也。従々に我法三空の墨闇谷を認得て、向上最上の禪なりとして、日々眉を皺め額



〔張公〕 羅什三藏の弟子、僧肇法師のこと云ふ。

を覆て、死靈の蔭中に在るか如く、祖庭は遙に雲煙を隔つ。佛經を繰ふ事、鼓鼠の猫兒を避るが如く、祖録を忍む事、瞎鬼の虎聲を聞くに似たり。殊に知らず、此は是れ二乗常没の舊窠、相似の涅槃なる事。此の故に宗峰大師曰く、「二年までわれも狐の穴にすむ今はかざる、人も理り」と悲歎し給ひき。去程に張公は是れを困魚止宿。病鳥栖窟。少しき安き事を知て、大に安き事を知らずと呵し給ひき。真正參玄の上士は入理の淺深如何、見道の精蘊如何に在るのみ。誰か備が在家出家を擇ばん、誰か備が朝市山林を論せん。古の相國公美、大夫陸巨、尙書陳操、都尉李公、楊公大年、張公無盡等の諸君子の如きは、見性心が掌止を見るが如く、參玄心が肺腑より出るが如し。佛海の深源底を蹈翻し、瀾河の毒波浪を並吞す。智鑑高明、識量寬大、開神恐れ走り、野鬼悲み潜心、おのゝく朝廷の政事を助けて、天下を泰山の安さにおく、誰かその堂奥を見ん。張公の如きは、官宰輔にのぼり、位人臣の頂を極む、王佐の才豊にして、君備に臣貴み、士敬し民懐く、天膏雨を下し、君淋字を賜ふ、壽百齡に近くして、澤を四海に流へ、民幾年の秋に傲り、人壽日の隘を負ふ、上君恩に報答し、傍ら法寶を鎮護す、寔に天下の人傑なり。此の故に言ふ、在家成道張無盡。食蘇杭、禪榻大年と。實に千歳の美談ならずや。蘇内翰、黃魯直、張子成、

張天樂、郭功甫等、其の餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子、豈にそれ懸隔あらんや。見道各々林下の人に超過す、常に萬機の政務を任げ、肩を萬國の衣冠に交へて、銀魚金龜の朱紫貴海中に立ち、禮樂射御の間、進退揖讓の席に臨みて、片時も道情を打失する事なく、遂に祖庭の玄微に徹證す。これ皆正念工夫、不斷坐禪の靈驗ならずや。佛道微妙の深思ならずや。祖庭孤危の威徳ならずや。彼の默照枯坐を足れりとし、心源靜寂を禪なりとじて、丘壑に餓死する底の類と、寔に霄壤の間なり。これ謂はゆる尖兒を得ざるのみならず、塵子も亦打失する者に非ずや。何が故ぞ、徒に見性する事能はざるのみならず、主恩も亦廢す、太だ憐むべし。寔に知る、得力の淺深は、進趣の當否に依る事也。工夫若し一人と萬人と戦ふ底の氣力あらば、豈にそれ林下と室家とを擇ばんや。若しそれ見道は特り林下の人のみに在りといはれ、民の父母たると、人の臣たると、人の子たるとは、望を其の間に絶たんか。縦は林下に在りとも、道業密ならず、志念純ならずんば、何ぞ室家に異ならん。縦は又室家に在りとも、志願濃厚に、操履堅實ならば、何ぞ林下に異ならんや。此の故に言ふ、「思ひ入る心の中に道しあらばよしや若野の山ならずとも」と。ただ鬼にも角にも諸大將の心がけ給はらざる坐禪は、此の正念工夫の不斷坐禪に超えたる事は侍る



〔覆板〕木にて造り形勢に似たるものにて、坐禪の時に用ゆるものなり。

べからず。これは是れ二百年來應れ果たる古實にて侍り。何ぞか正念工夫と云ふとぞならは  
咳唾掉臂、動靜云爲、吉凶榮辱、得失是非、束ねて一則の話題となして、磨輪兼海丹田の  
下に鑽石の如くに契居ね、本尊には即ち大樹君、諸侯大夫は、吾が同業影向の諸菩薩衆、  
近習外縁の大小の諸臣は、吾が舍利弟目連等の二乗の大弟子衆、士庶萬民は、吾が赤子の  
如くなる所化の衆生なりと思はして、専ら仁恕の心これあるべし。袴着衣は、直ちに是れ  
七條九條の大法衣、兩口の打物は、禪板机案、馬鞍は、一枚の坐蒲團、山河大地は、一箇  
大禪床、上下四維十方法界は、自己本有の大禪窟、陰陽造化は、二時の粥飯、天堂地獄、  
淨刹穢土、總に是れ吾が脾胃肝膽、樂府内外三百景は、朝夕の看教誦經、千百億の須彌山  
を束ねて以て一片の香梁骨とし、其の進退揖讓射御書數、皆是れ菩薩善同歸の妙行也と觀  
念し、大勇猛の信心を抽で、彼内觀の眞修に和して、起居動靜の間に於て、那時か是れ打  
失處那時か是れ不打失の處と、時々を點檢する。是れ古今の賢聖、眞修の正路にて侍り。  
去程に子思子も道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非すと宜ひき。魯論聖仁の篇に  
は、道大必於是、顛沛必於是とは、片時も打失する事なかれとの教にて侍り。弟の道と  
は、中庸の正道と云へり。正道とは、斯經難持。若暫持者。我即歡喜。隨佛亦然と説き

給ひたる法華經の事にて侍り。法華經とは、即ち正念工夫の大事と云へり。工夫とは、自  
己本有の有様を指す事なりと覺悟これ有るべし。生死の大事を透脱し、佛祖の正眼と踏却  
する底の眞實見性の正修にて侍れば、中々容易の事にも侍らず、ただ所心は動靜二境の間、  
逆順縦横の上にて、純一無雜打成一片の眞理現前して、千人萬人の中に在ては、萬里の  
曠野に獨立したる心地ありて、彼の龍老が謂はるる雙耳如、雙眼如と言ふる境界は、時々  
これあるべし、是れを眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り。此の時節かす動も進み給は  
や、氷盤を擲擲するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ會て見ず、未だ會て聞  
かざる底の大歡喜あらん。若し人自家見性の眞偽如何、得力の精進如何を知らんと欲せば、  
先の須らく諷んで傳大士の偈を見るべし。何が故ぞ、未透底の士は、句に參せんより意に  
參すべし。已透底の士は、意に參せんより句に參すべし。偈に曰く、空手把三脚頭、步行  
騎水牛。入從三橋上、過。橋流水不流。又曰く、燈籠跳入三露柱。佛殿走出三山門。又偈  
州牛喚示。益州馬腹脹。又張公喚酒李公醉。欲知三端的、北斗向南看。寒山子の偈に青  
山白浪起。井底紅蓮風。若人見性分明なる事を得ば、これ等の言句は、吾が掌上を見るが  
如けん。若し然らざれば、言ふ事なかれ見性じたりと。縱ひ又如上の言句に於て遂一分明



〔疎山密塔〕疎山  
仁禪師。因主事僧  
爲師。遊密塔。了  
來白師。師曰。汝  
將說與匠人。  
僧云。一切在。和  
尙。師云。爲將三  
文與匠人。好。爲  
將一文。好。若道  
得。與吾親遊密  
塔。其價在然。云  
々。

〔南泉遷化〕陸巨  
大夫參南泉。遷  
化。巨問。喪。入寺  
下寮却呵々大笑。  
院主云。先師與大  
夫。有師資之義。  
何不哭。大夫云。  
道得即笑。院主無  
語。巨大笑云。若  
天々。先師去世  
遠矣。

〔乾峰三種病〕乾  
峰和上堂曰。法身  
有三種病。二種光。

に見得徹したるも、足れりとする事勿れ、棄去て者疎山密塔の因縁、南泉遷化の話、乾  
峯三種の病、五祖牛窓樞の話、宗峯大師曰く、朝結眉夕交肩。我何似。また本有圓成國  
師曰く、栢樹子話有賊之機。これ等の話頭毫釐も疑ひ無き事を得ば、須らく知るべし、見  
處佛祖と同一模範なる事を。參玄の王士と稱して、何の愧る處かあらん。何か故石、參禪  
はおの／＼誓つて佛祖の心を明めん事を要す、若し夫れ佛祖の心を明らめ得ば、豈に夫れ  
佛祖の語話を明らめざらんや。若し夫れ未だ佛祖の語話を明らめ得ずれば、須らく知るべ  
し、未だ會て佛祖の心を明らめ得ざる事を。此の故に七賢女經曰く、佛言我弟子大阿羅漢。  
不能解此義。唯有大菩薩衆。應解此義と。此の義とは何ぞや、西天此土祖を相傳じ  
來る底の向上の秘訣なり。此の義を了知せしめんが爲に、此の難邊の語頭を留む。此の故  
に眞珠巷主偈あり曰く、天臺五百阿羅漢。身著法衣出入間。神通妙用可達備。佛祖不  
傳妙難を。巷主は即ち息耕東海七世の孫にして、其の知見斯の如く痛快なり。貴ぶべし、  
此時眞風尙未だ衰ちざりし事を。今時奴郎辨せず、玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬、住  
を汝言ふ、自心即ち是れ佛、話頭して何かせん、心淨ければ淨土淨し。語頭を問して何  
の用ぞと。これ等の類を未得謂得。未證謂證。無漸昏愚の外道とする。竊かに彼が心と

須は一透過始解  
穩坐地。雲門出衆  
云。庵内人爲甚  
不知庵外事。峰  
呵々大笑。門云。  
猶是學人疑處。峰  
云。是什麼心行。  
門云。也要和尚相  
委悉。峰云。直須  
恁麼穩密。始解  
密地。門云。暗暗。  
〔五祖牛窓樞〕五  
祖演禪師曰。譬如  
水牯牛過窓樞。眼  
角四蹄都過了。因  
甚麼。尾巴過不  
得。

〔宗峯大師〕大燈  
國師の、こなり。

〔千七百箇の大事〕  
傳燈錄中に千七百  
人の機縁を載す。

稱する所以の者を見れば、八種難耶、應深無明の關籠なり。錯を疑りて子となし、第  
を以て錯に傳へて、祖を傳來の妙道なりとじて、人の參禪學道艱辛精苦するを見れば、か  
れど彼どは圓頓の直指を知らず、二乗の根性なり。それとそれとは向上の禪會せず、聲  
聞の部類なりと。彼が謂はゆる圓頓の直指點檢し見來れば、楞嚴に呵し給ふ無明元本なり。  
彼の二乘聲聞の人々には、霄壤遙かに劣れり。而して速得日利の賢聖を捉えて、妄りに輕賤  
す。寧に笑ふべし。或は又一般あり、無の字にもせよ栢樹子にもせよ、一向は手眼の着け  
ざる處を禪道なりと妄想して以て透過とす。此は是れ第一等の惡風俗、善旨難治の大癡病、  
錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病、總にこれ妄分別、眞正參學上士の如きは則ち然らず、  
參し參じて參すべき無き處に到つて、理盡き詞究まりて、技も亦究まり、天涯に手を擡じ  
て絶後に再び蘇りて、而して後に因地一下の安堵は得る事に侍り。左もなぐて無明妄想生  
滅の心行を以て、難邊難解の秘訣換骨奪命の大事を、彼此泐洗致し侍らんば恐るしき事な  
り。佛も生滅の心行を以て眞相の法を説く事勿れと堅く制し給ひたるごとと、正受老漢は  
常々眉を皺められ侍りき。然るに雲水往來の僧侶千が八九は大口を開きて、傳燈千七百箇  
の大事に於て、毫釐も疑ひは侍らずなき會釋もなき云ひ散す底多し。試に一則を擧揚す



之を一千七百則の  
公案と稱す。

れば、拳頭を登るあり、一喝を吐くあり、十か八九は聲を扣く者多し。輕々に撞着すれば、  
見性は存じも依らず、華文の功さへ無くして、一文不通、頑陋無眼の人となり。斯く恐ろし  
き無頼不敵の僧は、何れの知識の許より習ひ持ち来るやらん。去程に三五年も斯くわめさ  
るるくよと思へば、天竺へ渡りたるか、唐へ行きたるか、高は成たるか、筵になりたるか、  
果は音も臭もなく成行くは、幾等と云ふ教を知らず、愚直の業にも成らざる底の悟りなり。  
惜むべし、棟梁の實ありて神俊の才を具足し、學立方を盡くし、琢磨功を重ねば、他徒馬  
祖石頭にし去り、臨濟徳山にし去て、天下蔭涼樹とも成り去るべき底の人々、苗にして秀  
でんとするに肝心の時節、筋なき妄解を習ひ來つて、人の參禪學道、精神を盡すと見れば、  
馳求の心止まずと云ふて、地空を扣いて大笑す。備が頂空無記願耶の暗窟を認り得て歇得  
する底の糟見解、三日五日肩を越れば、驢馬の童子も亦須らく解すべし、況や他人の處よ  
り習ひ持ち來らんをや。佛祖も手に餘したる者に成りて、初めは信する人も間にこれあれ  
ども、元來無記暗鈍の瞎凡夫、次第に在家實頭の人々にほを及びず、果は棟那施主にも尋  
み難はれ、行方知らず成り行くは、近年行脚の風俗なれ。如何に於て眞正の得悟は得る事  
ぞとならば、塵務繁累、世事紛然、七轉八回の上は於て、譬へば勇士の大敵に取らぬまじ

たらん時に、匹馬單鎗、大勇猛の精神を震えて、一方を突き破つてかけ抜かんす時の心持  
にて、正念工夫絶えずがまなく精彩を著け、手脚の下すべき様もなく、四面空濶とて、  
心身ともに消え失せたる心地は、時々にこれ有る者に侍す。此の時恐怖を住せず、勵み進  
み侍れば、一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り、總じて參學は妄念情量を脱ひ、昏沈  
睡魔を脱ひ、動靜進退を脱ひ、是非憎愛を脱ひ、一切の塵境を相脱ひ、正念工夫を推し立  
て別て行く張合にて、不慮の省覺はこれ有る事は侍す。彼の勇施菩薩の如き、大重裝を脱  
して懺悔すべきに地なし、徒に憂悲惱亂す、忽ち自ら大誓を發して、憂惱を脱ぎて歇坐す、  
忽然として無生を悟る。雲門大師は、老睦州に左脚を還折せられて大悟し、蒙山の眞禪師  
は、痢疾を患る事晝夜百次、身體苦しみ疲れて、前面只死あるのみ。茲に於て大誓願を起  
し、苦痛を脱ぎて死坐す、少焉膈大に鳴動する事數回、痢疾は拭ふが如く平愈して、大に  
得る處有り。大圓寶鑑國師の如きは、華國に入て聖澤の唐山老師に謁し所見を演ふ、山漫  
罵して打て追出す、師憤然として煩暑の日竹林の中に入て、寸絲かけす裸形にして枯坐、  
夜に入て、蚊千百萬競ひ來つて身上に集り圍んで師の肌を咬む、茲に於て病痒を脱ぎ、  
齒を切り鬚を搦つて凝坐す、正氣を打失せんとする者殆んど數次に圍らざらば然として契悟



〔象骨〕 山の名なり。  
〔破家散宅〕 身心脱落の義なり。

す。昔し調御世尊は、雪山に在りて苦修六年、皮骨連立、鹿茸膝を穿つて骨に至り。慧可大師は、臂を断つて自の本源に徹し。玄沙は、泣くく象骨を下つて、眼瞶して左眼を破つて、徹骨徹髓し。臨濟は、痛棒を喫して破家散宅す。これ古今の榜樣なり。三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なし。今時の如く徒に空しく胸腹の凡解を恃みて、自己脚眼下の大事を丁簡分別して以て足れりと思せば、一生妄想の魔網を破る事能はじ。小智は菩薩の坊とは、これ等の輩に侍り。中古禪門の盛なりし時、正念工夫心掛け給ひし士大夫は、公より退るの閑暇の日は、如何にも健かなる士卒七八箇を従へ、大馬に跨つて兩國淺草などに等しき人立多かる所を用有りげに馳せ廻り給ひける由、是れば動中の工夫、親疎如何、得失如何を暇めし試みん爲なりける由。去程に嶋川新右衛門は、關許喧嘩の席に望みて大省力を得。大田道灌は、陣中に在りて組み布れながら和歌を詠し。正受老漢は、其の里へ狼の數限りなく來り集り來陣を惹きし時に、所々の墓原に七夜まで坐し明したる也。是れ此彼等は頭筋耳の根を吹き喚れんする時に、正念工夫、相續間斷ありや否やをたゞし試みん爲なりと申されし。吾等の性空上人は、常に悲歎し給ひけるは、世念濃厚なれば、道念輕微なり。道念濃厚なれば、世念輕微なりと宣ひき。つらうと思ふにば、世念濃厚なく管をじき縁言、披見もひつかりし思はず。世念濃厚に書き續けたるは、何れなれども、鶴林半死の殘喘、長庚曉月、顧みなき命に何の不足の處有や。肩を擔ぎしは、みをとばせや。龍邊を龍邊の門に我もるに非ず。聲名を世波の底に釣るに侍りや。是れを序に人々の道情をも助けよかし。法門無量壽願學を申す事の侍れば、若し人々の後法施の一助ともなれかし。且つ千兵は得易し、一將は求む難しと申す事も侍れば、書中少しはても取るべき處あり。幕下の道情をも助け増して、禪學成熟し給はば、その銀波必し左右の人々に及ばん。左右若し其の恩波は浴せば、其の澤必し一城の人々に及ばん。一城若しその恩波は浴せば、其の澤必し一國の人々に及ばん。何が故ぞ。一人の心は千萬人の心なる故に。つらに天下國家に及ばし。上王化を佐け、下庶民を利せん。然らば則ち宇宙の間、那箇の盛事か是れに如かざる。これ老僧が本生の後志なり。若し然らざらんば、何の追従にか終夜孤燈を挑げ、老臘を摩訶する。成せしむるなき時は、女語りむ。練も遣はし書送り侍るべきや。道理ある事だ懸念さば、持て置かず熱讀し給ひて、内觀養生の秘術は其ひ給ひ、必身其壯健にして、迅速に海潮得時、因縁上下の機轉をも得給へかし。若し是れは、くは、此の高麗の加養方に能く、武陽香閣、海島の子は長壽を傳へ給ひ、上天下の政事

〔香寫〕 香寫山攝州に在り。

〔法門無量壽願學〕 衆生無邊誓願度。煩惱無量誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。之を菩薩の四弘誓願と云。

なく管をじき縁言、披見もひつかりし思はず。世念濃厚に書き續けたるは、何れなれども、鶴林半死の殘喘、長庚曉月、顧みなき命に何の不足の處有や。肩を擔ぎしは、みをとばせや。龍邊を龍邊の門に我もるに非ず。聲名を世波の底に釣るに侍りや。是れを序に人々の道情をも助けよかし。法門無量壽願學を申す事の侍れば、若し人々の後法施の一助ともなれかし。且つ千兵は得易し、一將は求む難しと申す事も侍れば、書中少しはても取るべき處あり。幕下の道情をも助け増して、禪學成熟し給はば、その銀波必し左右の人々に及ばん。左右若し其の恩波は浴せば、其の澤必し一城の人々に及ばん。一城若しその恩波は浴せば、其の澤必し一國の人々に及ばん。何が故ぞ。一人の心は千萬人の心なる故に。つらに天下國家に及ばし。上王化を佐け、下庶民を利せん。然らば則ち宇宙の間、那箇の盛事か是れに如かざる。これ老僧が本生の後志なり。若し然らざらんば、何の追従にか終夜孤燈を挑げ、老臘を摩訶する。成せしむるなき時は、女語りむ。練も遣はし書送り侍るべきや。道理ある事だ懸念さば、持て置かず熱讀し給ひて、内觀養生の秘術は其ひ給ひ、必身其壯健にして、迅速に海潮得時、因縁上下の機轉をも得給へかし。若し是れは、くは、此の高麗の加養方に能く、武陽香閣、海島の子は長壽を傳へ給ひ、上天下の政事



をも輔けて万民を憐れし、内法實を徳義し、徳を以て法を履の樂を究りて、法成就にも  
 至り給へかしと思ふ許りの寸志にて侍ら。老夫壯年より思ひ付き侍りけるは、正念王夫の  
 勝手には、武士の身の上程より事は有るべからず、武士は明は暮れに身を備へ持つ事吐  
 はず、出仕にも附合にも、如何にも嚴重なる者なれば、髪結立て、上下か又は袴履に  
 大小手挟み、折目高なる起居の上には、正念王夫は溢れ建る程深く打ち見ゆ。況してよ  
 き駿馬の本く逞しさに打ち騎て、百万騎の敵軍をも人無き處を過る如く乗り破らん、  
 け崩すべき顔色は、天晴見事なる不斷坐禪、かく工夫しもて行きたらんには、出家は一年  
 にて得力これらば、武士は一月、出家は百日にて得力これらば、武士は三日にも利運  
 は開かるべき者を、志なく案内知り給はぬ故に、生憎塵土も云ふべき大馬の背の上は、開  
 やと八石五斗無明妄想の重荷を建れ、積み載せて、いかにしげなる現曲して、あたりに  
 拂つて乗り連れ、打ち通り給ふは、近頃以て殘念なる風情ならずや。かく大切なる場所  
 とは遠く過ぎて、我々は任官の身なれば、坐禪などする暇隙は、勤めの内は存じも寄らぬ  
 事なるぞなと宜ふ人々は、海中に在りながら本をたづぬる心地ぞすれ。四十二歳には、  
 人に二十の難あり、兼貴學道難と。誠なる哉、王侯より庶人に至るまで榮耀富貴の人々

は、救保の無き事に待れど、來生の苦輪を悉く出離の要道を尋ね求むる人々は、世界  
 を一掃して一人見侍り侍らす、是れ定めて金口の新説に違はとこの心なるべし。たゞ富貴  
 の上には富貴を食取りて、足る事を知らず、榮耀の上にも榮耀を求めて、飽く事なき世  
 の中に、何の善縁ぞや、幕下のみ獨り富貴を見る事空華の如く、榮耀を見る事夢幻の如く、  
 常に無止の大道に賢慮を傾け、草履を履み給ふ事既に三次、昔昭烈の武侯が草履  
 を履み給ひしに等し、彼れは三國を並ぶ賢事を圖り、これは三界を起せん事を求む、その  
 趣は同じと云へば、志は大に異なり。昔武侯は勳を築て、命を委ねて以て三國に答ふ。  
 老僧世に三國に報する此件書を惜まんや。如何なる法理を書き贈りてか、幕下勇猛の精神  
 を増長し、圖らざる宗門向止の大事を透過し、船税の眉を開き給へかしと新説許りに、か  
 本説の文章に休新すまで書は續け給ふにて侍り。去りながら宗門向止の大事は、中々文字  
 語言の力にても導引すべき事にも侍らず。然れども修行の趣向錯り給はずは、自然に大事  
 に契當し給はてやあるべき。事使、一昨為急に回鞭を執る、貴答を裁するに暇あらす、類  
 りに廢禮の儀を承る、幸にして昨日宜願、原其歸る事を告ぐ、數語に堪えず、押へ留り  
 て歸國を修す、歸る者許せず、曉諭すめ書心に天明に至れば、歸書既に五百行を得るぞ



〔四王、兜率〕 四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化乐天、他化自在天、之を欲界の六天と云ふ。  
 〔龜氏等〕 龜氏は迦葉、慶喜は阿難、身子は舍利弗、彌迦は富樓那の譯語なり、迦葉は上行第一、阿難は多聞第一、舍利弗は智慧第一、富樓那は

いふべきも、酒情實と雖も事能決す。老來歸配の力無りして、動に書しけるを後又書し、始り預けるを終に亦預べふ。字々鳥多多く、行々海魚の遊りれども、再看するれいとある。裁封して以て國が歸袖に附す。恰も楚鶴と驚めて丹山の風なりと稱して王侯に進むる者似たり。電照の機、請ふ丙丁童と喚へて、彼れをして秘重せしめ給へ。若し又書中取るべき處あれば、再抄清書して以て進獻せん。幕下書記の人々に命じて書寫三五冊、年少類聚の近習王五歳及び和田國盛が輩に分ち與へて、時々に熟讀せしめ、朝服の日は、幕下の殿玆堤中澤の隊を渡り故老の舊臣良醫六七輩を召され、圍み坐して聽受せしめ、幕下亦圍圍止は且聽き且舞つて道情を保養し給ひ、昨日の餘韻を樂み給ひ、法喜禪悅の境致自然に現前して、四王、忉利の歡樂、兜率兜率の勝界も亦羨むに足らず、況や世間穢濁充滿の宴會、輕浮戲密の遊遊、入音耳を誘かし、真舞眼を看す底の無斯無愧の幻戲を。豈に願ふに足んや。此の趣を以て能く、勸舞これ有りて、近習を以て外縁を以て我が夙願の大業なりと思はむ。書寫に誘引し給はし、いつしか上求菩提、下化衆生の本願を契ひて、塵中衣冠希有の善知識、難知ならん。勸を盡し、教馬は蹄中往來しなから、時々に諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは。然らば則ち強將の下に弱兵なしと申す事の待れば、龜氏、慶喜、身子

脱法第一と稱せられ皆釋尊十大弟子の中なり。

〔宰官身〕 法華經普門品に應、以宰官身、得度者即現宰官身、而爲說法の語あり。

子、滿慈等の有力の武臣は、野村田村等の人々を初め、部下には幾人も出来侍るべし。真一天下の事故あらんは、大將も諸卒も通身一團の眞元氣、百騎を卒して萬騎は對すと云ふ。從來生あることを見ず、世にそれ死あるはゆんや、恰も鐵石を空に立て行か如し。靜なること山嶽の如く、疾きこと颶風の如し、向ふ處破らすと云ふことなく、期る處碎かずと云ふ事なし。譬へば保元平治の亂軍中は在りて、獨り無人の曠野は立つが如け。それこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ。君恩と法恩と並べ流へて士卒を撫す、誰か幕下の爲に身命を惜まんや。生死の恐るべき無れば、涅槃の求むべきなし。十方を目前に精融し、三世を一念子に貫通す。皆是れ彼の正念工夫の力に依れり。かきの如くなる時は、士敵し民獲さ。君仁に臣正し。衆餘の粟あり、婦に餘の布ありて、上下ともに道を好んで、國脈泰山の安きが如く、萬世を経て衰滅なげん。然らば則ち人間天上の善果これに如くべからず。宰官身得度者即現宰官身の居士は、世にそれ異人ならんや。穴賢。延享第五戊辰曆仲夏二十五日。沙羅樹下。彌提老翁書。

贈三遠方之病僧一書

便の度毎に貴書並に傳語、者回飲禪人便に又苦若書、殊更野外珍も水沆三身、親切の至



〔延壽堂〕 延壽堂の延壽とは壽命を延ばすとの義にて病者の療養する處を云ふ。

かに候。貴兄事貴境へ飛脚致され候も、吾等勤申し侍れば、何とぞ道業怠慢なく、困地くわんち 一下の歡喜をも得られよがしと好侍入候處に、夏頃より氣分悪しく、今程延壽堂えんじゆうだう に入られ候旨、且夕薬七奉し候。若回欽禪人物語には、左程の事にもこれなく、發足の二三日已前に入堂致され候由、如何計り痛く存し候。氣分は如何様の重病沉病なりとも、それは世間に打ち任せて、自分は随分正念工夫肝要と心がけこれあるべく候。病中苦患くげんの間に仕抜きたる修行は、他後如何様の逆縁ぎやくげんに逢ふても、退情たいじやうこれなき物の由承はり及び侍り、大切の時節ぞと思ぼして、努め、油断ゆだんこれある間布候。三十年前去る老漢、病中の僧に對して物語せられけるは、世に智慧ある人の病中候は、後續ごぞくしく物苦き事はなき事なるぞや、智慧ある儘に來方きたたやく末の事ども際限もなく思ひ續け、看病の人の好悪を咎め、齋齋同神の間闊かんくわつを恨み、生前には名聞の遂さるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、郷里を思ひては、廻轉くわんの生せざるを憤り、神明に祈りては感應のおそきを願ひ、目と打ち塞ぎて臥居たるは、殊勝に物靜なれども、胸中は九國の合戦よりも騒しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に入石五斗の物思ひなるべし。かく病狂れ死したらんには、後の世の有様こそ推し量らるれ。物思ひして藥にも養生にもなるためしならば、吾々も打寄り手傳ひて、物思ひ

得させんなれども、痛く物思へば、心火道らひ上り、肺金痛み畏べ、水分枯渴し、寒熱止む事なく、自盜の二汗は次第に繁くて、果は命根も亦保ち難きに至る。是れ貴平生の志行懶惰にして、少し許りの病を妄想心の手傳ひで夥しくなだて上げたる者なり。然れば病に害せられたるにはあらず、妄念に食ひ殺されたるなるべし。寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり、虎狼は尸體さしたる内へは入る事は叶はぬものなり、妄念の狼は坐禪靜慮の床の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入る奴なり。或る病人ははる／＼と打泣きて、吾等程薄福なる者はなきぞと、偶に受け難き人身を受け、貴き僧形を得ながら、辨道の功をも積まず、佛道の光をも見ずして朽葉てんする事の口惜さよなど泣口説なみくわたるは、殊勝に愛らしけれども、是れも解急油断の大不覺者のなれの果なるべし。大凡辨道工夫の爲りには、病中程よき事はこれあるべからず、古來賢達の人々の巖谷に身をよせ、深山に形を隠し給ふ事は、世縁を遠ざけ、塵務を捨離して道行純一にばげみ勤めんが爲めなり。然るに病中を除きて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず。病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ使僧知客の應對も省き、廣衆雜話の喧嘩もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豊儉を見ず、死活は天運に投掛け、饑寒は看病の人に打任せて、貝海猫なと情伏したる體に



て何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に滯圓上の事を忘却せず、自己の正念を得失せざるを第一として、生も亦夢幻、死も亦夢幻、天堂地獄、穢土淨刹悉く拋擲下しての一念未興已前、萬機不倒の處に向つて、是れ何の道理をも、時々點檢して、正念工夫相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打ち越え、悟迷の際を超出して、金剛不壞の正體を成就せん事、これ眞箇不老不死の神仙ならずや。人界に出生したる思ひ出ならずや。圓顯方便の威徳ならずや。佛道微妙の靈驗ならずや。眞正菩提の人の前には、吉凶榮辱、逆縁順縁盡く道業を助くる糧となり、懈怠情弱の人の前には、但初の塵事芥子許りの病氣も、騷しき障りに仕なして、果は宿業のあまなり、般若に縁をなれば、種々の道理を交けて遠からば般若を遠ざけ、根もなき業障を種えどたゞ、一生を錯るほどの苦々しく情なき事はなきぞとよ。古來より重病を受ながら、疑團打破の人は、問答事なきが如し。中比さる老和尚の重き腫物を受け給ひて、背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて、目もあてられぬ病惱なりけるに、湯藥食事進み奉らざるより外は、人をも近ければ、目も打ちあてられぬ病惱み伏し給ひけるに、ある時、法眷の人々三寶見え來りて、見問ひ奉りける處へ、外癩の人來りて土肉とらんとて、膏藥に藥加へ塗らせなれば、今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍

りぬらん、かゝる貴き御身に心なき腫物の出來りて、日數多く惱ませたる御いとしとよ、去るにても今日よりは愈肉の上りて、目出度快氣まじまさんお待ち奉る許りなるぞやとて撫て勞り申しければ、上人は涙く寢入たる人の目打覺めたる御顔ばせにて、人々はよくこそ見え來り給ふもの哉。包みはつべき事ならねば、物語して聞せ申すべきぞ、誰々も近寄り給ひてよ、扱も此度の病惱は、愚者が爲には貴き善知識なるぞや、腫物の陰にて二十年の非を知り、四十年の素懐を遂けたる事の嬉しさよ。重病受けさりし己前は、悟に事欠きたる事もなく、修行に不足もなき境界なりと思ひて、修行も打ち捨て、意面もなく供養なを受は、會釋もなく起居振舞けるが、思はずもかゝる重剎に沈みて、五體も煎上ぐるが如く、骨節も碎け離る、許りなれば、氣遠く心塞りて、黒繩衆合焦熱叫喚の苦患を、縁に形體に集め上せたる心持にて、悟も見解も何地へや行きぬらん、半點の力をも得ずして殘るものどては、想念と苦痛とのみなりければ、おなほ悟し、かく惱み苦み死したればとて、謹慎むべき事にしも非ず、逆も助かるまじき命なるに、是れより正念工夫に取掛りて、苦惱や勝つべき、工夫や勝つべき、心の長の及ばん程は、實の戦はんすものぞと思ひ定めて、傑烈の斗志を憤起し、勇猛にばげみ進みけるに、一度も二度も苦しく絶え入る心地しける



が、打ち返し取り直して間斷もなく進みける程に、いつしか戦ひ勝て、晝夜のさかひもなく、寐寤の隔もなく、終には打成一片の工夫現前して、此の十四五日以来は、想念も苦惱の雲霧などはれ失せたる心持にて、大安樂なるのみに非ず、眞正生死不二佛魔同體の眞理に契當じ、唯一乘金剛不壞の奧義に徹底したるぞかし。今日より後は如何様の逆縁重障なりとも、菩提を妨ぐる事はあらじと覺ゆるぞ。人々も少し許りの會處得方あらんを顧み給ひて、茲はの時に至つて、愚老などが如く興さまじ給ひぞ。返すくも健ならん時に、正念工夫怠り給ふべからず。賢くも煩ひける事よ、簡程目出度事や有るべき、思へば此度の塵物は、愚老が爲には上もなき善知識ならずや。然らば則ち如何なる供養をし、如何なる讃嘆をも述べ度思ふに、次第に愈々行く事の名殘惜さよとて打ち笑み給ひけると、其の時隨侍申しける僧の物語しけるを聞きたるぞかし。又或る眞言家の驗者なりと聞え給ふ法師の御房、重き傷寒に惱み給ひて、晝夜の分ちもおはさで呻りせめき給ひけるを、弟子の小法師の小點氣なるが打ち聴て、あの御房の日頃の氣情にも似給はず、吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はで、あの呻り叫び給ふ事よとて、打ち笑ひければ、上人が打ち笑みて、やとれ小法師よ、三日巳前のうりきは、叫喚泥犁の苦痛、三日巳後のうり

きは、最大微妙の法音なるぞ、慢り笑ひて誹謗正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ、小法師かへして左許り早く手の裏繰へす如くに成佛はし仕給へるにやと申しければ、さればとよ、佛も懈怠の衆生の爲には涅槃三祇にわたる、勇猛の衆生の爲には成佛一念に在りと説き給へるぞや。去りし頃、病苦の堪え難くて、次第に性情もなく惱み行くまゝに、衆生の業苦を恐れ、生前の行常を悔みて泣き明しけるが、思ひ直して大日不二の觀念に入り、目を閉ち齒を切りて、間もなく勤め進みたれば、貴とやな、いつしか病惱は掻き拭ひたる如く打ち消え、惱み臥したる形骸は、瑜伽微妙の寶印と現じ、圓らすも金剛不壞の正體を成就し、此の呻りせめく聲は、三密不思議の大陀羅尼と冥合し、寐たる床は里盧本有の大道場と打ち成り、四重圍壇の大漫荼羅は、心上に嚴然として目前に榮耀たり。嬉しや忽ち有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛の素懷をとげたるぞや。小法師原か聞き知るべき事にあらねど、かく有難き惠日に逢ひたる目出度さに、物語はするぞかしとて、嬉し泣きに打ち泣き、語られけるが、後には道業比類もなくおはしける由。其の外異國にも殊宏の湯厄、叢山の痢疾何れも病に依て道心進み給ひける人々は聞々多きぞかし。和僧達は左許りの小病にけきたなく云ひ申斐もなき有様かな。なとかは昔の人々にも劣るべきや。只今



死なんすとも、正念工夫目世度で死し給はんには、眞の佛祖の兒孫たるべきぞ。かくいへばとて、重病受けんを待て參禪工夫せよとはあらず。けなげに健ならんずる人をも、日夜に息らす、彼の人々の如く用心したらんには、十人は十人、百人は百人ながら、學道成就せざる事はあるまじきぞ。鬼にも角にも、正念工夫程貴ぶべく重んずべき事はなき事なるぞとよ。正念の端的未だ悟入なからん人々は、眞正の導師に見えて、第一に決定し給ふべし。決定あらん後は、四威儀の間、正念工夫打失せざるを第一とすべし。大慧禪師曰く、那時是打失處。那時是不打失處。於一切處。如是點檢。此は是れ從上の諸聖、正念工夫親切の様子なり。これ則ち萬古不易の正修なり。是れを直心とも、佛性とも、菩提とも涅槃とも、無位の眞人とも云ふなり。此眞人は、空劫以前空劫以後、少しも病氣なく鼻もしみたる事はなき人なるぞ。是れを法華には、久遠實成の古佛と稱歎し給へり。南嶽の隨意願行に、昔在靈山一名法華。今在西方名彌陀。濁世末代名觀音。と釋し給へるも、此の眞人の事たるぞかし。此の人を供養し、此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば、何れの病か治せざらん、何れの道か成せざらんや。佛法中には、病み疲れたる老女、瘦悴けたる老夫なりとも、正念工夫間斷無くんば、無病堅固の有力の人とす。縦ひ七尺八

尺の身材ありて、身子の骨圓かに、滿慈の辯饒にして、三經五論を講し得、五家七宗の奧義を究め盡して、力周鼎をあげ、眼裏宇を空とたりとも、正念工夫ながらん人とは、奥壘影壞の死人とする事なり。相かまへて容易に心得べからず、寔に保ち難く、寔に守り難きは、正念工夫の大事なるぞや。末代の悲しさは、人毎に名聞の心強く、利養の心盛にして、道心ありけに見せかけ、莊り立れども、正念工夫決定の人は得難き事なり。況して正念工夫相續不斷の久を求むるに、千人萬人が中に一人もなき事なるぞや。老僧十三歳にして此の事ある事を信じ、十六歳にして娘生の面目を打破し、十九歳にして出家、三十五歳にして此の山に遁居す、今年六十五に垂んとす、中間四十年、萬事を放下し、世縁を杜絶し、專一に相守て、漸く五六年來眞箇正念工夫の相續は得たりと覺えるぞ。檀那施主に輕薄追從し利養名聞を希望貪求しながら參禪工夫せんとは、寔に片腹痛き事也。往々に師學共に常住の潤澤を榮耀とし、多衆圍繞を宗風とし、辯才利口を智慧と思ひ、衣食の結構を佛道に充て、尊大美麗を道徳とし、人の信仰を法成就の時也とす。悲みても尙ほ悲むべきは、得難き人身を名聞の奴婢に賣使ひ、上もなき佛心をば安穩の塵埃に吹理ませて、此の招請彼の供養には似合はぬ綾羅絹帛を惜げもなく着飾り、得もせぬ禪道佛法を會釋もなく説



散し、無智の白衣に對しては、孔明子房が辯口を逞ふし、苦汗の財施を掠り取るには、目連童子の神通を得たり、暫時の名利を偷み求めて、因果を信せず報應を恐れず、臘月三十日、孤燈獨照、半生半死の際に到つて泣きうめき、七顛倒八狂、亂手脚の置さところなくわがき死にして、弟子門徒の面ぶせになり給はんは、違ひはあるまじきぞ。今の人々の心はへにて、禪道修行の人といはば、何國の誰か佛祖ならざるもの有るへきぞ。不思議の因縁にて、かゝる物すこき處に來りて、一夏をも明し給ふ者を、何しに惡き事教へ申すべきや。世間は知らず、老僧か破屋の内には、甘く心易き佛法はなき事なるぞ。只鬼にも角にも、修行者は吾が身を高ぶり、吾が身を重んじ、吾が身を最良する程、惡しき事はなき事なるぞや。一年根の多く來りて此の麓の里へ宛をなせし時に、愚老は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ。是れは彼等に取圍まれ、耳の根、咽へなど吹き喚れんする時に、正念王夫間斷ありや否をためし試みん爲なり。鮎にもせよ、水神にもせよ、男子たる者の思ひ立ち、取りかゝりたる事を遂げずや置くべき、仕果すやあるべきと思ひ定めて如何なる飢寒を堪忍び懸へ、如何なる風雨をも堪え凌ぎ、火の底に入り、氷の底に浸りても、佛祖の開き給ひたる眼を開き、佛祖の到り給へる田地に到りて、宗門の大事を參歇し、末後の

奥義を徹了して、十方參立の弟子を惱害し、釘を抜き楔を奪つて、以て佛祖の深恩を報答すべしとの歴劫不退の大誓願を憤發し給はば、病何れの處にか落泊せん、古徳の修行は一人として疎なるばなき事なれども、中に就て、玄沙慈明などの幾多の艱辛を歴給へるは、取り分貴く覺ゆる事なり。油断し給ひたらば、果して相似の修行者になり給ふべきぞ。但しその相似とは、似せ者と云ふ事なり。誰やの人か不足なき身に、似せ者と成らんと思ふ人はなき事なれども、好き法友の手引を受け給はず、道心深からずして、少し許りの會處などを頼みて、口を利き、人にも貴はれ給はば、見事なる似せ者なるべきぞ。操履を慎み、正念を守りて事足り給はずは、如何なる野の末、山の奥にても飢死凍え果て給ふべし。黄金は菰に包みても黄金なれば、實の佛祖の兒孫明神掌を合せて尊信し、龍天頭を低れて擁護すべきそかし、蹈ひ屈みて財産を積み重ねて、千僧の葬儀、七寶の莊嚴ありて、幡蓋目を奪ひ、道場心を驚したりども、閻王怒眼を張り、牛頭鐵鞭を撻つて相待たんは、苦々しかるべきそなど、戊の上刻より丑三の道まで物語せられけるを、傍に侍りける兩三輩只片時許りの心持にて、咸涙肝に銘し、漸汗肌を侵し侍りき。其後病中などに此の物語を思ひ出し侍れば、忽ち慙愧の心起りて病苦も軽く成り行く様に覺え候故、あらしき書き付け遣



す事、延壽堂中の人々は病中の道情の一助ともなれがしの心にて侍り。去り乍ら如上は正受老漢平生受用底の施藥にして、甚だ一味單方攻藥の冷劑なり。茲に又一方あり、尤も虚弱の人に宜し、心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり、上昇を引下げ、腰脚を温め、腸胃を調和し、眼を明かにし、眞智を増長し、一切の邪智を除くこと大に効あり、軟酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五釐、放下着はきかけ一斤、右七味じんたつ忍辱の汁に浸す事一夜、陰乾して抹す、例の過りはんにはらみ般若波羅蜜を以て調鍊し、丸して鴨卵の大きさの如くならしめて、頂上に安着す。初心の行者は、藥種如何、斤兩如何を觀すべからず、只色香微妙の軟酥鴨卵の大きさの如くなる者、我が頂上に頓在すと觀す。病者此の藥を用ひんと要する時、厚く坐物を敷き、脊梁骨を竖起し、目を收めて端坐し、徐々として身心を洵り定めて須らく思惟すべし、大凡生を保つての要、氣を養ふにしかず、氣盡くる時は身死す、民衰ふる時は國亡ふるが如しと。此の語を三復し了りて正に此の觀を成すべし、彼の頂上に安着する軟酥鴨卵の如くなる者、其の氣味微妙にして、運く頭顱の間を潤し、浸々として潤下し來つて、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腹背、脊梁骨次第に沾注し將去る、此の時胸中の五積六聚、疝癖塊痛、心にじたがつて降下す

る事、水の下におもむくか如し、歷々として聲あり、遍身を流へ潤はして下つて雙脚を温む、足心に至つて即ち止む、行者再び此の想念をなすべし。彼の浸々として潤下する處の餘流積り湛々暖め煎して、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め、是れを煎湯にして浴盤の中に盛り湛えて、我が臍輪以下を漬け浸すか如しと。此の觀を作す時、唯心所現の故に、鼻根希有の香氣を聞き、身根妙好の軟觸を受け身心共に調適なり。忽ち積聚を消融じ、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ、大いに氣力を増す。若し時々此の觀を成熟せば、何れの病か治せざらん、何れの仙か成せざらん、これは是れ養性の秘訣にして、長生久視の妙術なり。此の方始め金仙氏に起つて、中頃天台の智者大師に到つて、大に勞疲の重病を治し、且つ其の兄陳秦が必死を救ふ、澆末難遭の靈方なり。宣へなる哉、此の道今人知得する底希なる事と。老僧中頃道士白幽はくゆうに聞き、効驗の遲速は行人の勤と怠とに在る而已、怠らざれば長壽を得。道ふことなかれ、鷓林老い去て大いに老婆禪を説くと。恐らくは知音の一見して手を拍して大笑するあらん。何が故ぞ、不レ隨レ亂レ不見レ眞臣操。不レ隨レ財不レ知レ義士志。

答法華宗老尼之問書



老夫當秋より法華講演の刻み、心の外に法華經なく、法華經の外に心無しと申し談じたりしを聞き及ばれ、怪しき事に思ほして、普通を以てなりとも右の道理を申し越し、其の外にも有難き事どもこれあらば、書き附け遣はし候様にどの御事、これによつて大略の趣書き付け進じ候間、何遍も繰りかへし披覽致され、能く得心これあるべく候。成程我等常々申し談じ候通り、心の外に法華經なく、法華經の外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし、是れ即ち決定至極の法理にて、愚老に限らず、三世の如來も十方の賢聖も、極處に到ては、皆々かくの如く説き給ふ事にて、法華本文の大意は、大段これ等の趣を宣へ給ひたる事にて、此の外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども、皆體數の説にして、方便の間を出でず。至極に到ては、一切衆生と三世十方の如來と、山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と説き給ひたる、是れ即ち佛道の大綱なり。大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門有りて、無量の妙義をのべ給ひて、五千四十八卷の諸經あれども、其の中の至極の旨は、法華一部八卷の中に促り、法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は、妙法蓮華經の五字に促り、妙法蓮華經の五字は、妙法の二字に促り、妙法の二字は、心の一字に歸す。心の一字は、却て何の處にか歸すとならば、兎角龜毛過三別山。畢竟如何。欲

知無限傷春意。盡在停針不語時。さる程に妙法の一心は、展ふるときは十方法界を合容し、收むるときは無念無心の自性に歸す。此の故に心外無法とも説き給ひ、三界唯心とも、諸法實相とも説き給ひぬ。其の極處に到つては、法華經と云ひ、無量壽佛と云ひ、禪門には本來の面目と云ひ、真言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ。皆是れ一心の異名なりと覺悟致さるべし。然るに妙法蓮華經の五字、一心の源を指すと如何なる證據があるとなるば、取りも直さず直に此の妙法蓮華經の五字よきたしかなる證據にて侍り。如何となれば、妙法蓮華經とは、一心不思議の徳を讚歎したる題號にて、一心本具の性徳を指し顯はしたる言葉なり。子細は大凡手蹟にもせよ、書圖にもせよ。誰やは琴の妙を得たり、誰々は琵琶の妙を得たりと云はれんする人も、其の妙とは如何なる場所を申す事に侍るぞと問れたらん時に、如何なる辯才利口の人にて、中々言葉に演ぶる事は叶はざる事なり。去程に父子不傳の妙とて、吾か大切なる一子にさへ教る事は能はず、妙處に到つては、吾とても覺えず知らぬ處より働き出づる事なり。人々具足の妙法の心性も左の如し、只今此の文を披覽し、或は笑ひ、或は談じ、緒環の絲繰り出す如く果てしもなく、五人に逢ふても、十人に逢ふても、少しも間違もなく働きもて行く事、不思議なる有様ならず



や。然るに何物か此の如く自由には働く事ぞと、内に向ひて尋ね求むるに、聲もなく臭もなし。然らば一向に頑空無記なる物にして、木石の如くなりやと思へば、例の通り千機萬化自由自在にして、有と云はんとすれば有に非ず、無と云はんとすれば無に非ず。音語道斷、脱洒自在なる處を、假に且く妙法とは名付け給ひたる事なり。蓮華とは、蓮の泥土の底にありても、少しも泥土に汚されず、妙なる色香を具足して失はず、時を得て麗はしく咲き出づるは、此の妙法の佛心の衆生に在りても、穢れず減らず、佛に在りても、淨からず増さず、佛も凡夫にて在せし時は、一切衆生に少しも違はせ給はで、五欲の泥土に汚され給ふは、左ながら蓮の泥中に在るか如し。其の後雪山に於て、本具の心性を發明し給ひて、希有なる哉、一切衆生、如來の智慧德相を具すと高聲に唱へ給ひて、頓漸半滿の諸經を説き宜へ、三界の大導師と成り給ひて、梵天帝釋に尊信せられ給へば、蓮の泥中を出て麗はしく發けたるが如し。蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲き出すが如く、佛も無量恒沙の法を宣へ給へども、外より持ち來り給ふに非ず、凡夫にておはせし時、屹度具足し給ひし佛性の有様を其の儘に宣へ給ふ者なり。衆生にておはせし時も、成佛の本體を遂げ給ひて後も、此の妙法は少しも添減なきが如く、蓮の泥中にありし時も、咲き亂れたる

夏も、少しも變遷なきに等し、故に假り用ひて且く一心の妙法に譬へ給ひたる者なり。是れ即ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名づけ給ひたる儘なる證據ならずや。さて又經とは常と云へる字義にて、常住佛性の義を顯はし給ふ者なり。常住佛性とは、此の心性は佛に在りても増しもせず、衆生に在りても減じもせず、天地と同根、萬物と一體にして、曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指して、經とは説き給ひたるなり。然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讚歎し給ひたるにて、畢竟一心の異名なり。一實三名、佛を歌贊と云ふた程の事なり。然れば眞實の法華經は、手にも把れず、目にも見えざる者なるを、如何にやは受持すべきぞ。如何様に心得たるを法華經の行者とは云ふべきぞとならば、蓋し三種の根機ありて、下根の行者は、黃卷赤軸を把えて讀誦書寫解説し、中根の行者は、自心を觀照して此の經を受持し、上根の行者は、眼に此の經を見盡し、自心の面を見るが如し。是の故に涅槃經に曰く、如來目見佛性とは是れなり。法華經の行持は、大乘至極の眞修なれば、中々容易の沙汰にし非ず、易き事は甚だ易く、難き事は甚だ難し。去程に本文にも此經難持。若暫持者。我即歡喜。諸佛亦然と説き給ひて、至極大切の行持なり。天台の智者曰く、手不執卷。常讀是經。口無言音。遍誦衆典。佛不說法。恒聞法



音心不<sub>レ</sub>思惟。普照<sub>二</sub>法界<sub>一</sub>也。これ真正誦經の様子なり。試に問ふ、卷を執らして誦する底、是れ那箇の經ぞ、自心妙法に非ずや。思惟せずして遍く法界を照すと、是れ何物ぞ、真正の蓮華に非ずや、是れを無字經と云ふ。徒に黃卷赤軸のみを把えて、法華經なりと偏執するたぐひは、彼の藥帖上の記を誦りて、藥なりとして病を治せんと計る者の如し、大いに錯り了れり。若し人此の經を持たんと欲せば、十二時中、胸中一點の缺曇りもなく、不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云ふ。去程に捨得子の偈にも、欲<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>無爲理<sub>一</sub>。心中不<sub>レ</sub>挂<sub>レ</sub>絲<sub>レ</sub>也。かくの如きの正修は、三世の如來も、一切の智者高僧も、此の處より大悟得道し給へる事にて、萬古不易の大綱なり。一念不生、前後際斷、頓悟成佛の直路なれば、如來の此經難<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>と宣<sub>レ</sub>へ給へるも、理至極ならずや。大凡三教の聖人も、實處に到つては大段同じ、其の進修の淺深精麁に依て、得力の高下はあるべけれども、最初の一步は趣等し、儒門には此の處に至善といひ、未發の中と云ふ、道家には虛無自然といひ、神家者は高間が原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事とす、眞言にては阿字不生の觀法と云ひ、家々の祖師達の坐禪をすべし、誦經を勤め給ふも、誦みく唱へく、一心不亂、純一無雜の田地に到らしめん方便ならずや。永平の開祖も行持わらん一日は、貴ぶべきの一日なり。行

持なからん百年は、恨むべきの百年なりと宣ひき。寔にたましく受け難き人身をうけながら、何の行持の心もなく、逢ひ難き一生をやみくくと犬猫などの何の覺悟もなく、朽ち果つる如く、苦しかりし三塗の畜里へ懲りもなく立ち歸らんする事、口惜しく淺猿の境界かなど涙を落すべき事なり。然るに難きことは甚だ難しとは、我れ得て疑ふ事なし、易き事は甚だ易しとは、如何なる故ぞとならば、若し人此の經を手を放ちて行住坐臥にやすくと持たんとならば、誓つて一回法華眞の面目を見届くべしと願ひ給ふべし。法華眞の面目を一見したらん上は、咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情悉く皆妙法蓮華經と現成する故に、十二時中、此の經と冥合す、何ぞ別に持の事を用ひんや。眞の法華を一見せずして、法華經を持たんと擬するは、譬へはこゝに一人あらんに、手に一椀の水を鑿けて、こぼさじと動さじと晝夜に慎み守りて、養ひ増さんと願ふが如し。縱ひ一生鑿げ守つて十成なるも、養ひ増す事は存じもよらず、自家の飢渴も亦救ふ事能はず。彼の二利の願行に於ては、望を其の間に絶つものなり、何の用を作すに堪えんや。若し又眞の法華を一見して、此經を持つ人は、彼の一椀の水を江湖に投するが如し、忽ち三萬六千頃の煙波と混合し、徳澤を大湖と共にして、飛ぶ者、走る者、翔る者、盡く者、同く共に行きて呑まんに盡くる



事なし。眞の法華を見ざる人は、一椀の水を驚くる人の如し、他を利する事能はざるのみに非ず、自己も亦利する事能はじ。眞の法華を一見する人は、彼の一椀の水を江湖に投ずるが如し、覺えず諸佛の大寂滅海に投入して、諸佛の眞法身戒定智慧と冥合して、忽ち顛耶の暗窟を擊碎し、大圓鏡光を放出して、塵沙劫を経て大法施を行きんに、終に乏しきことなし。一見法華の功德の廣大なる事、上下四維等匹なし。人あり一切諸經論を熟讀せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。無量の寶塔を修造せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。百千の佛を造立せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。三界の秘密を學得せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。彼の黃卷赤軸のみを把えて法華經なりと偏執せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは、須らく眞の法華を見るべし。是れ實に成實不壞の高談なり。如何して法華眞の面目を徹見すべきとぞならば、先づ須らく大經團を起すべし、何物を指してか法華眞の面目とばすもぞ、自己本有の妙法の一心也と聞くからに自心を見るにしかず。自心とは如何なるものぞ、白き物とやせん、赤き物とやせん、是非々々一回見得すべきをぞ、猛く甲斐々々しき志を震つて、大誓願を起して晝夜に究め見るべし。自心を參究するに、行持は様々多き

中に、法華經の行者ならば、法華三昧の行持に超えたる事や侍るべき。法華三昧の行持とは、今日より思ひ立て、憂につけつらきにつけ、悲しにつけ嬉しにつけ、寝ても覺めても、起ても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經々々々々々々を問もなく唱へらるべし。此の首題を杖にも力にもして、是非とも法華眞の面目を見届べしと、深く望をかけて唱へらるべし。願はくは出息入息を題目にしてはしき事よと、随分親切に間斷もなく唱へらるべし。唱へて息らすんば、久しからずして心性たしかに大石などを油り居えたるごとくにて、安住不動、如須彌山の心地はほのかに覺あるべし、其の時にすて置かず、随分唱へらるべし、いつしか聞及ひし正念工夫の大事に契當して、平生の心意識情都て行はれず、金剛圈に入るが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく、忽然として大死底の人と異なる事なけん。繼かに蘇息し來らば、覺えず純一無雜、打成一片の眞理現前して、立處に法華眞の面目に撞着して、忽ち身心と打失し、本門善量、久遠實成の如來は、目前に分明にして推せども去らし。此の時に嘗て、天台の法性寂然。寂而常照の寶所に投入し、眞言の阿字不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の即心往生極樂淨土の素懷を遂げ、水鳥樹林、念佛念法念佛の妙莊嚴を目的めたり見届け、娑婆即



寂光の正眼を開き、草木國土悉皆成佛の田地に至らんとす。毫釐も相違あるべからず。然らば則ち人中天上の善果、何事かこれにしかんや。是れ即ち三世の諸佛出世の本懷なり。一遍の題目は、禪門一則の話頭と其の功異なる事なし。これ等の趣、三世十方の賢聖、扶桑八萬餘座の神慮もおはする者と、老僧が毫髮ばかりもあやふむ處あらば、何しに罪作りにくだしくしき事を齎り侍べるさや。少しも疑ひ給ふべからず、此の上猶又怠り給はずは、禪門にいはゆる左手を握つて中指を咬む等の心地も、次第に明かなるべし。今時往々に道ふ、參禪無益なり、話頭して什麼かせん、即心即佛の直指なれば、念の起るをも懲へす念の止みたるをも喜ばず、山賊の白木の合子、只生れつきたる自性の儘なるがよきぞ。漆つけねば剝色こそ無ければとて、日々徒らに盲龜の空谷に入るが如し、去て以て足りとす。これには是れ天竺の自然外道の所見なり。恁麼にして佛心向上の宗旨なりと稱せば、七村裏の土地も、亦掌を撫して大笑すべきとかし。何か故ぞ、これ總に長沙の謂はゆる國神を認得する底の癡人ならずや。楞嚴に賊を認めて子となす、終に元淨明の體を知る事能はずと呵せられしは、これ等の部類なり。殊にしらす、如來は四果の聖者の諸漏已盡し、我法の真理に達し、神通具足し、名稱普く聞え給ふをさへ、禪を知れずとは許可し給はず。故に經

曰く、我弟子大阿羅漢。不能解此義。唯有二大菩薩來。應解此義。とも説き給へるものぞ。見性の功さへなく、妄に自ら尊と稱す、是れ何の心ぞや。人は只兎もあれ、萬縁を抛擲して唱ふるに越わたる事はなき事なり。去ながら題目ばかりの利益なりと偏執し給ふべからず、眞言に限らず、淨土に限らず、何れも優劣あるべからず。淨家の人々は、專唱稱名の功力に依て、是非々々一回唯心の淨土巳身の彌陀の妙相を見届けや置べきと、決烈の大志を憤起し、頭燃を救ふが如く、間もなく唱へ進みたらんに、佛も去。此不遠と説き給ひたる者と、なごや七重の寶樹八功德池の有様を見届けずやはあるべき。眞言の人々は、陀羅尼微妙の威力に依て、是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと、禪門に於て一則の話頭を擧揚するが如く、精進勇猛の情志を振つて練たらんに、高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者を、なごかは彼金剛不壞の正體を磨き出さずや有るべき、何れも死後を待て利益に預らんと打も延ばし給ふは、不覺油斷の至り覺束なきものをかし。遠き事とて歎き給ひそ。八重の潮路を隔てたる唐土天竺の事を見給へ聞き給へと云はんにこそ、遠き事とは歎くべけれ、自心を以て自心を見る、吾か暗を以て吾か暗を見るより近き事には侍らすや。深き事とて恐れ給ひも。九淵の潭の底、千尋の海の中なる物を見給へ聞き給へと云はんにこそ



深き事とは恐るべけれ。吾か心を以て吾か鼻を以て吾か鼻を嗅くより近き事には待らずや。世は末世なれども、法は更々末世ならず。末世なりとて打ち捨て顧み給はずば、廣の山に入りなから自ら飢凍を苦しむか如し。末世には去事は及ばぬ事とな恐れ給ひそ遠くは惠心院の僧都、近くは赤澤の即往、山城の圓愚、何れも稱名の力に依つて、右の業徳を遂げ給ひたるぞかし。法然上人も此の望は深くおはしけれども、先達なき故に、翼短うして長空に翔けらざる心地なりと宣ひき。末法渾季の臉にや近代惡しき風俗起りて、出家も在家も見習ひ聞き習ひになりて、今時妙法の佛心などを見んと計るは、鰻か木にのぼらんとする心地なるぞとて、間々ど一生を過ぎ行く事、淺ましき心ばへならずや。是れは左なから過分の田地を譲られたりし百姓の子共數多在るべきに、其の内一人頼朝不肖にて、然も口利て小賤しげなるか、曰く、今時吾々風情の柔者共が、先祖昔の入々の眞似美して、農業耕作などして大勢の妻子眷屬など養育せんと計るは、及びもなき事なり。それは左なから家鶏か鷹の眞似して、鶴と組で落ちんと羽つくろいするが如く、鰻の鯉魚の眞似もて漉上りせんとて頭さし伸ふるに似たる事を片腹こそ痛けれ。左しもて行きたらんには、必す鎌にて氷をなん呑むべきぞ。存じもよらぬ事なるそとよ。つもりても見よや、和殿原や我等

如きの疲孩子者どもが、芝野を見るか如くなる草生ひ茂りたる田地を、草刈り切り立て耕し水載せ鋤き上げ種子かし、早苗し植えつけ、耘り刈り干し、こぎわけ糞すり、繩ない菰わみあげ、高わぐらして鉢め見んする事、あだや通途にて送けらるべき事かは。夫は昔物語なるそ、あらの様なる端立なるそや。夫よりは安々と扱入袖して、世渉るすべはある事ぞや。かなたこなたあるさても五日三日宛の日は送らるゝそかし、肩有りて着すと云ふ事なく、口有りて食はずと云ふ事なしと聞くものを、殊更某の國、何某の族は、仁徳厚くおはして、我々如き者をば扶持し給ふと聞くなるに、果はそこへなん行くべきぞ、斯許より事のあるに、なに欺く事の有るべし、手足をなん動かして、自力にて口過せんとかゝるは、又なき癖事なるぞ、心ばかりいなしそ、初めより下手に組むがよきぞ、働きたてなしぞ、かせぎ振見するな、一二枚ある古着も脱ぎすて、菰をなん被りて、我々は告ぐる方もなく、居立に迷ひたる貧窮下賤の者に侍り、哀れ助け給ひてよと、打泣く往きたらんには慈悲深き世の中なる者を、なほ口一つをかりすぎ兼ねる事のあるべき、少しも疑ふ心なくて、兎せよ角せよと教へられて、悦び勇みて誰をも兼てより斯なん思ひつる事よとて、生れもつかぬ貧者に成りて一生を送るに似たり。これ等の輩を自暴自棄の人と云ふ。臨濟大師は



甘作ニ下劣人一呵責せられたり。是れは左ながら魚の水中にありながら、我等風情にて水な  
 を見んと計るは及びもなき事なりと歎き、鳥の長空を翔りながら、今時長空なぞを見んと  
 計るは存じもよらぬ望なりと悲むに似たり。殊にしらず、十方法界の中、真如ならざる國土  
 なく、妙法ならざる衆生なき事を。惜むべし、唯心の妙法、寂光淨土のまつた、中に住み  
 ながら、生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無  
 間なりと泣き悲む事、皆是れ目前に充ち溢れたる妙法の佛心、前後に澄み湛えたる法性をば  
 及びもなき事なり、存じもよらぬ望みなりとて打ち棄て、筋なき妄想情識の料簡を頼みて、  
 空しく暮せるより起る事なり。惜みても惜むべきは、三界無比の妙法、醍醐上味の經典な  
 れども、教の如く修行する人なき故に、よつと文車みだのに稱載せたる世の並々の書籍と共にあり甲  
 斐もなくやみくみと打ち果て、穢土淨刹と見違ひ、三塗六趣と思ひ成す事、歎の中の歎なら  
 ずや。問ふ、教の如くとは、如何なる教をか指すや、四安樂の法門か、五種の法師の行持か。  
 云はく、然らず、方便品に謂はゆる開佛知見。道故出現於世本文の經中の眼目なり。番々  
 出世の如來、無量恒沙の法を説き給へども、何れも一切衆生に佛知見を開かしめん爲めなり  
 然らば佛知見の望なくて、如何なる法を行じたりとも、諸佛の本懷に契ふことは、努め々

々これ有るべからず。開佛知見とは、一心の妙法を發明する事なり。悲みても悲むべきは、  
 今末世澆季の世の中なれば、一心の妙法の沙汰はすたれ果て、思ひくの有様なり。たま  
 く有るに似たるも、此の頃は皆々教へ事になりて、云ひ甲斐もなき風情なり。大日經に  
 も如く、實知ニ自心一と説き給ひたるものを顧みる人さへなければ。法華經の教に隨はず、妙法は  
 何地に有るもしらず、うるくとして西ぞ東ぞとて混ひたさはきに騒ぎ廻りて、佛道なりとて  
 月日を送るは、譬へば此に大福長者あらんに、初め多少の艱難を経て限りもなき田地を切り  
 開きて、爾等も此の田地を耕して我が如く大福長者になれとて、大勢の子供に優劣もなく  
 過分の田地を譲り與へたりしに、父の教に隨はずして、何れも他國に流浪し人の門戸に傍  
 ひ乞食するもあり、我は鏡ときなりとて、瓦を把て磨き行くもあり、粟稗の鳥を追ふてすく  
 み居るもあり、長者の子なりとて、自身は乞食非人の體にて、みだりに人を輕しむるもあ  
 り、田畑の帳面ばかり毎日繰りかへして、田畑の有處も知らぬもあり、帳面さへあれば、恐る  
 る事はなきとて、恣に悪行を行するもあり、我は長者の作法を知りたりとて、飢渴えて  
 作法ばかりを行すもあり、田畑の有處もしらず、晝夜に田畑くくと叫ぶもあり、田地の廣  
 大なるを少し許り見付けて、大僞慢して、煙酒食肉心に任せて亂行なるものもありて、長者



の心に契ひたる子は一人もなきか如し。田地とは一心の妙法を指すなり、帳面とは諸經論を云ふなり、人の門戸に傍ひて乞食するとは、かの開佛知見の大事は、自身艱難刻苦して冷暖自知する事なるを、末世になりては人の教を受けて、正體もなき事を聞き覚えて、是れを大悟とする事なり。これは法華經の中の窮子ならずや。方等部にては、四果の聖者をさへ二乘凡夫と呵嘖し給ひしものを、人々の教へ給ふ通りの、時もなくたわいもなく、繩にもかづらにかゝらぬことならば、何しに佛は六年まで雪山に閉ち籠りて、皮骨連立し、絲を以て瓦を編み立たる如く瘦せ衰へ、蘆すゝの膝を突き貫きて、臂まで穿ち抜けたるをも覺え給はず、目のあたり雷の落て牛馬を打ち殺したるをも御覺ましまさぬ程苦吟し給ひて、初めて佛知見を開き給ひたるは、如何なる事ぞや。蓋し佛道も上古は大に難く、今時は大に易しとするか。且蘿蔔を煨し芋栗を煮るか如く、初めは硬く後には軟かなるものとするか。今時の易きか是ならば、古への難きは非ならん。古の難きが是ならば、今時の易きは非ならん。古の難きは苦吟する事は甚だ苦吟す、纒に發轉する時は、忽ち賢聖佛祖たり、那邊を透過し、今時を透過して、毫釐も觸着すれば、電轉じ星飛ぶ。今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり。望み見る時は、書圖の賢聖僧の如し。纒かに發轉する時は、依然として

困魚箱に止り跋躰囊裏に落つ、今時を透らす那邊を透らす、撥着すれば踏躰氷稜に上る、今時の易きを取らんか、古の難きを取らんか、如何に末世なればとて、いひ甲斐もなき有様なり。古人も末々は佛法も正體もなく成り果つべきを知り給ひけるにや、妙心を透紙に求め、正法を口説に付すとば、氣ねて悲み云ひ置かれたるなるべし。此の事もし紙投口傳にて濟むべくは、神光の臂を断ち、玄沙の足を傷ひ、法心は睡塵れ、法燈の涙を落す事はこれあるべからず、人は鬼もあれ角もあれ、我は是非、晝夜に問もなき首題を唱へて、眞の法華のわらわ様を見届くべきとて、親切にさへ唱へ給はり、雪山には入らず、頭は腫れずとも、決定必定自性の妙法蓮華は應はし、開け侍るべし。たゞ肝要は自心の妙法を見届はずは置まじきとて、望深き程貴き事は無き事なり。如來世尊も自心の妙法を見届け給はざりし間は、流轉常没の凡夫に少しも違ひまじきで、生死往來し給ひき、未後雪山に於て自心の妙法を見付け給ひて、初めて正體を成就し給ふ事なり。死を腫くとは、八識羶耶の無分別識を認めて、本來の面目なりと合點して妄念さへ無ければ、其の迹は鏡の如くなる佛心と。只鏡の高境を映じて、鴉は黒く鶻は白く、柳は綠に花は紅に少しも錯らす照せども、塵障も迹を留めぬ如く、時々を離れて拂拭せよと教へられて、晝夜に妄念を拂ふは、死を



〔時・勤拂拭〕神秀上座偈曰。身如菩提樹。心如明鏡臺。時時勤拂拭。勿使惹塵埃。  
 〔南岳大師〕馬祖道一禪師。待南岳懷讓大師。密授心印。蓋拔同參。住傳心法。常日坐禪。讓知法。往師處。向曰。大德坐禪。國箇什麼。師曰。國箇什麼。乃取一掃於師前。師送問。作什麼。讓曰。磨作鏡。師云。磨豈得成。鏡耶。讓云。坐禪豈得作佛耶。師曰。如何即是。讓云。如人駕車。車若不。行。打車即是。打牛即是。師無對。

磨き粟稗の鳥を逐ふに同じ、是れを識神を認むと云ふ。山河大地を照破する光明の發する事はなき事なり。此の類の修行は、昔より大唐にも間多き事なり、南嶽大師の馬祖の菴前にて瓦を磨き給ふも、馬祖に此の意を知らしめん爲めなり。去るに依て長沙大師の偈に曰く、學道之人不識眞。只爲從前認識神。無量劫來生死本。癡人喚作本來人。是の故に慈明、眞淨、息耕、大慧等の祖師、齒を切つて舐排して、親切を盡されし事なり。其の外の諸師の有様は、逐一舉するに及ばず、大凡三世十方の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖はなき事なり。是れ萬古不易の大綱なり。見性とは、法華眞の面目を見届ぐる事なり。此の望なくして種々の事して、佛法なりと心得るは、船頭もなき大船に坊童多く號ひ乘て、何地へよるべき淺きしらで、かなたへ漕ぐか好きと、此の方へ漕ぐか好きととて、思ひくくは櫂棹推したて、昨日は東の方へ潮に隨て漕ぎ漂ひ、今日は西の方へ沙に隨ふて漕ぎ漂ひ、終に海中に出づる事能はず、其の船中へ案内しりたる船頭忽ち打ち乗り、磁石を見定め、楫を把る時は、一日の内にも、思ふ淺く若く事なり。船頭とは、見性の大意なり。磁石とは、正法の指南なり。楫とは、平生の志行なり。如何して妙法の淺へば漕ぎ入るべきと云ふならば、一切の行人は、佛を求め祖を求め、涅槃を求め淨土を求め、外へくくと

漕ぎ出る風情なり、故に轉た求めれば轉た遠く、轉た尋ねれば轉た遠なり。眞正妙法の行者は、即ち然らず、自己本有の妙法は如何なる物と推し究はめて、佛を求め祖を求めず、彼の妙法は内に在りとやせん、外にありとやせん、内外中間にありや、又青黃赤白なや、是非くく一回見届けずば置くまじきとと、十二時中一切處に於て、間斷なく猛く甲斐なくしき氣勢を推し立て、流石の者が思ひ立たる事を遂げずや置くべき、仕果てずやあるべきと、寝ねても覺めても、起ても居ても捨ておかず、晝夜に點檢して、或時は打ち返へして慈歷に尋ねる底、是れ何物ぞ何物と尋ねる備は是れ阿誰とぞ進み入る、之を獅子人を咬むの法と云ふ。心の妙法は如何くとはかり尋ねもて行くを、轉法輪を逐ふと云ふ。唯だ兎にも角にも、眞事を放下して、無念無心になりて南無妙法蓮華經くく唱へ給ふべし此の外別には有難き法理の老僧が書を送るべき事ありと思はば、上もなき鐘にてこれあるべく候。南無妙法蓮華經。

延享第四丁卯曆仲冬廿五日。沙羅樹下老翁書。

右巻を布長書、披覽を六箇布侍るべし。此ら序に老居の人々も一覽せら



るべければ。法施にもなれがしの心に書き續けたるに候。至極の良は。自  
心の妙法を是非く見届くべしと思はして。絶間もなく首題を唱へ給へとの心  
に候。

老夫哉。此草書畢。竊看讀。時有二僧在子傍。是子舊友僧也。讀到法華真面目處。長  
吁曰。師復攝止時金葉那。子勃如曰。何謂哉。爾以吾草書爲黃葉乎。是金也。非  
黃葉矣。如此書。及法華本文大意書。備指以爲黃葉。非是謗法華者哉。誹謗正  
法罪累。無所容體悔。備指那處乎。以爲黃葉耶。僧低頭曰。今近遠住者諸子。各  
懷英豪才。忘枯淡坐。拋軀命。修僧舊宅。廢社。十年五歲者。廿師惡毒苦乳。  
不忍分離者也。今歲狂浪洗百園。不留一粒米。良家各欲携妻孥。竊往他方。子香  
悼。曰哉。鵲林住者。無一箇留錫。願苑荒蕪。不可過之矣。近有二僧曰。探他  
煖。寒間熱。朝寒寒底庸常下劣族。聞不諭。眞實辨道求。透過底舊臺上士者。一箇不  
去。其精進真銳。十階前月。五箇爲黨。十箇結伴。此水邊彼林下。不食不寢者。或  
五日。或十日。盡言此是守凶年飢歲佛法格式。業社古實也。瘦者如喪者。壯人。衰者

似罹重病人。凍餒困苦。鬼神亦可落淚。波旬亦可合掌。今時諸方叢林。佛閣高貴。  
僧舍嚴麗。二輪並轉。四事重備。而不顧何心哉。在貧困飢凍窮餓交煎。耳。所聞師惡  
言苦罵。口所投他粟麥糝糠。可心底事一滴亦無矣。然彼亦非所以無所容。五尺身。幾  
盡是今時叢林頭角上士也。只各急求。違過。其餘總不顧者也。子聞得大歡踊曰。且喜佛法  
大可得入時也。師亦宜提。起向上紺繩。求實參實悟上士。涉隨他意說。以第二機  
接人。大損人。必妨他悟門。有二蟲氣息。底漢子。亦不能得。如子三十年前。依師  
提携。精鍊刻苦。曠盡多少艱辛。見得本有佛性。徹了法華真面目。於今念三千妙理。  
三諦即一奧義。毫釐無二疑。師亦以吾爲見得法華真面目。許可矣。子亦心竊謂。天下  
既定矣。近頃聞師評唱碧巖錄。恰如田夫杏立階下。聞中書堂上諸君公議。如響者張。昨  
窺湘水佳景。似靈者秋耳聞洞庭雅樂。於此大失力。漸汗滴腋。傷淚滿胸。從前苦  
修。似不立尺寸功者。初謂吾得力與師一般。今以子擬師。如疲羊指駿驥。稱吾  
父。似撥蓬指神龍。道吾師。心竊以師爲賺吾者。悞々不樂。師今又書法華真面目  
事。一見怨恨乍發。故言又是包止時金葉。不亦宜乎。住菴諸子亦今往々有此歎息。况  
師亦指諸人辛勤所得稱。棺本裏。子曰。寔有其事。嗟子來進。備見老松秀。丘壑



度。技術術。九。根盤盤。三。泉。上有二百尺絲。下有千歲苔。勢如蛟龍欲躍。暮上長空。下有青々一寸松。酒殿甲子立。指可拔。爪可截。指此二物。問他曰。是什麼。他必言。共是松也。唯在積歲月養與不養而已。莫言歲月是可也。倘若守一箇死棺材。作鬼家活計了。縱雖積重難年。堪作甚麼用矣。古有張氏子。兄稱張五。弟曰張六。兄弟素。遠往百里。中路各拾得金一錠。大歡踊。而後索居互不知。死生者。蓋三十餘歲于此矣。六思其兄事。尋逐四方。認得其兄所在。沓來相訪。望其兄室。水磨列鳴。數車轟過。牛馬列槽。家鷄滿。簫竿遠流。歌聲抑揚。有佳賓往。有高客來。六驚恐不能直趨門。折腰屈膝。畏々出名刺。雙童來迎。容貌秀麗。態度高雅。踟躕從進。屋壁麗堂宇美。如入康寧室。似上石奴堂。魂蕩股戰。不知所坐。少焉。張五被婢妾扶。挑錦帳出。侍女圍羅。綺羅驚魂。繡紋看目。金爐吐三花芳。玉佩流百禽香。頭穿紅羅帽。肩掛紫錦袍。坐綠熊茵。凭紫檀机。香眸如虎。抗肩如鷹。六一見不覺頭到地。身體委縮。啼泣不休。不能舉頭正視。張五徐徐告曰。吾弟何來晚矣。胡為其如此耶當哉。六拭淚畏々問曰。吾兄今仕何侯。受誰家恩顧。如此尊大。如此富貴哉。張五曰。我非所以為人臣者。我非所以受人恩顧者。我者昔者拾金者也。

六曰。兄所拾其數為幾百箇金哉。大車重積者乎。巨船滿載者乎。天所墜乎。地所埋乎。遠忘底為誰耶。張五曰。不然。三十年前我與備於何某路上所拾者也。六曰。怪哉。縱一錠金而得此富貴也。六於此乎大感矣。恐候白黑之流亞乎。盜賊之都屬乎。若果而然者。我疾辭出。出謀運九族難。豈坐而待死亡者哉。張五聞之笑曰。備向所拾者。今其何處在麼。為博奕失者乎。且羅花酒賊者乎。六曰。宜哉。見我郎落。我兄甚怪也。願避左右。吾有一言。密々告之。張五機自擊。妻孥皆退。六畏々近進曰。吾昔博奕。及願花柳者乎。吾貧不失金。吾瘦為誰金。吾兄向不言哉。備能保護。莫亂費用。吾以不負吾兄命為足者也。張六既自得彼金。十重包裹。會重保護。如懷和珠。似持夜光。行亦携歸亦携。蚤莫恐盜竊難。三十年未曾放心眠。恐人窺知。絕友避交。故為貧窶人。肩掛百緞錦衣。首穿千補烏帽。人皆樂吾不願。吾却以此為幸。恐費金盡。妻孥亦不養。常獨子而往。獨子歸。常無人緣處。尋舊舍。求破廟。眠。絕不入客店。宿。會無精糧飽。常傍人門戶乞。久立不與。希歌而已。彼金今在此。願左右再三。飽腹無人。願弛垢膩破布囊。再三推戴。解十重包裹。願左右出金。示之曰。兄拾于今在麼。願出紹舊交。張五笑曰。三十年前別備不久。而打失彼金。



了也。六劫如面熟見。張五面。且願吾身。曰。兄失也。吾誰也。吾誰也。兄失也。兄失也。失兄者如。是算大也。誰吾如。此貪凍也。或張目。或攢額。板齒咬唇。沈吟不休。少焉曰。誰非而窮餓。棄是而豐饒乎。雖後我亦棄乎。願聞棄之之道。張五大笑曰。備所拾金而劣。黃葉。非不能清身。却窮餓其身。傷賊其心膈。若包黃葉。來往不重。不須現。貧囊。在茅舍裏。養妻子。高枕睡臥而已。備所護所以棄之之道也。我所棄所以護之之道也。我初得金。別備後行。揚州。以金輕於黃葉。放大買鹽。賣鹽不足。束其息。大買綿絮。賣綿不足。放其息。大買麻絲。賣麻絲不足。放其息。大買粟米蔬果魚肉。放人於吳楚蜀魏間。山海珍水陸美。普載聚開。大店八九。巨商三百人。鐘鳴鼎食。大凡握錢入張五門者。糟糠菜新。鹽醋酒醬無不備於此。積財巨萬。狹陶朱不肩。備額。倉庫廩廩。並列立。求千陌膏腴地。買得松杉山梓楠苑數十。今古居於此處。是所以吾向輕於黃葉金粟之道也。六立再拜曰。我兄萬歲。欽莫無病疾乎。兄拾似拾久動護。小人謹似謹久勤拾。拾護互動。利害大異。定知入智者手。則黃葉亦真金也。若愚者手。則真金亦黃葉也。自恨三十年橋心肝盡氣力。實不立方寸功果。放聲哀號。參學亦如斯。初備所得即是人人本具性。唯有一乘法華真面目也。我所得亦人人本具性。唯

有一乘法華真面目也。此言見性。是性初從見道。終到種智成就。毫釐無變遷。如鑿大冶精金。故言初發心時便成正覺。敎家此言十住初住。轉有最後重關。誰知祖庭猶隔天涯。在焉。往々此一片所見。乃曰。我今既向朕兆未發以前佛祖未與之處立。若理全無。生死無涅槃。無煩惱。無菩提。一代藏經拭不淨。故紙。菩薩羅漢如廁。參禪學道閉妄想。古則公案眼中翳。若理無今時。無那邊。不求佛。不求祖。懶飯困。有何所欠少。者般見解。佛祖亦不得醫。只日日求安閑處。今日只恁麼死鴛鴦地。明日亦恁麼死鴛鴦地。縱恁麼歷無量劫。依然只是一個死鴛鴦。地作什麼用。如來此比亦顯野干身。蠢爾阿含。蚯蚓智。淨名曰。魚芽敗種部類。長沙此言。百尺竿頭不動人。臨濟言。湛々黑暗深坑。是言見地不脫。所謂機不離位。墮在毒海者也。只執一片所見。措磨淨盡。錯一生了。如彼張六懷一錠金。困倦逼迫去死十分。慈明。黃龍。真淨。晦堂。息耕。大惠。諸老盡力擯斥。救不得矣。老夫初七八歲時。隨母入三教院。聞僧講。摩訶止觀中地獄說相。其僧有辯才。讀叫喚無間。魚熱紅蓮苦境。恰如目見。一堂緇素盡寒毛卓。歸來計子平生殺業。如無身所置。動止悚然。肌膚粟々。竊把普門品與大悲神咒。晝夜讀誦。一日共母入浴。母求湯熱。使婢頻添薪。浸々火氣衝肌。浴盤大鳴。乍想念



地獄事。放聲悲號。哀聲動四隣。從此竊求出家。父母不許。常行寺誦經書。十五歲而回家。自誓曰。願不見肉身而火不能燒。水不能溺。底得力。死不休。晝夜孜孜。誦經作禮。於病惱或針灸間。點檢其痛痒無與平生異。心甚不歡。曰。我既背父母出家。未見方寸功果。我聞法華一代經王。而鬼神亦欽。往々幽冥苦界人。託人求救。必言法華。熟誦。佗人讀誦。且拔其苦患。况自身讀誦。且又經中必有甚深妙義。於此親把法華經窮見。除唯有一乘諸法寂滅文。餘皆因緣譬喻說也。此經若有者殺功德。六經諸史百家書亦可有功德。豈特此經云哉。大失懷素。實十六歲之時也。十九因讀正宗贊。巖頭和尚末後為盜賊被害。叫聲徹三千里外。予謂徹甚微。如何不免盜賊戈矛。嗟如巖頭和尚者。僧中麟鳳。佛海蛟龍且然也。死後豈得免獄奴杖子哉。若果而爾參禪學道何益焉。佛法怎麼虛誕也。悔者以身投此妖邪隊裏。今夫可如何。於此大懊惱。不食三日。永絕望佛法。見佛像經卷如泥土。專讀俗典弄詩文。少忘憂愁。二十二而往若州。交虛堂勝會乍省覺。其後在豫州。讀佛祖三經大猛省。晝夜提起無字。片時不休。只愁不得純一無雜打成一片。又愁不能痛癢恒一。二十四歲春。在越英巖僧舍苦吟。晝夜不眠。寢食共忘。忽然大疑現前。如萬里一條河水裏凍殺。胸裡分外清潔。而

進不得。退不得。癡々呆々。只有無字而已。雖陪講筵。閉師誦唱。如數十步外面。聞堂上講論。或如在空中行。如此者數日。乍一夜聽鐘聲發轉。如響泮水聲。似推倒玉樓。忽然蘇息來。自身直是巖頭和尚。貫通三世。不損毫毛。從前疑礙。盡底冰消。高聲叫曰。也大奇也大奇。無生死可出。無菩提可求。傳燈千七百箇高藤。不足消三德。於此慢驢山笠。橋心潮湧。心竊謂。二三百年來。如子痛快打發底不可有之。荷一段所見。直行信陽。謁正受老師演所見。呈偈。師左手握言偈曰。若箇是學得底。那箇是見得底。伸右手。子曰。若有見得底可呈師。須吐却作嘔吐聲。師曰。趙州無字。作麼生見。子曰。無字有甚麼所著手脚。師以指拗子鼻曰。多少著手脚了也。子擬議。師大笑云。此守藏窮鬼子。子不願。師曰。備怎麼為是那。子曰。有甚麼不足處。師舉南泉遷化話。子掩耳出。師曰。團團。子回頭。師曰。此守藏窮鬼子。從此大凡每見子。盡言守藏窮鬼子。一夕。師納涼坐樓欄。子亦呈偈。師曰。妄想情解。子高聲叫曰。妄想情解。師即捉住子。瞋拳三三三。終突落堂下。時五月四日夜霖雨後也。子在泥土上。偃臥。氣息共盡。去死十分。動亦不得。師在榜上呵々大笑。少焉蘇息。起來作禮。通身汗流。師高聲叫曰。此守藏窮鬼子。於此親參南泉遷化話。寢食共



癩。一日有些省覺。入室種々下語。不哭。只云。守藏窮鬼子。予心竊謂。辭去往。佗方。一日。往城下。托鉢。有狂人欲把苕帚打予。予不覺打破南泉遷化語。其餘數段因緣。疎山壽塔話。大惠荷葉團々頌。自謂盡打發。歸來讀所見。師總不可否。只微々笑而已。從此休言守藏窮鬼子。其後省悟。大歡喜者三兩回。所恨語路有到有不。到。平生如燈影裏行。歸來待病於如何老人。一日看讀息耕老師送南浦和尚一偈。相送當門有。情竹。為君葉々起清風。大歡喜如獲。夜光於暗路。不覺高聲曰。我今日始入得語言。三昧。立禮拜矣。其後行脚。路歷勢陽。一日衝大雨行。雨水到膝。廓然深入得荷葉團々句中。歡喜不得立。放身倒水中。忘却起立。腰包皆浸。行人怪立扶起。予呵々大笑。人皆以為狂矣。其冬在泉州信田僧堂夜坐。聽雪有得所。翌年在溪東靈松僧堂。經行。忽然打失從前多少所得。大歡喜。二十二歲住此破院。一夜夢吾母以紫絹衣附予。提起覺兩袖甚重。探之各有二面古鏡。經可五六寸。右手者。光輝透徹心肝。自心及山河大地如澄潭無底。左手者。全面無一點光輝。其面如新鑄未觸火氣者。忽然覺左邊光輝勝右邊百千億倍。從此見萬物。如見自己面。初了知如來自見佛性。後來因取碧巖鏡讀。與從前所見大異。其後一夜把法華經讀。乍徹見法華圓頓真正奧義。

打破最初一團疑悶。覺得從上多少悟解了知大錯了。不覺放聲啼泣。須知參禪甚不容易。今雖放蕩老懶。到毫釐無所可取。自覺四十年終不空送却光陰。非是所以張五在揚州放金銀辛者哉。予亦效吾予。擔一日所見。指磨淨盡錯一生了。與彼張六死守一錠金。窮餓其身。困煎其心肝。何得異。天竺此言。二乘長者窮子。漢土此言。默照邪禪流類。是皆不知菩薩威嚴。不明佛國土因緣之所致也。今時往々擔一片空理。會佛會祖。會古則公案了。盡言如捧如陀羅尼。如一唱。大可笑。勉旃諸子。佛道深遠。須知如海轉入轉深。似山轉上轉高。若欲知自家得力當否如何。先須參南泉遷化話。昔二聖教秀上座去問長沙岑禪師。南泉遷化後作麼生。沙云。石頭為沙彌時見六祖。秀云。不問為沙彌時。南泉遷化後作麼生。沙云。使伊尋思去。秀云。和尚雖有千尺寒松。且無抽條筍。長沙無語。秀歸舉示三聖。三聖不覺吐舌曰。勝臨濟七步。此語若得見得分明。許爾得小分相應。何故。無人獨語者。其賤如鼠。以何為驗。鼓牙三下。合掌曰。漸。



# 遠羅天釜續集

白隱禪師

答念佛與公案優劣如何問

先書に正念工夫相續不斷の助に念佛せよと勸むる者も是れ有り、如何。趙州の無字と一般なりとせんか、將た又別に仔細ありとやどの御尋、叮嚀なる思召に候。人を殺すに刀を以てする有り、鎗を以てする有り、一般なりとやせんか、將た又別に仔細有りやと問はんに、如何が答へ玉ふべきや。刀鎗器は異なりと云へども、其の殺すに到つては、豈に兩般有らんや。去る程に忠信は碁盤を振上げて敵を追ひ、後塚は船槳を引きけつして人を打ち、呂后は鳩酒を執つて如意を毒害し、玄武は琴絃を解きて妓女を殺し、關羽は龍刀を提げ、張飛は蛇棒を取る、刀鎗は兩般なけれども、只執る人の利鈍を異偽との兩般に在るのみ。學道も亦然り、或は定坐し、或は誦經し、或は呪咒し、或は念佛し、努力力めて前後際斷の處に到つて、無明の暗窟を踏翻し、五欲の凶賊を還殺し、大圓鏡光を擊碎し、四智圓明の正位を透過し、大事を成辨するに到つては、行持は縊ひ品異なれども、その所證に到



つては、豈に兩般有らんや。茲に人あり、力量骨格互に相おなじ、各各堅甲利兵を執つて相戦はんは、一人は志念堅からず、或は疑ひ、或は恐れ、或は戦はんとし、或は走らんとし、或は死生決せず、進退定まらず、眼目定動し、歩驟正しからず、しどろに成りて相進まらん。一人は危亡を顧みず、強弱を觀せず、一身を必死の地に擲着し、目を据え齒を切つて、大精神を奮つて斷斷として相進まば、此の兩體の勝敗は、掌を見るが如けん。十騎にして千騎に對し、百騎にして萬騎に對すといへども、百戰百勝、目前に分明なり。譬へば兩陣相對せんに、一方は金銀を以て募り、備ひたる雜兵十萬、又一方は仁慈を以て志を合せ、忠義を以て鍊り鍛ふたる精兵一千、此の千騎を放つて彼の十萬に當てんに、惡虎の群羊を驅るが如けん。是れ他なし、只た大將の賢と不肖とに在るのみ、豈に勢の多少、器の長短に依らんや。工夫も亦然り、一人有り、常に趙州の無の字を擧揚し、一人有り、常に專唱稱名せんは、無の字を擧する人は、工夫純ならず志念堅からずんば、續ひ擧して十年二十年を経るとも、何の利益か有らん、稱名の行者は、打成一片に稱名し、純一無雜に專唱して、穢土を觀せず、淨土を求めず、一氣に進んで退かずんば、五日三日乃至十日を待たずして三昧發得し、佛智煥發して、立地に往生の大事を決定せん。往生とは何と云ふや、

畢竟見性の二着なり。經に曰く、我が國に生れんと十念唱へたらん人の、我が國に往生せずんば正覺を取らじと誓ひ玉ふ。我が國とは何れの處ぞ、目前歴歷たる底の本具の自性に非ずや、見性の人非ずんば、たやすく見る事能はじ。若し然らずんば、今時諸方淨業の人人、日日にとなへ唱へて、千念萬念千億萬念す、然かして往生の大事を決定する底は、半箇も亦無し、知らず、無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんが、殊に知らず、一念直に是れ往生極樂園、豈に十聲を待たんや。此の故に佛の宣玉は、勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に亘ると説き玉へり。若し無の字と稱名と兩般の看を成さば、須らく知るべし、盡く是れ邪魔外道の種族なる事を。悲しむ所は、今時淨業の行者、往往に諸佛の本意を知らず、西方に佛在りとのみ信じて、西方は自己の心源なりと云ふ事を知らず、念佛の功課に依り、虚空を飛過して、死後西方へ行かんとのみ覺悟す、一生苦吟して往生の素懷を遂ぐる事能はず。殊に知らず、十方佛土中唯有一乘法なる事を、此の故に言ふ、佛身法界に充滿して、普く一切群生の前に現すと。若し佛西方にのみおはさば、一切群生の前に現じ玉ふ事能はず。若し一切群生の前に現せば、特々西方に限るべからず、悉く哉、如來清淨の眞身は、煥爛として目前に分明なる事、掌を見るが



如くなれども、惠眼既に盲たる故に、都て是れを見上つる事能はず。世に言はずや、光明遍照十方世界と。蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず。悟るときは、十方世界草木國土を全ふして、直に是れ如來清淨光明の眞身とじ。迷ふときは、如來清淨光明の眞身を全ふして、錯つて十方世界草木國土とす。此の故に經に曰く、若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、此の人邪道を行して如來を見上つる事能はず。眞正淨業の行者は即ち然らず、生を觀せず、死を觀せず、心失念せず、心顛倒せず、となく唱へて一心不亂の田地に到つて、忽然として大事現前し、往生決定す。此の人を指して眞正見性の人とす。自身直に是れ六十萬億那由佗恒河沙由旬の彌陀、七重の寶樹、八功德池、心止に昭昭として、目前に煥榮たり、山河大地、萬象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海たる事を徹見す。專唱稱名、一念不生、放身捨命の端的を往と云ふ、三昧發得、眞智現前の當位を生と云ふ。如上の眞理煥然として、當處湛然、一毫をも隔てず、涌出するを來迎とす。來迎往生、眞下不二、是れ見性の當體なり。元祿の頃に二人の淨業者あり、一人を圓忍と云ひ、一人を圓愚と云ふ、二人志を同ふして專唱念事なし。圓忍は山城の人也、唱念純く、果して一心不亂の境致に到つて忽然として、三昧發得し、往生の大事を決定す。茲に於て、

の初山に上つて獨落老人に謁す。湛問ふ、備は是れ何れの處の人ぞ。忍曰く、山城。湛云ふ、何れの宗をか業とす。忍曰く、淨業。湛云ふ、彌陀如來に多少ぞ。忍曰く、某甲と同年。湛云ふ、備年多少ぞ。忍曰く、彌陀と同年。湛云ふ、即今何の處に在る。忍即ち左手を握て少く揚ぐ。湛驚て曰く、備は是れ眞箇淨業の人なりと。圓愚も亦欠しからずして三昧發得し、大事決定す。元祿の初め、豆州の赤澤なる處に行者あり、即往と云ふ、彼亦た稱名の力に依り大に得力あり。予は向かに此の兩三箇の傳を記す、逐一枚舉するに暇あらず、是れ即ち專唱稱名得力の現證なり。須らく知るべし。話頭も稱名も、總に是れ開佛知見道の助因なる事を。開佛知見は、諸佛出世の本志なり、後來且く方便を設けて、往生と名づけ見性と云ふ、世にこれ兩般有らんや。是れ等の意を見徹せざる故に、禪者は淨業の行者を見ては、無智昏愚の凡夫、見性の大事有る事知らず、妄りに唱へて白晝に千萬億の刹土を飛び過して、極樂國土に往かんとす、恰も跛龍の身づくろひして、唐土へ飛はんとするか如し。殊に知らず、千萬億土は、十惡入邪佛智開明の曉、十惡入邪乍も氷消して、當處即ち極樂國土なる事知らずと云ふて輕賤す。淨業の行人は、禪門の諸子を見ては、如來他方の天宮を信せず、自力買高の我慢を主張し、大悟して生死を出でんとす、片腹痛き



〔四味〕 華嚴、阿含方等、般若、法華の五教、乳、酥、生酥、熱酥、醍醐の五味に約したることを略經に見ゆ。

風情ならずや、未代下根の我我が及ぶべき事かは。左ながら家業の朝鮮へ翔つて、魔と羽節を較らべんと羽づくろいするに似たりと慢侮す。法華經の行者は乃ち曰く、吾が經の如きは、三世の諸佛出世の本懷、一切の如來成道の直路なる醍醐上味の妙經を指し置き、稱名參禪何の用ぞ、利さば妙經轉讀の法師を見ては、唯一乘の圓解を發せよ、諸法實相の知見を開かず。只た毎日わむのみ叫びて、偏に春の蛙の畔にむめくに似たりなむ舌長き雜言、如阿梨樹枝の金文も顧りみざる愚人、皆是れ邪魔外道の所行なりと廣り恨む。愚に知らず、法華は阿含方等四味の階漸を過し開佛知見の至要を演ぶ、此の故に本文に曰く、開佛知見道故出現於世と。正に知るべし、圓解の煥發を以て、出世の本懷とすることを。然らば則ち參禪も念佛も及び看經誦經をさへに、盡く是れ見道の補助にして、行路の人の杖の如くなる事を。杖に藜杖あり、竹杖あり、藜竹品異なりといへども、其の行を扶くるに至つては一なり。言ふ事なかれ、藜は可にして竹は不可なりと、若し夫れ行客心屈し、體疲れて起つ事能はずば、藜杖竹杖何の用を成すにか堪えんや。參禪も亦然然、只た肝心ば行者勇猛精進の一念に在るのみ。云ふ事なかれ、話頭是にして稱名不是なりと。行人若し勇銳の志無くんば、稱名も話頭も、替者の眼鏡、法師の櫛貯へ、果して是れ何の

用ぞ。茲に數百人あらんに、帝都へ行かん事を願ふて、各々糧を包んで出づ、先達好らずして、錯つて遠境邊土虎狼充滿の曠野に留つて、徒に日々杖の長短を争ひ、行装の可否を論じ、路費の多少を計りて、杖々とのみ唱ふるあり、路費々々のみ叫ぶあり、終に一步をも進む事知らず、空しく歲月を送りて歳衰へ體疲れて、果ば虎狼の爲に獲られ、遠路邊境の閑神野鬼と成り果るに似たり、終に帝都に到る事を得ず。只た肝心ば杖子を持はす、行装を論せず、一氣に進んで退かず、速かに京師に到るを以て賢なりとす。若し今時に傲つて生前に佛力を頼みて、死後に西方に往かんとならば、一生三昧發得往生決定する事能はし、況んや真正見性の大事に於てをや。去る程に眞珠菴主の歌に、行く水に數かくよりのはかなきはほぞけを頼む人の行末と。蓋し斯く言へばとて、淨業を離ひ稱名を侮するにし非ず、正念工夫相續不斷見性可義の扶けにせならは、稱名はさて置き、粉撲歌にても唱へ玉ふへし。相携へて見性の秘訣を捨て置き、專唱の功勳に酬へて、佛にならんと計り玉ふへからず。其の子細は譬へば茲に萬石の大船あらんに思ふ儘に航し、順風を七合に受けて、舟歌を張り、棹拍子を揃へて水主棹取心を合せて、千尋の浪を押し切か、八重の鹽路を漕ぎ抜けんとい、毎日勇ま進むと云へども、纜を切て放たさらん限りは、中々浩波



【十八不共】 諸佛の智慧は圓滿にして凡夫二乘及び諸菩薩の共に有する

を渉る事能はず、徒に日々氣力を勞すといへども、元との湊に在らざるのみ。願ふに錢の金  
緒なれども、大船を留むるに至つては、萬夫も及ふべからず。學道も又然り、譬へば茲に  
一個有らんに、風に盤骨ありて英豪の氣を具し、神俊の才を備へ、利さへ馬祖、百丈を師  
家とし、南泉、長沙を同伴とし、勇猛の穎氣を養ひ、打成一片に進み、純一無雜に修した  
りども、命根截断せざらん限りは、因地一下の歡喜は努め々々これ有るべからず。命根と  
は何ぞか云ふや、無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり、天堂地獄、穢土淨刹を化出  
じ三途六趣を現成することば、皆是れ波が力に依れり、夢幻空華の細念なれども、見性  
の大事を妨ぐる事は、百千の魔軍にも超えたり。空華の細念ども名つけ、生死の命根ども  
名つけ、煩惱ども名つけ、陰魔ども云ふ。一實多名、子細に看來れば、畢竟我見の二法に  
歸せり。有我に依るか故に、生死有り、涅槃あり、煩惱あり、菩提あり。此の故に言ふ。  
心生すれば種々の法生し、心滅すれば種々の法滅すと。又若し我相、人相、衆生相あらば  
即ち菩薩にあらずと。佛、迦葉菩薩に問ひ玉はく、善男子何等の法をか修して、大涅槃の  
法に契當する事を得る。迦葉菩薩其の時五戒、十善、十八不共、六度、萬行、八背遺、  
無量の法門逐一擧げて答ふれども、佛總に許可し玉はす。迦葉佛に問ふ、世尊何等の法門

所にめらす。一、  
無身二、口無失、  
三、意無失、四、無異  
想、五、無不定心、  
六、無不知已捨、七、  
欲無減、八、精進無  
減、九、念無減、十、  
慧無減、十一、解脫  
無減、十二、解脫知  
見無減、十三、一切  
身業隨智隨行、十  
四、一切口業隨智  
隨行、十五、一切意  
業隨智隨行、十六、  
智慧知過去世無  
碍、十七、智慧知未  
來世無碍、十八、  
智慧知現在世無  
碍、之を十八不共  
法と云ふ。法界次  
第等に詳也。

か涅槃に契當する事を得るや。佛玉はく、但た無我の二法のみ、涅槃に契當することを得たりと。  
然るに無我に兩般あり、人あり常に心身法弱にして、一切の人を恐れ、心氣を殺して高縁  
に應じて罵れども罵らず、打擲すれども管せず、常に癡を呆々として一事を經す、一智を  
長せず、我れば是れ無我を得たりとして足れりすとす、これは是れ一個の破飯糞、泥猪の肥  
支那れて、一切無智昏愚なるがごとし、是れ真正の無我にはめらす。況んや專唱の力に  
依りて淨土へ行かんと計り、佛に成らんと擬するをや。行く底これ何物ぞ、成する底是れ  
何物ぞ、我に非ずして是れ什麼ぞ。謂ふ事なけれ、然らば則ち是れ斷滅の所見なりと。是  
れ斷なりや。是れ不斷なりや。真正見性の上士に非ずんば、輒々知る事能はず。真正清淨  
の無我に契當せんと欲せば、須らく船壁に手を撒して、絶後に再び登りて、初めて四徳の  
真我に撞着せん。船壁に手を撒すとは何ぞや。一人あり錯つて人迹不到の處に到つて、下  
無底の斷岸に臨り、脚底は壁立清滑かにして、淺泊するに地なし、進むことを得ず、退  
くことを得ず、只た一個の死あるのみ。機かに頼む處は、左手に薛蘿を捉へ、右手に蘆蕩  
にすがつて、且らく懸絲の命を續ぐ、忽然として兩手を放撒せば、七支八離枯骨また無け  
んの學道もまた然り、一則の話頭をとりて單々に參窮せば、心死し意消して、空蕩々、虛



〔八寶蓮〕一に八寶拾遺も書す、寶拾は五欲に背き、著を捨つるの義なり、此の觀を修して無漏智慧を發し三界見思惑を斷し盡くして羅漢果を證す故に轉して八寶脫とも名く。一、内有色觀外色、二、内無色觀外色、三、淨解脫具足住、四、空無邊處、五、識無邊處、六、無有所處、七、非想非非想處、八、相受滅定これなり。大集經等に委出す。

素を、高仰の座時に在るが如く手脚の着くへきなし、去死十分胸間時々熱悶して、忽然として話頭に和して必身共に打失す。是れ險崖に手を撒する底の時節と云ふ。豁然として蘇息し來れば、水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん、之を往生と名つけ見性と云ふ。只肝要は此の專念の扶けに依りて、是非是非一回、自性の本源に徹底すべきことを屬み進み玉ふへし。只千萬疑ひ玉ふへからず、見性の外に成佛なく、見性の外に淨土なきことを。三界無比の大聖、一切衆生の導師なりと謁仰せられさせ玉ふ。十力調御の世尊如來も雪山に入りて一回見性し玉はさりし以前は、流轉常没の凡夫に同じく八千度の往來は歷玉ひき。見性大悟の曉にこそ、正覺の眉を開き玉ひける者を見性の外に成佛ありと心得、見性の外に淨利ありと心得たる人は、上もなき不覺なるへし。觀世大士の世身に於て渡らせ玉ふ、二十八代の祖師達磨大師の如きは、遙に十萬里の鯨波を渡りて、諸經諸論に不足もなき漢土へ如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞及びたりければ、如何なる大事をか傳へ玉ふぞと、人々目と拭ひ襟を正して、渴仰し申けるに、只見性成佛の一事のみ授け玉ひにき、破相悟性の六門を設け玉ひたれども、畢竟見性の一處に收歸せり。然れども衆生無量なる故に法門も又無量なり、中に就て往生の二門は、韋提希獄中の惡難を救はんが爲に假に且ぐ

〔十寶〕如來、應供、正徧知、明行、足、善逝、世間解、天上士、調御丈夫、天人師、佛陀、之、を十寶と云ふ。〔總釋〕成、住、壞、空の四相の既

設け玉ふ。若し往生の二事を以て佛法の至要なりとせば、祖師只二三の行の書を讀して讀法を越す玉は、足れるのみ。云はく、尊唱稱名して淨刹に往生せよと、何を煩はしむ千華萬苦の風波を渡さ、全身を鯨觀の腮に懸けて漢土へ渡り玉ふべきや。如來もまた然り初めは淨飯王の宮中におはして耶輪陀羅、瞿夷女等の妃嬪とともは娛樂を窮めたまひ、位十善に登り、富五印を有て、末後に稱名念佛して淨土に往生し玉は、足れるのみ。何の心とや、金輪の王位を振り捨て、苦行六年安羅羅迦摩羅の仙人に賣りつかはれ、其の後雪山に入て草菴の股を突き貫くをも覺え玉はず、目のあたりへ雷の落て牛馬を打殺たるをも知り玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて、通身瘦せ衰へ玉ふ事、絲もて死を編みだたる如く皮骨連立せり、遂に臘月八夜明星を二見して、初て見性大悟、高聲に唱へ玉はく、存存なる哉一切衆生、如來の大智慧、得相を具す哉。是れより山を出て來つて、頓漸半滿の教を説き宜へ玉ふ比乏じき事なし。是に於て十號具足、果滿妙覺の如來と仰がれ玉ふ。是れ彼の善慧大士の謂是もる願は心源を悟て寶殿を開き玉ふに非ずや。洗淨未代壞劫法滅の末世も雖も佛子たる者、尊信すへき若願ならざるも、大凡番々出世の如來、歷代傳燈の祖師及び一切の賢聖、智者高僧は至るまで、其の所傳の秘訣、行持の内證を傳はし、盡く自性の法門を



あり。機動は此の  
世界壞するの時  
を云ふ。

至要とす。蓮如上人の如きも、平生往生不來迎の往生と説かれける由。願ふに是れ亦これ  
見性の真理にあり。深く海蔵の底を探つて、五十餘卷の金文を五度まで究めり玉ひ  
王侯より庶人に至るまで、生身の如來の如く仰き貴ばれ玉ひは法然上人の如きも、常に  
悲嘆し玉ひけるは、特に教内の理に曠からざるのみならず、教外の心宗を探る先達なき  
故に、索短くして深泉を汲まず、翼短うして長空に翔らざる心地なりと仰せ置れける由。  
教外の心宗とは何を云ふや、此見性の法門に非ずや。至人の一言毫厘も欺き玉はず、定  
に恐るべく敬しつべし。神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程のやんごとなき上人にも、  
斯く望みふかくおはせし見性の大事なるものを、今の人々の慢り誇り玉ふは、罪深きこと  
覺ゆれ。蓋し理は知りたまはぬ上へには、左ばかり罪科にもならぬにこそ。惠心院の僧都  
の如きは、二十四歳にして自性の大圓鏡を琢磨せんとて、横川に入り玉ひしより、晝三部  
の法華經、夜六萬聲の念佛、中間片時も怠惰し玉はず、行年六十四歳にして、初めて自身  
真如なることを證得すとの玉ひけるよし、定に貴ぶべし。自身に真如なる時、山河大地  
萬像森羅、草木國土、有情非情、同時に不變真如の全體と現出す。是れを寂滅現前、見性  
了悟の時節とす。高野の明通僧都、五十餘歳の秋、深く念佛三昧に入り玉ふ時、高野大師

正は、藕絲の袈裟并に一紙の金文を授け玉ふ。其の略に曰く、西方の一方を指す者は方便  
なり。九域を備して歸心を止む、畢命を期とし、名を稱せば、心眼即開の天益を得んこと。  
心眼即開直に是れ見性の時節なり。大凡世尊一代五千餘卷の金文ありて、順漸秘密不定の  
妙義を説き演へ玉ひたれども、畢竟此の見性の大事を由てす。故に經に曰く、唯此一事實  
餘二即非真と。さる程法三世古今の間に見性せざる佛祖なく、見性せざるの賢聖は必定  
決定なき事なり。山野七八歳より心を佛理に傾け、十五歳の時出家し、十九歳にして行脚  
二十四歳にして初めて此の見性の大事に撞着す。其の後叢林を經、普ねく諸善知識の門圃  
に跨り、博く諸經論を窺ひ、略三教の經典を探り、及び諸子百家をさへば、若し一法の自  
性の法門に超過せざるあらば、莊老列の遺徳いへども必ず信受し推し弘めんと誓ひ侍りき。  
今年六十五歳に到つて、終に見性の大事に遇きたる法理を見ず、左も侍らずは何しに妄り  
に紙墨を費して、覺悟なき事を書き付け、高麗に入れ侍るべきや。只た還すべし。見性  
の助に便りよく侍らば、絶えずも無く唱へ進ませ、心不亂の田地に到り玉はば、必定大  
歡喜の眉を開き玉ふべし。若しそれ無の字を打ち捨て、佛名を唱ふことは、專唱稱名の方  
に依りて、見性分明に直に佛祖の青蓮は徹底することを得ば是れ可なり。緣は見性明かな



〔六八の大意〕 阿彌陀佛は四十八種

る事を得ずとも、稱名の功方に依りて死後には必ず極樂に往生せん、是れ一善而得萬全の良策なりとの意なるは、早速稱名の修行を放下し、純一無の字を專執し其の如か故ぞ、是れは是れ二百年來神呪を尊奉し、異國を巡遊するの惡風俗、社禪の禮法、鄙俗下賤の邪見解なり。夫れ稱名は孤危の上にも、轉た孤危な事なれし、祖庭は險峻か上にも、轉た險峻なきを貴とす。當に要津を把定して凡聖を運せず。一言を吐くときは三賢聖勝し、四果眼眩す。一音を吐くときは鬼神恐れ走り、野鬼悲しみ哭す。木人の膚を削ぎ、石女の髓を敲ぐ、椀棗の實ありて、神後の才を具する底の英倫の學者を見るさうば、難透難解難信難入底の話題を放つて、正法眼藏を瞎却し、涅槃妙心を擲棄す。學者もまた靈毒の癆を過ぐか如く、水もまた他の一瀆をうけず、壁に咬み横に委して、竹置の窟宅を破り、智解の窟田を拔き、理盡き調場す、心死し意消して、忽然として凡に非ず、聖にからず。佛にもあらず、魔にもあらず、底の奇怪の鉤膽液を放出して、以て佛祖の深恩を報答す。かくの如き的手段を法窟の爪牙と名づけ、壽命の神符と云ふ。大に上々根機の人に利あり。中下の機は聞きて顧みず、淨家は却つて是れに反す、是れ又敬しつへきの三門なり。無量壽尊大慈善巧の真像にして、六八の大意にもつと三門の修心を具す、専ら中下の機の爲め

の醫國を立て給へり  
 〔三四の修心〕 三十四の斷結を示ふ。委に俱舍論に出づ。

に映けて、無智昏愚の業生を利し、十惡五逆の罪累を扱ぐ、攝取不捨の金言を主とし、底をか上にも轉た低きを要とし、易きか上にも轉た易きを貴とす。此の故は言ふ、續經中代の教を能く、學ばなれども、其文不知の愚鈍の身になして、只な一向に念佛せよと、佛季末代五濁亂世の邊土に、一日も欠金べからざる善巧なり。禪門は方士の長けを問はじ、ひるに等し、高僧を以て勝れり、淨家は佛僧の長けを問はじ、ひるに如し、燒香を以て勝れり、其禪院の高きを懸け、是れを懸せば、佛心向上の眞像は土を拂つ、靈滅法を淨家の煖さを嫌み、是れを懸せば、昏愚無智の都屬は惡趣を出づる事能はじ。解ははこれ佛は大醫王の如し、八萬四千種の方劑を授けし、八萬四千種の病根を拔く、佛と云ひ、救と云ひ、佛と云ひ、佛と云ふ、答々是れ病に應ずる三方なり。醫人は世に士と云ひ、農と云ひ、工と云ひ、商と云ひ、此の四民のみが如し。士は智仁兼備、相贈進歩を全して、王位を鎮護し、道徒を従へ、天下を奉山の安き、國を治め、君を養ひ、民を安んずるの民に、廣く其れを長策鏡も、其れを重んずるを貴しとす。重んずるの美器なり。商は本店を張ち、貨物を通じ、錦繡綾羅、絹帛綿布及び粟米蔬果魚肉をさへは廣くを以て好とす。細業男女、老幼貧富、其の求めに應ずると云ふ事なり。士若し商賈の廣きを羨み、財利



を賣り行ひて商賈の態を作さば、大は射御を廢し、武藝もまた忘れて笑を朋友に惹かぬ、主人もまた大に嘆つたこれに擯出せん。商も又士の嚴重なるを羨み、劍を帶び鞍馬に跨つて、戎面して突に西東に走れは、又それ大に笑はん。家道もまた廢せん。向きに謂はるる禪師得ずんば、命終の時淨土に生せんぞ、兩端に涉て修行せん大は、魚鼠得ず熊の掌もまた得ず、却て生死の業根に培ひ、命根截斷、因地一下の歡喜は、努めず、是れあるべからず。無の字を名號と稱般なしと申す中に、得力の運速、見道の淺深に到つては、少しき子細なきにしもあらず、大凡非道參立の上士、情念の滲漏を塞斷し、無明の眼膜を觸破するに到つては、無の字に越えたる事は侍るべからず。さる程に五祖の演禪師の頌に、趙州露及劍、寒霜光焰や、更擬問如何。と分、身作兩段で總して參學は疑團の凝結を以て重要とす。此の故に遺つ大疑の下に大悟あり、疑十分あれば、悟り十分有り。又佛果和尚の曰、話頭を疑はざるを大病とす。參立の人を緣に大疑現前する事を得ば、百人が百人千人が千人ながら、打發せざるは是れあるべからず。若し人大疑現前する時、只四面空蕩を地、虛豁を地に置て、生にあらざ死にあらざ、萬里の層氷裏にあるが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、分外に清涼に、分外に皎潔なり、癡々呆を坐して起つ事を忘れ、起つ

て坐する事を忘る、胸中一點の情念なくして、たれ一箇の無の字のみあり、恰も長空に立つか如し。此の時恐怖を生ぜず、才智を添へず、一氣に進んで退かざるは、忽然として氷盤を擲するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞さる底の大歡喜あらん。此の時に當つて生死涅槃猶如昨夢。三千世界海中の瀛。一切の寶聖電拂の如し。是れを大微妙悟因地一下の時節と云ふ。傳ふる事を得ず、説く事を得ず、恰も水を飲んで冷暖自知するが如けん。十方を目前に銷融し、三世を一念手に貫通す。人間天上の間、那箇の歡喜かこれに如かん。是れ等の得力は、學者親切に進まば、纔に三日五日の功にして必ず得ん。如何か大疑現前する事を得んとすれば、靜處を好まず、動處を捨てず、我か此の膺輪氣海、總に是れ趙州の無の字、何の道理かあると、一切の情念思想を抛下して、單々に參窮せんに、大疑現前せざる底は半箇もまた無けん。如土の大疑現前純一無雜の體裁を聞き及ばれては、怪しく恐ろしく氣味尋らざる事と思召さるべけれども、無量劫來生死の重關を踏破し、十方の如來本覺の內證に、徹底する程の目出度大事なるものを、左ばかりの艱辛はあらざれば、是れ覺悟是れあるべし。熟らば、願ふに無の字を參究して、大疑現前し、大死一番して大歡喜を得る底は、數限かもなく是れあり。名號を



〔西天の四七〕遊  
業尊者より達磨尊  
者に至るまで廿八  
人の祖師あり之を  
西天の四七と云  
ふ。

を唱へて少分の力を得る處は、南二箇方らでは聞き及ばすな侍り。惠心院の僧都も、智  
徳と云ひ、信心力と云ひ、無の字か麻三斤まさんの話な慈參究し玉ひたらんには、自身真如なる  
程の事は、一月二月乃至半年半年程の中には、發明し玉ふべきものを、名號羅經の功によ  
りて、四十年の精彩を盡し玉ひたるなるべし。是れ唯だ疑團のおぼするを在せざるに依  
れり。須らく知るべし、疑團は道に進む羽翼なる事を、法然上人の如き、道徳仁義精進勇  
猛暗中に靈教を披覽し玉ふに、眼の光を用ひ玉ひける程なれば、少し疑團は在したらん  
には、立地に大事了畢し、往生決定し玉ふべきものを、世は素短くして深泉を汲まざるな  
ど悲嘆し玉ふに及ばんや。さる程に楊岐、黃龍、真淨、息耕、佛鑑、妙喜の諸老をさへに  
およそ百千億の諸佛名あり、百千億の諸神呪あり、授與すべく事攝すべく法門に不足もな  
さ中は、特に此の無の字を興へて擧揚せしむ。豈に長處なからんや。願ふに無の字は疑團  
起の易く、名號は疑團起々難き故なへし、然るに禪門に於て尊稱名往生を希望する事  
は、古々爾來凋枯せず、真風未だ地に墜ちざり日は、一向になき事なま。西天の四七、  
唐土の二三、傳燈歷代の祖師、南嶽、青原、馬祖、石頭、百丈、黃檗、南泉、長沙、臨濟、  
興化、南院、風穴、普山、汾陽、慈明、黃龍、真淨、晦堂、息耕、妙喜、及び五家七宗の

〔東土の二三〕初  
祖達磨尊者より六  
祖大鑑慧能大師に  
至るまで六人の祖  
師あり之を東土の  
二三と云ふ。  
〔大雅〕大雅は詩  
經三百篇中の高尙  
なる古曲なり、桑  
間芍藥、鄭、衛等  
は皆淫卑曲なり。  
〔遠公蓮社〕晋の  
惠遠法師、廬山に  
白蓮社を構へ、精  
業を集め念佛の淨  
業を修せり。

諸老をさへに、梁陳唐隋宋元の間、六朝の大宗匠、各々孤危の宗風を立して、臂に奪命の  
神符を繋げ、口に法窟の爪牙を咬み鳴らして、たゞ宗風の地の墜ちん事を恐れて、晝夜に  
願輪に等つて、屹々として怠る事なし、破口にも往生淨土の事を論せず。悲哉、時乎、命  
乎、大雅枯れて桑間湧き、古曲墜して鄭衛震ふ、流へて大明の末に至つて、雲棲の殊宏な  
る者あり、參玄力足らず、見道眼暗ふして、進むに寂滅の樂みなく、退くに生死の恐れあ  
り、悲嘆押へ難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕ふて、祖庭孤危の真修を捨て、自ら蓮池大師  
と稱して、彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して、後學を引く、鼓山の元賢永覺大師、淨慈  
要語を造つて擊節して輔佐く、此に於て漢土に普く扶桑に溢れて、終に救ふ事無きに至  
る。假令今の世に當つて、臨濟、徳山、汾陽、慈明、黃龍、真淨、息耕、妙喜の諸老、臂  
を褰け齒を切ばり、手に唾して攘斥すと云ふとも、此の狂瀾を回へず事能はし。是れ全く  
淨業の宗旨を侮し、專唱の修行を輕賤するにあらず、禪門に在りながら、禪定を修せず、  
參禪に懶く、志行懶惰にして、見性眼昏く、禪學力乏しくして、茫々として一生を過ぎ了  
つて、命日崦嵫えんぎに逼るに及んで、來生永劫の苦輪を恐れ、俄に欣求淨土の行課を勤め、在  
家無智の男女に對し、いかめしげに長念珠かい瓜くり、高か念佛しなから、末代下根の我



等に似合たる厭離穢土の專修に超えたる事は侍らぬとよなど、頭禿ろに齒疎なるか、動もすれば殊勝けに打ち泣き打ち泣き、目をしばたきて口説き立てたるは、實々しけれども、従前曾て修せざる禪學、何の靈驗かあらん。これ等の族は、禪門に在りながら禪門を謗倒す、蠶啄の蟲の梁柱より生して、却て梁柱を割くか如し、點檢せずんばあるへからず。壯年の懶惰懈怠は、却て老來の憂惱悲嘆となんぬ。老來の憂惱悲嘆は責むるに足らず、既往をば咎めじ、壯年の懶惰懈怠は、各々宜しく恐れすんばあるへからず。大明以來、此の黨甚た多し、盡く是れ庸才懦弱の禪徒なり。三十年前さる老宿の悲嘆せられけるは、嗟衰へたる哉、向後三百年を過ぎば、天下の禪苑盡く總盤を張り木鐘を居え、六時禮設、四隣を驚かすに至らんと云ふて、落涙せられける由、寔に恐るへし。老僧最後の親切の一着あり、眉毛を惜まず、殿下の爲に擧揚し去らん、一喝の會を作す事なかれ、陀羅尼の會を作す事なかれ、況や崑崙に棗を呑み玉はんをや。作麼生か是れ親切の一句、僧、趙明に問ふ、狗子に還つて佛性ありや否や、州曰、無。穴賢。

答客難

元明禪家流往往偏稱佛。此混武夫於明月。雜燕石於隋候也。爾來天下叢林弊節相從。

滔々乎繼踵。宗風陵夷。職是之由。當此之時。非假無畏一聲。無由令多少頑皮。頭腦裂破。向也。鍋島候馳書致之問。師叩兩端而竭焉。可謂視針於霧海。遠珠於合浦者也。一日有客謂予曰。淨土一門。如來勝方便也。馬鳴稱之。龍樹著之。勝妙國土似實有之。然今卻之。其他劣機聞之。則必斷望淨土。予曰。噫。如專淨土。如來不可思議。莊嚴海中非無此事。只是鏡像幻化而已矣。雖然。破幻化之所。以爲幻化。則無幻化之可爲幻化也。但以法身幽微法體難緣。且教念佛觀形以禮贊。是無他。愚凡障重故也。若夫大心衆生。那處不是淨土。願子之所執者。莊嚴有餘等也。師之所示者。寂光理土也。宣哉子之生疑也。佛華嚴經曰如來淨土。或在如來寶冠。或在耳璫。或在瓔珞。或在衣紋。或在毛孔。如此毛孔既容世界。故的知無方處無涯畔焉。蓋如二尊者。悲願廣大爲物前驅。謂之權著幻化衣。願生幻化國乎。謂之不一起此土之本土而現無生之往生乎。要之如來出世本懷。祖師應機作用。其跡萬端其致一也。但欲令一切衆生悟入佛知見也。更無餘蘊。法華經曰諸佛世尊種種方便。種種譬喻。種種因緣。是法皆爲一佛乘。故爲諸衆生演說諸法。如是則淨土之說。豈非爲一佛乘之助耶。吾老師如上丁事告誠豈有他哉。邪其莊飾。呈之本色。譬如以真金止。



睡。苟為黃葉。他後有悔。又為元明之間。屈辱宗旨者。有所激切。即是屋裏鳴鐘之攻也。豈敢教。驅他信男信女。願生之人。而粧重自家底者哉。有人專修稱名。忽然發得二味。則不期然而必然。是佛道無二故也。子其好思。歷然可解。客曰。淨土幻化。何物不幻化。禪又幻化與。夫如佛者。積萬善於曠劫。蕩無始遺塵。以果報。故獲其土清淨。不可謂之幻化也。借如識禪門。為其所短。讚於如來。則必有所長。予曰。果報之士。實是幻化也。蓋嘗論之。大毘盧舍那五智圓明常住本體。猶如清淨摩尼寶珠。而能現種種色像。淨則淨現。穢則穢現。總是所現物也。無現而現。故非無。雖現不現。又非有。有既無。則無何據。不思議之所致。不能容有無於其間。而何物不現。所以真為森然。弗知其所以來。一虛蕭然。罔識其所以往。以色像能依。故離寶珠無色像。以寶珠所現。故離色像無寶珠。寶珠即色像。色像即寶珠。有人實體如此大寶珠。則能現不可說微塵數淨土。無不包羅。無不合著。唯是當處湛然。與彼繫念一佛國土者。奚翅霄壤哉。是故。至人無任而不寶珠。光光映徹。主伴無盡。愚凡反之。是故。無住而不色像。法法質礙。淨穢取難。是由他契證與否耳。如淨土為中下根。假緣微妙色像。而感無依珠體者也。故以希望為之媒。得見色像。斯可。寶珠不可得見也。

如禪家為上上機。直指圓明寶珠。不見有依色相者也。故以妙悟為之則。寶珠又繫碎。何色像之有。蓋禪與淨土途軌殊。禪者傳佛心印。荷擔正法眼藏者也。佛心即禪。更有何佛。正法即是宗。更有何經。所以調御師付金襴於大龜氏。燈燈相續。血脈不斷。猶瓶水相承。實為法中之王。譬之世之帝者。天之曆數在爾身。乃能以天下為己任。叔哲欽明。遊及萬機。理無不統。威無不伏。是故。天下有主。則上下位焉。萬物安焉。若一日失其主。則天下壞亂。莫甚於此。大矣哉。為主也。民無得而適焉。如事淨土者。攝取不捨於計我者相之族。巧善迴根機。蓋溫和法門也。自其珠體言之。則非幻化而何也。是故。圓覺經曰。不可說恒河沙諸佛世界。猶如空華亂起亂滅。當知一切世界皆如幻而住。是以實教所明。會以無形為淨土。華嚴曰。依真而住。非國土。生公亦曰。佛有形累。託土以居。佛是常住法身。何須國土。當知十方諸佛所有國土。悉是幻化而非真實也。由是觀之。佛道必不在於茲彰然矣。不知者自謂。禪而象淨土。虎而挾翼者也。或謂禪而無淨土。十人九蹉路。然則如彼韓墨楊申之徒。謂令帝者習於國人之業乎。匪管不能有其詐。必至亡其國焉。荷憂其道之不明。惟在痛屬密進自全其德而已。奚以象為。華嚴觀曰。有信不信法界。信是邪。凡諸經



輪中。具明三行。一者無念。二者有念。而雖皆可成佛道。優劣懸殊。參禪辨道。即無念無相念佛。此謂真如三昧也。欣求淨土。即存想計名念佛。此謂修習淨業。但能通達不二。便為真佛子矣。想道夫象之者。蓋二本故也。觀經曰。諸佛如來法界身。是心即是三十二相八十隨形好。是心作佛。是心是佛。又曰。佛身高六十萬億那由多恒河沙由旬。彼佛圓光如百億三千大千世界。如來誠諦之語。到此顯示內證。其旨甚深。名之曰恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變之妙土。如此妙土。不可以形相莊嚴也。不可以金珠修飾也。故金剛般若經曰。若菩薩作是言。我當莊嚴佛土。是不名菩薩。何以故。如來說莊嚴佛土者。即非莊嚴。是名莊嚴。又維摩經曰。隨其心淨。即佛土淨。果如此。則參禪學道。豈非莊嚴佛土耶。彼元明禪者欲自刷其造詣不精。故博會以文之。甚者不過邯鄲之步也。陽為慕之。又與恃之。又何取也。世之學佛者。孤疑莫之能正。雷同換難易。於則如來正法眼藏。復幾于息矣。可不思哉。吾師關之聯如。豈好辨哉。不得已也。客曰。幻化法門。我復何望。若子所言。則畫焉者歎。子曰。不然。三乘所趣法體無異。但心有大小。故為差耳。夫以幻幻於幻。則所幻而可幻。以幻幻非幻。故雖幻而非幻。是故。涅槃經曰。善男子。或有是色。或非是

色。言非色者。即是聲聞緣覺解脫。言是色者。是即諸佛如來解脫。善男子。是故解脫亦色亦非色。菩薩從上來設度門於各響。修萬行於空華。前所謂種種色像。即是清淨寶珠。而事理不二者也。雖然。若不識被幻化。則幻化上頭復透幻化。遂為其所魅著。抵死不能脫也。是吾老師所以為我門味寶珠者。而痛卻之也。豈復發無幻化而證真實者哉。龍樹大士曰。寧可起有見如須彌山。不可起空見如芥子許。如寒聞比丘。受持方等千部。生得陷墜。當知。除幻化而無佛陀。離幻化而無教乘。儻滅燈如幻之神力。而焦敗下化之佛種。縱令得成正覺。是成爲顛倒二乘。與佛道迥而殊矣。如諸佛妙用。感則必有應。所應復為感。所感復有應。則無不憑此如幻力。猶如為國者以教凡民為本也。是名為德兆君子。當知。幻化是佛界之大寶聚。幻化是法門之大柱礎。菩薩之種子也。諸佛之本命也。然現之與卻之。未嘗無妙處也。唯自從寶珠體得上。而受用將來。自從幻化識破上也。而與善將去者也。豈亦容易哉。世亦容易哉。若夫胡亂禪者。輕慢白衣。道之不學。教之不明。大言放語。做師之體。未免誹謗如來希有威儀。孤負老師血滴親言。吾子真思之。客唯之而退。便作善客難。

寬延四辛未歲林鐘日

參學某甲拜識



遠羅天釜。師平日所用茶鉢也。不知爲何義。而取以名此書矣。此書師與門徒往復簡語。而其草稿命不經信宿而成也。想暗記之失必多焉。大方學者識有茶味而存焉。何以事故爲哉。辛未者。余之播與楠田某邂逅。謂余曰。子向雖編鵝林老師遠羅天釜。恨闕念佛一書。子若補之。願捨小財以助梓費。今秋京師書津田原吉田二氏。詣余乞一新遠羅天釜舊板不正。余便可之。乃得副此一本。且與豐根二道友。筆之按之。又區書之。以授之云。

寬延未仲秋吉日

慧 梁 謹 識

遠羅天釜跋

先佛遺言。赫乎三藏存焉。乃祖玄旨。炳然五燈傳焉。蓋自利利他自不能不然也。於戲。如此書。明辨觀緣。不墜先規。可謂未聞之聞也。談之。則大虛生翳。誇之則巨海起瀾。余亦何言。其或附諸炬。或上諸紙。其跡雖異。其道一也。何則。法門威儀。唯此是動。向近釋三白衣語。余曰。頃聞。師有示徒之長書。我曹觀覽無便。且有嫌乎臆

寫。冀戮力浸諸梓。以令住慧精修之諸子免吮墨之勞。余曰。善哉。如有改。雖不吾用。吾其與聞之。於是乎跋焉。寬延己巳仲春參學小比丘慧梁焚香稽首書芙蓉峰下。

遠羅天釜終



# 寶鏡窟記

白隱禪師

經に曰く、佛身法界に充滿して、つねに一切群生の前に示現すと。然らば即ち目の見る處總に是れ如來の清淨法身にあらすして何ぞや。しかるを都て見奉ること能はず、惠眼既に盲たる故なるべし。又曰く、我常にこゝに住して、つねに說法して無數億の衆生を教化すと。しからば即ち耳の聞く處、諸佛微妙の教體ならすして何ぞや。然るを都て聞奉る事能はず、天耳既に聾たる故ならずや。寛永の初め、豆州賀茂郡手石村の漁翁、つねに産業の拙さを恨み、深く來生の苦輪を恐れ、晝夜に念佛して怠る事なし。自ら云はく、漁翁は我が家業なり、念佛は我が私業なりと。常に船上にありても、終夜念佛して動もすれば網する事もまた忘るゝ斗りなりけり。いつの頃よりか貴き光の時々に海面に浮ふを見る、漁翁是を怪みて、船して彼の光の處に到れば、岩窟あり、廣さ二丈ばかりなるべし、遙に窟中を窺ひ望むに、昏々として淺深を計る事能はず、潮に隨ふて開閉す、滿る時は、一片の水波窟中に充つ。一日、漁翁その潮勢のおつるを待ちて、畏づゝ彼の窟中に掉もて兩岩を



〔無量壽尊等〕 梵語に阿彌陀、此に無量壽と云ふ。二大士とは觀世音菩薩と勢至菩薩と云ふ。  
〔紫磨金〕 世尊涅槃會上に於て手を以て胸を摩て衆を示して曰く、汝等我が紫磨金色身を觀よ云々、紫磨は金の精なる者を云ふ。

さへて進むこと數十歩、轉た進めば轉たくらし、忽然として股戰さ腫震へ、心身驚き恐れて、正に正氣を失せんとす。こゝにおいて合掌跪坐して念佛すること數十聲、身心次第に平穩なることな覺ふ。少焉あつて、徐々として眼をひらけば、一遍の金光窟中に煥發して、瑞耀騰を照らし、異香掬しつべし。熟らく見れば、無量壽尊及び二大士をさへに端嚴殊特の妙相有りて、紫磨金の聖容嚴然たり、窟中廣博なること大虛の塵廓たるが如し、如來の身量何千尺と云ふことを知らず。漁翁即ち悲泣念佛して、身心ともに消え失せたるが如し、覺えず時を移すこと數刻、乍ら怒濤の岸を打つ聲を聞く、既にして潮の洞口を塞がんことを恐れて泣く／＼尊容に別れ奉りて、念佛しながら漕がへりぬ。扱て里人斯くなん告げたりける程に、遠近驚き起ちて、潮の落ち洞口のひらくを待ちて、行きて瞻禮する者ひきもさらず、正に窟中に入るに當りて、涕淚悲泣、感汗肌をひたし、佛念して伏しまるゝ者あり、打見て興さめたる貌して守り居るもあり、怪しげなる貌して、彼方此方見まはし冷笑もあり、是れ皆信心の淺深罪業の輕重に隨ふて、所見まち／＼なる故なり。彼の涕淚悲泣する底は、如來の身量或は三尺或は五尺乃至一丈乃至二丈、紫金光聚の中に嚴然として立せ玉ふを拜し奉りたる者なり、是れ上品の行者なりと知るべし。又彼の打ち仰きて

ひたすらに念佛する底は、金色の聖容或は五寸或は七寸さらく／＼と照輝きて窟中に立せ玉ふを拜し奉る者なり、是れ中品の行者なりと知るべし。興さめたる貌して守り居けるは、金光をも拜せず、寶蓋をもさかず、混黒にくろく只た燼木などのかくなる者、或は三寸或は五寸目鼻の分ちもなく、三つ並ひ立ち玉ふを見おりて、さしてもなき事をきやう聲らしく云ひ觸して、多の人々を欺き眩して騒かしめる事よ、憎き漁人めか仕業なるぞかしなど興さましたる者なり、是れは下品の行者なりと知るべし。又彼のうろ／＼として彼方此方見廻し冷笑けるは、無智昏愚の下郎、尋常に世を信せず、因果を知らず、少しばかり假名雙紙など讀み覺えて、荒唐のみ聞きて物知りたてする斷見外道の部類なりと知るべし。神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ玉ひにたりける惠心院の僧都の大信は大佛を見、小信は小佛を見ると云ひおかれけるは止事なく貴くも覺えらるれ。彼の人々の信根の淺深罪業の輕重に隨ふて、所見まち／＼なると、思ふに毫釐も差ふことなし。譬へは明鏡の臺に當つて、妍醜少しも遁れざるが如し。是の故に寶鏡窟と稱し、鏡岩と名づく。近頃俗には彌陀窟と云ふ。或人の云はく、我れ聞く、如來は三身を具足し玉ふと。且つ夫れ寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんか、報身とせんか、將た又稱して化身と云はんか、如來既に



群生を利濟せしが爲めに、世に出現し玉ふとならば、城邑聚落いかにも人たち多かる處に現し玉ひて、多くの人を利益し玉ふへきに、何ぞや遠境邊土人里もつゝかぬ處に雨をさけ風を恐れ、しばらく潮の落るを待つなる危き岩穴の中に應現し玉ふことは何ぞや。又聞く番々出世の如來、何れも開佛智見道の一事を以て本懐とし玉ふと。しかるを獨り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て、我等を引導し玉ふことは何ぞや。予曰く、佛に三身あり、法身を以て體とす、報化の二身は用なり、今寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんも亦得たり、報化の二身と稱せんもまた得たり、天堂地獄、淨邦穢土、山河大地、佛界魔宮、草木叢林、有情非情、盡く是れ如來の眞法身、當所をはなれず、常に堪然たりといへども、見性の上上に非ざるよりは、極く見ること能はず、是の故に諸佛報化の二身を現じて衆生を引導す、禪定誦經、念佛持戒、分に隨つて進修して怠らざる時は、情念止み思想盡き、一心不亂の田地に到りて、三昧發得し、圓解煥發し、乍ら如來の眞法身に契當す。此の時に當て、五眼俄に開明し、四智立處に成就す、是れ即ち開佛智見道の當體にして、見性入理の一刹那なり。思想盡き、情念休する時節を往と云ひ、一心不亂の田地に到るを生と云ふ。如上の眞理現前して、唯一乘の大事、目前に分明なるを來と云ふ。此の時に當つて、行者

〔五眼〕天眼、肉眼、法眼、慧眼、佛眼これなり。  
〔四智〕大圓鏡智、平等性智、妙觀察

智、成所作智これなり。

心境不二、理智合冥するを迎と云ふ。然らば即ち來迎往生、開佛智見、畢竟同一模範なる者にあらすや。須らく知るべし、三身不二、不二三身、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なきことぞ。禪定誦經、念佛持戒、皆是れ見性の助因なるべし、彼の黃卷赤軸を執らへて佛經なりと偏執し、泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得ひ人々は、夢にも曾て見ること能はず、是れ佛身の應現豈に又城邑聚落をしも云はんや。彼の觀世大士の如きは、蛤蜊の胎中に身を現し瓢瓠の肚裏に跡を垂れ、遠境邊土金沙灘と云へる處の馬郎が小婦と身を現し玉ひ、又海島邊鄙人多く住みける所に、念佛の魚といへるありき、漁者共多く淺邊に打ち寄り、高聲念佛時を移し、皆々一心不亂に到りける時、魚ども多く海面に浮ぶ、此の時網を下せば、夥しく魚を得、念佛の多少、聲の高下に隨つて魚を得ることもまた多少あり。是の故に此の處の民念佛ぬ以て家業の如くす。傳へて云ふ、此の魚、彌陀の化現にして、無佛世界の衆生を濟度し玉はん爲めに、斯の如きの善巧ありと。嗚呼、佛菩薩の大慈善巧は、凡愚の計り知るべき事にしあらず。今此の寶鏡窟の如來も、行者罪障の輕重、信心の精麁に隨つて、品々に拜ませ玉ふをおもへば、彼の島の念佛の魚に少しも違はせ玉ふことかは。熟らくと思ひまはせば、身の毛たちて恐ろしく尊く



て、類に悲歎の涙こそほるれ。愚老杯も是れよりは遙か遠國の者に侍り、此の御佛の尊  
 き御有様をほのかに傳へ聞き奉りて、あはれ佛神の冥助もおはせよがし、足を限りに彼の  
 伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふなる處までたどり行きて、彼の御佛の貴き御影なりとも伏  
 しおがみ奉りて、後の世の事をも歎き申度き事よと思ひつゝけて、いつしか廻國の姿にや  
 つしなして漕れ來りて、同行三五輩、海士の小船のあやしげなるを請ひ借りて、諸共に窟  
 中に入り、念佛して伏し拜み奉りにけるに。目一目見奉りて、伏ししつみて念佛しながら、  
 ぐしぐしと泣出すもあり、一目見奉りてより有難がりて感涙するも有り、一人は典さめ貌  
 して方々は何を目めてに感涙して、さは泣き給ふぞ、おのれは唯たはのくらまふ事にて、  
 物告を見つけ侍らね、如何にもしてかたじけなりとも見届け奉りて、和殿原が如く有難  
 かり度き事よとて、目おし拭ひ首ひねりまはしてかなたこなた見回はし、首を掻くもあり  
 けり。愚老が其の時拜し奉りたるは、彼の暗さ中に、彼の光のちらちらとのみして、満月  
 の御面も、青蓮目の御眸も見分ち玉はず、御佛の御影とおぼしきもの三たり立ち玉へる  
 を拜み奉りて、少しは信心もぞめ心地しけるが、定めて貴き事にやおはすらじと、有難た  
 げに伏し拜みて佛念し侍りにたりき。飯り來りて熟らくと思ひかこちにけるは、七旬に

〔十力調御〕十力  
 には、是處非處力、  
 知業力、三昧力、知  
 根力、智欲力、知性  
 力、至道力、宿命  
 力、天眼力、無漏  
 力これなり、調御  
 は調御丈夫の略に  
 て世尊十號の一な  
 り。

近き者の遙々の旅地を、三途の罪障をも懺悔し、六趣の苦患をも歎き申度くて、さまよひ  
 來りたる者を、御影をたにもはかしく拜まれさせ玉はぬことよと、少しは恨み申す心  
 地もさしおこりにたりしが、返へして思へば、三界無比の大聖、十力調御の如來にて渡ら  
 せ玉ふものを、如何にや、憎愛差別の御心のおはすへきぞ。差別は御て我が信心の深淺に  
 こそ依るべき物を、淺遠しくも恨み奉りしことよと思ひ定めて、従前の罪障を懺悔し、當  
 來の苦因を恐れて、至誠に專唱稱名すること半時、再度び彼の巖窟に入り拜し申けるに、  
 光明も相好も以前には遙に遠はせ玉ひて、一際殊勝におがまれさせ玉ひける程に、感涙肝  
 に銘じ侍りき。是れより思ひ入りて、澆季末代流轉常没の我等がためには、上もなき善知  
 識にてわたらせ玉ふものを、尊容に別れ奉りて、頼みもなき露命に何地へかうかれ行くべ  
 き。永く此の處に有りて、尊容につかへ奉りて、兎にも角にもなりはてたらんには、また  
 なき勝縁なるべき物をと、處々の靈場に詣ふで奉るべき望みも絶えはて、專唱稱名の外、  
 佗事無く打成り侍りぬ。且又國々より御影拜み奉らむとて、慕ひ來り玉へる人々の、浪風  
 打ついたる頃しき、参りあひ玉ひて、風波の靜まるを待ちあひ玉へる人々のいたはしき  
 に、打寄り念佛して浪の晴れ間を待ち玉へがしの心に、處々勸進し申して、一字の草履を



營み、形の如く尊容を寫し奉りて、堂上に安置し奉りぬ。願はくは此の勝縁に答へて、我等も及び一切の人々も、諸どもに生死の魔網を破り、速に一心不亂の田地に到りて、唯心の淨土に生じて、己心の彌陀に值偶し奉らむことを。

惟時寬延第三庚午歲佛生日。沙羅樹下關提老衲書。

### 寶鏡窟記終

序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾か鶴林近侍の左右に寄せて云はく、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑語とかや云へる草稿あり。書中多く氣を鍊り精を養ひ、人の營術をして充たしめ、専ら長生久視の秘訣を聚む。謂はゆる神仙鍊丹の至要なりと。是の故に世の好事の君子是れを思ふ事、荒旱の雲霓の如し。偶く、雲水の徒侶竊に傳寫し來るあるも、秘重し珍蔵して人をして見せしめず、天瓢ひなしく櫃にをさめて匿したるか如し。願はくは是れを梓に壽かふして、以て其の渴を慰せん。聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しみ玉ふと。若し夫れ人に利あらば、師豈に是れを吝しみ玉はんやと。二虎含み來て師に呈す。師微笑として笑ふ。此において諸子、舊書櫃を開けば、草稿蠶魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過たり。諸子即ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。即ち封裏して以て京師に寄せんとす。予が馬齒一日も諸子に長たるを以て、其の端由を書せん事を責む。予も亦辭せずして書す云はく、師鶴林に住する事大凡四十年、鉢盂を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子纒に門閭に跨れば、師の毒澁を甘ない、痛棒を滋しとして、辭し去ることを忘るゝ者、或は十年、或は二十年、鶴林を下の塵と成る事も



亦總に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各々西東五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として清苦す。朝觀暮辛、晝夜夜凍、口に投する者は菜葉麥麸、耳に觸る、者は熱喝垢馬、骨に徹する者は噴鼻痛棒、見る者額を撲り、聞者肌汗す、鬼神もまた涙を浮へつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初り來る時は、采玉、河晏か美貌有りて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島か形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂有つてか片時も溘泊する事を得んや。是の故に往々に參窮度た過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、痲痺塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み是れを愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ら忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の鼻乳を絞つて、是に授るに内觀の秘訣を以てす。乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縦ひ華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり。備か靈試に是れを修せよ、奇功を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を

拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て、長く兩脚を展へ、強く踏みそろへ、一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目なりの鼻孔がある。我此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家郷。家郷の何の消息がある。我か此の氣海丹田、總に此れ我が唯心の淨土。淨土何の莊嚴がある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀。彌陀何の法をか説くと打返へし、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下孤然たる事、いまた篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ら去て、五日七日乃至三七日を経たらひに、従前の五積六聚氣虛勞役等の諸症、底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り將ら去れ。此におにて諸子歡喜作禮して、密々に精修す。各々悉く不思議の奇功を見る。功の迅速は進修の精進に依るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇功を讚嘆して休まず。師の曰く。備か靈心病全快を得て以て足れりとする事勿れ。轉た治せば轉た參せよ轉た悟らば轉た進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如か



〔大仙見〕 般若燈論に云はく、菩薩等も亦仙と名づく中に於て最尊なるが故に佛を大仙と名づく。蓋し仙家にては肉身の長生不老を計る佛家にては不生不滅の涅槃を證することを計る、其の跡相似るを以て大仙

と早く死して此草薺を捨てんにほど。何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて、全快を得る事今の諸子の如し。至人の云はく、此は是れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歳なるべし。其の餘は計り定むべからず。予財も歡喜に堪えず、精修怠らざる者大凡三年。心身次第に健康に、氣力次第に再壯なる事を覺ふ。此に於て重ねて心に竊に謂へらく、縱ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るか如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、鐵拐、張華、費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生せざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て、内觀と參禪と共に合はせ并らべ貯へて、且つ耕し且つ戦ふ者、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩を増し得て、今既に二百衆に近し。其の中間方來の補子勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密に此の内觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉た悟れば轉た進ましむ。馬年今歳古稀に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず。眼耳次第に分明にして、動もすれば蹊蹊を忘る。毎月兩度の法施終に怠倦せず。時

と云ひしならん。

に佗方に應して三百五百の海衆を聚會して、或は五句七句を經に録に雲水の所望に隨て胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶと云へども、終に一日も罷講齋を饒さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時には遙に勝されり。是れ皆彼の内觀の奇功に依る事を覺ふ。住菴の諸子各々悲泣作禮して云はく、吾が師大慈大悲願はくは内觀の大略を書せよ。書して留めて、後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち領す。立處に草稿成る。稿中何の説く處ぞ、曰く、大凡生を養ひ長壽を保つの要、形を鍊るにしかず、形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣聚る。氣聚るときは即ち眞丹成る。丹成る時は形固し。形固るときは神全し。神全るときは壽し。是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴の諸子此心要を勤めてはげみ、進んで怠らすんば、禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到て、年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ。何か故ぞ、月高して城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正廿五晝。窮乏菴主飢凍炷香稽首題。



夜船閑話

山野初め参學の日、嘗つて勇猛の信心を憤發し、不退の道悟を起發し、精鍊刻苦する者、  
既に兩三霜の有ち、夜忽然として蒸節す、従前多少の疑感、根に和して氷融以、曠劫生死  
の業根、底に徹して瀧流す。自ら謂へば、道人を去る事、遂に遠からず、古人三十三年是  
れ何の道徑をぞ、怡悅蹈舞を忘るる者、數月、向後日用を廻顧するは、助靜の三境全く調和  
せず、去就の兩邊、總に脱洒ならず。自ら謂へらく、猛く精彩を著け、重て一回捨命し去ら  
んぞ。又、おぼえて牙關を咬定し、雙眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せんぞ。既にして未  
だ期月は亘らざるに、心火速上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲  
の聞え行くが如し。肝膽常に怯弱にして、舉指恐怖多く、心神困倦し、寒瘧種々の境界を  
見る。兩腋常に汗を生じ、兩服常に涙を帯ふ。此にもいで逼り、明師に投し、廣く名譽を採  
るは、云々、百業す功なし。或人曰く、城の白河の山裏に隱居せる者あり、世人是れを  
名けて白面先生と云ふ。靈香三四甲子を聞みし、人居三四里程と隔つ。人を見る事を好ま

山野初め参學の日、嘗つて勇猛の信心を憤發し、不退の道悟を起發し、精鍊刻苦する者、  
既に兩三霜の有ち、夜忽然として蒸節す、従前多少の疑感、根に和して氷融以、曠劫生死  
の業根、底に徹して瀧流す。自ら謂へば、道人を去る事、遂に遠からず、古人三十三年是  
れ何の道徑をぞ、怡悅蹈舞を忘るる者、數月、向後日用を廻顧するは、助靜の三境全く調和  
せず、去就の兩邊、總に脱洒ならず。自ら謂へらく、猛く精彩を著け、重て一回捨命し去ら  
んぞ。又、おぼえて牙關を咬定し、雙眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せんぞ。既にして未  
だ期月は亘らざるに、心火速上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲  
の聞え行くが如し。肝膽常に怯弱にして、舉指恐怖多く、心神困倦し、寒瘧種々の境界を  
見る。兩腋常に汗を生じ、兩服常に涙を帯ふ。此にもいで逼り、明師に投し、廣く名譽を採  
るは、云々、百業す功なし。或人曰く、城の白河の山裏に隱居せる者あり、世人是れを  
名けて白面先生と云ふ。靈香三四甲子を聞みし、人居三四里程と隔つ。人を見る事を好ま



〔行脚〕 旅籠の、  
さならん。

す。行脚をせしむるは必ず走て逃ぐ。人其の賢愚を辨する事なし。里人等ら稱して仙人とす。聞  
く故の丈山氏の師範にも、精しく天文に通じ、深き智道に達す。人あり禮を盡くして香  
叩するときは、稀れに微言を吐く。退て是れを考ふるに大に人に利ありと。此において實  
永第七庚寅正中院、病に行脚を着け、漢東を發し、黒谷を越ぬ。直ち白川の邑に到り、包  
を茶店におろして、幽か巖樹の處を尋ぬ。里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨  
て遙に山溪に入る。正に行々事里ばかりに、乍ら流水と踏斷す。樵徑もまたなし、時に  
老夫あり、遙に雲煙の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨て或は顯はれ或  
は隠る。是れ幽か洞口に墜下する所の窟窟なりと。予即ち袋を棄けて上る。曉曉を踏み、藁  
草を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲霧着衣を履す。辛汗を滴し、苦膏を流して、漸く彼の窟  
窟の處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を感じ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。且ら  
巖根に倚て數息する者數百、少焉あつて衣を披ひ襟を正して、畏つて、鞠躬して塵  
子の中を望めば、朦朧として幽か目を收りて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顏  
麗ふして森の如し。大布の袍を掛け、藁草の席に坐せり。窟中横に方五六笏にして全く養生  
の具無し。杖上、尺中層と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡くして、苦の病因を告げ

且つ教ひを請ふ。少時幽窟を開いて、霧を視て、後を告げて曰く、我は是れ山中半死  
の陳人。瘧疾を拾ふを食ひ、瘧疾は伴つて睡る。此の外更に何を知らんや。自ら愧つて  
く上人の來望を勞する事と。予即ち藁を去りして休ます。時は幽恬如として予が手を授ち  
て、精しく五内を窺ひ九候を察す。爪甲長さこと半寸、慘乎として頰を摸りてのけて云  
はく、己哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す。寔に醫治し難き者は  
公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を持たず、而して後には是れを救はんは欲せば、心持肩力  
をつくし、華陀頰を摸むるも、奇功を見る事能はし。只今既に觀理の爲めに破らる。勤め  
で内觀の功を積まずば、終に起つ事能はし。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予  
曰く、願はくは内觀の要秘を聞かん。學びがてらには是れを修せん。幽窟々如として容を  
らため、從容として告げて曰く、嗚呼、公の如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔は聞け  
る處を以て微しく公に告んか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀れなき。息らすんば  
必ず奇功を見ん。夙願も又期しつべし。夫れ夫邊分れて雨霽あか、陰陽交和して人物生  
類、先天の元氣中間に默運して、五臟腑が經脈行はる、衛氣營血、互に昇降循環する者、  
晝夜に太息五十度、肺金は物縁にして膈上に浮び、肝木は極處はして膈下に沈む。心火



斗を銅にて作り

は大陽は心腎部に在り、腎水は天陰にして下部を占む。五臟は七神あり、脾胃各々二神を蔵く。呼吸は心腎より出で、吸は腎肝に入る。呼吸は脈の行と事三寸、二吸は脈の行と事三寸、其夜に二萬二千五百の氣息あり。脈二身を廻行する事五十次、火は神注にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し火衰せず則照成は虧を失し、志念或は度に過るときは、心火熾衝して肺金焦薄す。金母苦しむときは、水子衰減す。母子互に疲傷して、各々五穀困倦し、六屬凌奪す。四次増損して、各々百々の病を生ず。百薬功を立する事能はず、衆醫總に手を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は、常に心を下に専らにし、暗君庸主は常に心を上に専らにす。上は恣睢するときは、沈痾積疔の病あり、百姓困窮を待たず、君は民間の窮困を顧る憐無し。野に菜色多し、國賦繁多し。賢良皆み覆れ、臣民靡め恨む。諸侯離れ叛き、衆夷就ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脈永く断絶するに到る。心を下に専らにするとときは、九卿倫を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞苦を忘るゝ事なし。農に餘はるの粟あり、海に餘はるの布ありて、群賢來り屬し、諸侯皆服して、民思ふ國頼るに合はば、遠するの燕燕なく、境を侵すの敵國なし。國の君の憂を問はば、民戎戰の名を知らず。入身はまた然る。至

たる繼にて大さ一斗を入るへし蓋は飲食を炊き夕には之を暖ちて夜行す昔の軍略なり

人は常に心氣を以て事なす。心氣は心腎部に在りて、七凶内は動く事なく、四邪は外に在りて、事能はず。營衛充て心神健かなり、は常に藥餌の甘醴を知らず、身終に鐵夾の痛痒を受はらず。膚流はのれに心氣を以て上に悉にす。上に悉にするとときは、三寸の火、右寸の金を越して、五官痛り疲れ、六親苦しみ恨む。鼻の故に漆園曰く、鼻人の息は、是れを思ふるに隨て以てし、衆人の息は、是れを思ふるに隨て以てす。許俊が曰く、蓋し氣下焦に在るとときは、其の息短く、氣上焦に在るとときは、其の息促なる。上陽者が曰く、人に鼻の氣有かり、丹田の中に降下するときは、一隔また復す。若し入始初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要せよ。天れ經脈の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六の交變化再周して、一歳を全ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是れを地雷復と云ふ。冬至の候なり。鼻人の息は、是れを思ふるに隨て以てするの謂也。三陽下に位し、三陰上に居す。是れを地天泰と云ふ。夏至の候なり。萬物發生の氣を合んで、百卉春化の澤を受す。至火元氣を以て下に走らしむるの象、人は是れを得るときは、營衛充實し、氣力勇壯なる。五陰下を居し、一陽上に止まる。是れを山地泰

夜間用也

本卷二



せゆふの九月の候なむ。天是れを得るときは、林苑色を失ひ、百卉竟落す。是れ衆人の志  
 する候を以てするの象なり。是れを得るときは、形容枯槁して、齒牙搖落す。所以に延壽書に  
 云はく、六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人死し易し。須臾を知るべし。元氣を以て常に下  
 に充じし。是れ生を養ふ樞要なる事也。昔し吳興、初石臺先生に見ゆ、齊戒して鍊丹の術  
 を問ふ。先生の曰く、我に元々眞丹の神秘あり。土々の器にあらざるより、得て傳  
 ふべからず。右へ黃成子是れを以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫れ大道の  
 外に眞丹なく。眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり、備の六欲を去り、五官々々其の  
 職を忘るゝときは、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の太白道人の謂  
 ばも、我が天を以て事ふる所の天に合せざる者なり。孟軻氏の謂はも、浩然の氣、是れを以  
 きひて膺輪氣海丹の田間に成りて、歳月を重ねて是れを守て守て守て去り、是れを養ふて  
 無遺にして去て、二載年が丹竈を振蕩するときは、内外中間八卦四維、總は是れ一枚の大道  
 丹。此の時に當て初めて自己即ち是れ天地に先つて生ぜす。虚空に後れて死せざる底の眞  
 箇長生久視の大神仙なる事を獲得せん。是れを眞正丹竈功成る底の時節とす。世に眞に御  
 し難に跨り、天地を跨り、水を跨り、雲の端たる約事を以て懐とす。是れを養ふて、大洋を跨り

不厭酷老、厚土を變じて黄金とす。前賢曰く、丹は丹田なり。液は肺液なり。肺液を以  
 て丹田に養へす。是の故に金液還丹といふ。予が曰く、睡んで命を閉じ、且ら、視聽を  
 抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は、李士才が謂はも、清降に偏する  
 者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからむか。幽微を以て笑つて  
 云はく、然らず、李氏ははずや。火の性は炎上なり。宜しく是れを下らしむべし。水の性  
 は下れるに就く、宜しく是れを上らしむべし。水上より火下る。是れを名けて交と云ふ。交  
 るときは既濟とす。交らざるときは未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家  
 が謂はも、清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊と教はんとなり。古人云はく、相火上に  
 易きは、身中の苦しむ所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君  
 火は上に居て、靜を主り、相火は下に處して、動をつかさどる。君火は是れ一心の主な  
 り、相火は寄輔たりの蓋し相火に兩般あり。謂はも、腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は  
 龍に比す。是の故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をし  
 て澤中に震れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海が澤か、水にあらまといふ事なし。是れ相  
 火上の鳥を制するの略にあらずや。又曰く、心勞煩するときは、虚して心熱す。心虚す



先きに心火地上して、此の重病を發す。若し心を降下せざれば、縦ひ三界の秘密を行じ盡したりとも、起の事得じ。且つ又我が形模、道家者流に頼するを以て、大は釋に異なる者とするが、是れ禪なり。他日打發せば、大に笑ひつべきの事有らむ。夫れ觀は無觀を以て正觀とす。多觀の者は邪觀とす。向に公多觀を以て此の重症を見る。今是れを救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心長意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、此の計較思想なく、一觸の譏浪情波なげな。是れ真觀淨觀なり。云ふ事なかれ、もはらく禪觀を放下せんと。佛の言はく、心を足必ほをさめて、能く百工の病を治す也。阿合に、酥を用ゆるの法あり。必の勞疲を收ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡くせり。治法を説く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり、其の兼病を治す。膺輪を練して、豆子を現るの法あり。其の大意心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但た病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し藥緣障裏の世止あり。諸眞は實相の圓觀、藥緣は心氣を膺輪氣海丹田の間に收り守るを以て解とす。行者是れを用ゆるに大利益あり。昔へ永平の開祖師、大宋比入で如淨を天皇に拜表

師、一日、密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子、坐禪の時、心を左の掌の上におくべし。是れ即ち頭師の謂はる藥緣止の大略なり。頭師初此の藥緣内觀の秘訣を教へて、其の家兄鎮慎が重病を、萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に説けり。また白雲和尚曰く、我つねに心をして胎子の中に充たしむ。徒を匡し衆を領し、實を接し機に應じ、及び小參普説七縱八橫の間において、是れを用ひてつくる事なし。老來殊に利益多し事を感じ。寔に貴ぶべし。是れ蓋し素問にみゆる恬澹虛無なれば、眞氣是れにしたかふ。精神内に守らば、病何れより來らむといふ語に本つき玉ふ者ならむか。且つ夫れ内に守るの要、元氣として一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛髮、一毫髪ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざし、牀を安じ席を緩め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて、動かざる事三百息を経て、耳聞く處なく、目見る處なく、斯の如くなるをさば、寒暑も侵かす事能はず、蜂毒も毒する事能はず。壽三百六十歳、是れ真人に近しと。又蘇内翰が曰く、己に飢て方に食し、未だ飽がすして先つ止む。散步逍遙して、務めて腹をして空からしめ、腹の空なる



時に當て、即ち静室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百より數へて千に至りて、此の身兀然として、此の心寂然たる事虚空と等し。斯のごとくなる事久しうして、一息おのづから止むる。出でず入らざる時、此の息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此の時人に尋ねて路頭を指す事を用ひず。只要す尋常言語を省略して、備の元氣を長養せん事を。是の故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に臥す。予が曰く、酥を用ゆるの法、得て閉じつゝへしや。幽か曰く、行者定中四大調和せず、身心共に勞疲する事を覺せば、心不起して應に此の想を成すべし。譬へば色香清淨の輕蘇鴨卵の大きさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるはし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁腎骨次第に沾注し將ち去る。此の時に當て胸中の五積六聚、疝癰塊痛、心に隨て降下すること、水の下に沈みかたき、塵をとして塵あり。遍身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至て即ち止む。行者再び應に此の觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積もり法

えて、暖り應ず事恰も世の良醫の種を珍香の藥物を集め、是れを煎湯して浴盤の中に盛り、浸えて、我が臍輪已下を覆け應ずがごとし。此の觀をなすと、唯心所現のものに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の軟觸を受く。身心調適なる事、二三十歳の時には遙に勝れり。此の時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若しそれ勤めて慮らざれば、何れの病か治せざらじ、何れの徳かつまざらん、何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる。其の功驗の遲速は、行人の進修の精進に依るらくのみ。走始め卯歳の時、多病にして公の患に十倍しき、衆醫總に顧みざるに到る。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此において上下の神祇に祈て天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや計らすも此の輕酥の妙術を傳受する事を。歡喜に堪えず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半銷除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々、月の大小を記せず、年の閏餘を知らず、世念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し。馬年今歲何十歳なる事もまた知らず。中頭端由有りて、若丹の山中に遭逢する者、大凡三十歳、世人都て知る事なし。其の中間を顧るに、恰も黃梁半熟の一夢の如し。今の此の山中無人の所に向て、此枯槁の一具骨を放て、太布の單衣纒に二三片を掛け、嚴冬の寒



威綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するにいたらず。山粒すでに断えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の方ならずや。我今既に公に告ぐるに、一生用ひ盡くさる底の秘訣を以てす。此の外更に何をか云はんやと云つて、目を收めて默坐す。予亦涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末纔に殘陽を掛く、時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで、畏づく回顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る。即ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し、恐らくは歸客を惱せん。老夫しばらく飯程を導かんと云つて、大駒履を着け、瘦鳩杖をひき、巖巖と踏み險阻を渉る事、風々として担途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の深水の所に到つて、即ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと云つて、慘然として別る。且らく柴立して幽か回歩を目送するに、其の老歩の勇壯なる事、飄然として世を通れて羽化して登仙する人の如し、且つ羨み且敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事。徐々として歸り來て、時々彼の内觀を潜修するに、纔に三年に充たざるに、従前の衆病、藥餌を用ひず鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、従前手脚を挟む事

得ず、齒牙を下す事得ざる底の難信、難達、難解、難入底の一若子、根に透り底に徹して、邊得過して大歡喜を得る者、大凡六七回。其餘の小悟怡悅、蹈舞を忘るゝ者數としらす。妙喜の謂はゆる大悟十八度小悟數を知らずと。初めて知る、寔に我を欺かざる事と。古へ二三編の機を著くといへ共、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日と云へども、機せず爐せず、馬齒するに古稀を越たりといへども、指すへき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘蘊ならんか。云ふ事なかれ、鶴林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て佗の上流を証成すと。是れつとに盤骨のつて、一指に既に成する底の俊流の爲に設くるにあらず、癡鈍子が如く、勞病子に類する底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しも補ならんか。只恐る別人の手を拍して大笑せん事を。何が故と、馬枯笑を咬んで午枕に喧し。

### 夜船閑話終



此書之序。其言最妙。曰。吾人所以欲觀此書者。其意必欲觀其所以能入三昧者。然則必先觀其所以能入三昧之因。而後觀其所以能入三昧之果。此其所以為序之義也。

夫。此書之所以能入三昧者。其因有二。一曰。善友之誘。二曰。信心之堅。此二因者。不可缺一。若無善友之誘。則信心之堅。亦必隨之而散。若無信心之堅。則善友之誘。亦必隨之而絕。此其所以為序之義也。

故。此書之序。其言最妙。曰。吾人所以欲觀此書者。其意必欲觀其所以能入三昧者。然則必先觀其所以能入三昧之因。而後觀其所以能入三昧之果。此其所以為序之義也。

辻談議序

曠言細語。販第一義。何況法說譬說耶。先師過古稀之後。舌鈍識情。恐法施不及。初機一依。是丙寅之夏。孜孜編書。名曰辻談議。所謂六道街衢。是菩薩道場。不起禪定。能入同事攝者。即衲僧轉身自在之活三昧歟。茲合紛引歌以附梓客。普施初心道友。永為當來之資糧。矣。嚶々。

明和庚寅夏

豆之東繼於洛東觀月亭書。







精進の一刹那ならんのみ。懈怠の衆生とは誰そや。我れも人も偶々受けかたき人身を受け、逢ひかたき佛法に逢ひなから、夢幻の如く千年も百年も生き果つへき心持ちにて、食ひたいやうに食ひ、飲みたいやうに飲み、寝たいやうにいね、おそひたいやうに遊んで、芥子ばかりの菩提心もなく、一升の事には五斗ばかりの腹を立て、五文か事には五貫ばかりの氣をもみ、頂上より足のうちまで全體、三毒五欲五臟より六腑を貫いて、總に是れ貪欲瞋恚、毎日朝よりくれにいたるまで、身三口四の十惡をつくり、かさねて負ひかたけて冥途に入る。其の初め死する時は、何の正体もなく、濃く寝入りたる如く何の覺えもなく、少らくわつて幽かに性根つきて、目をひらけば、いつくか冥府に落ち入り、死出の山三途の河原など恐しき難所の目さすも知らぬ暗き闇路をおほるおほると五里も十里もたどり行くよと思へは、方量もなき廣き野原に出でぬ、此の所は月日の光はなく、天火事場の如し。是れ皆焦熱大焦熱の猛火の焰のどつと燃えあかるものなり。其の中に罪人どもの邊き間もなく群り居て、わつと泣き叫ぶ様おさましやかなしやな。我れくればからすも斯くおそるしき惡所にしつみたるそや。娑婆にて斯くおそるしき處ありと露知らざりしやしや。夢になりとも知りたらしかは、身を捨て命にかけても後世の願ひやうも菩提の求めやう

〔身三口四等〕殺生、偷盜、邪婬、之を身の三惡業となし、兩舌、惡口、綺語、妄語、之を口の四惡業となし、貪欲、瞋恚、邪見、之を心の三惡業となす、是等總へて十惡業と稱す。

も有るべきものを、邪見惡智の人々の常に彼の天堂地獄などいへるは、根もなきそらごとくなるぞや。其の證據には開闢より以來終に一人も地獄くるしとて立ち飯りたるものなく、終に捨て文一つ越したる者なし。是れ決定して地獄天堂なき現證なるそや。縦ひ又有りても左ばかりの罪作りたる覺えもこそなけれ、人は殺さず火は付けず地獄へ落つへき種こそなけれ。若し罪なきもの落つる地獄ならば。それは是非なき次第なるぞや。人なみ人なみなるものを、我れも人も貴きもいやしきも知るも知らぬも諸どもに手を取り合ふて落つへきはと云ひしを口惜しや。面白く賢き事宜ふ人かなと貴く有り難き事に思ひなして、偶まうけかたき人身を受け、千生萬劫にも逢ひ難き佛法に逢ひなから、何の辨へもなく、さなから牛馬同前の心持ちにて、やみくも三途に歸るくやしきよ。今はせんかたこそなけれ。見わたせば、貴きも賤きも、老いたるもわかきも、知るも知らぬも、皆盡く猛火の底に在りて泣き苦しむ聲は聞くに膽裂け心碎くるか如し。いにしへ貴き聖の常に嘆かせ玉ひけるは、一度三途に入りぬれば、二たひ歸る事そなきと念佛せさせ玉ひけるよし。實に貴き御救へなるとは、今こそ思ひ知られたるそや。又いつの世に閻浮に歸る事の有るへき、喉を濕すに一滴の水なく、口に投するに一粒の米なし。四方八面盡く皆猛火なれば、立ち怒

〔閻浮〕閻浮提の略、須彌山の南方に當る國土を云ふ。



〔刹利、首陀〕 刹利は刹帝利の略、天竺に四姓あり、一に刹帝利(玉璽)二に婆羅門(淨志)三に毘舍(商賈)四に首陀(農夫)これなり。  
〔阿闍梨〕 梵語、此に正行、又は執範云ふ、僧の尊稱なり。

ふへき所こそなけれ。見渡せば、あれにて泣き苦しむ玉ふは、いたはしや我が父うへにておはすぞや。此方なるはまさしく我か妹なるぞや。あなたにて一處に責め苦しめられ玉ふは、上もなき貴き方々と見えさせ玉ふ。いかなる御錯ありてか斯くまで辛き目を見させ玉ふやらん。昔し延喜の帝様の簾か岩屋の日藏上人に對し云ふならく、奈落の底に沈みては刹利も首陀も替らさりけりと詠しさせ玉ふも、直に今日のおたりなるぞや。宮も藁屋も大名も高家も地頭殿も代官殿も庄屋も名主も、皆盡く猛火の底にわよと泣き叫ぶ、中には出家沙門圓腹方袍の尼法師などの、在俗の人々、劣らじ負けじと、叫喚兼合黒繩無間の底にしつみて苦しむ玉ふ。なかにも紫衣や紅衣の僧正よ阿闍梨和尚よ大善知識よなど、貴き人々のおそろしき獄卒の杖にうたれて泣き苦しませ玉ふを見奉れば、一際悲しく最愛しくこそ覺ゆれ。娑婆にて談議法談などに極樂よ淨土よ水鳥樹林よ念佛念法よなど上もなき有り難き事とも説かせ玉ふを聞ては我等しきか境界には分にすぎたる事ともなるぞや。さばかりの高き望みは陰なき事なるぞと思ひ切つて、往生淨土の望みはさらさらなかりけるぞや。かくおそろしき所ありと少しなりとも知りたげましかば、世に夫れ片時も油斷すまへや。身を捨て命にかけても後世助るへき道じあらば勵み求むべきものを、口惜の

今のなれのはぞやな。最初此の處へ覺えす落ち入りたりし時に、且つ驚き且つ苦しみなから思ひけるは、世に恨めしき物は世の中に數も限りなき出家沙門の人々なるぞや。かゝる苦しき所ありと少しなりとも教へ給はば、かゝる不覺はとらざらましを陰なき極樂地とのみ仕聞かせ玉ひける故、今此のはてしなき惡處にしつみけるぞや。かへすとくもらめしきは、世間の沙門法師原なるやをぞ恨みかこちけるか、よく見れば彼の沙門法師原もかゝる所は露ちり知り給はざりけるにこそ。たくひもなき高位高官の僧侶紫衣紅衣の貴僧高僧達の、塵俗の在家に少しも劣らせたまはて、獄卒の手にかゝつて晝夜に責め惱まされさせ玉ふを遙に見奉れば、此の人々を初めより露知り玉はざりけるにこそ、兎にも角にもせん方なきはわれ、か今のなれの果てなるぞやなど、みなもろとも聲も惜ます泣き叫ぶ聲は、天も崩れ落つへくこそ覺ゆれとは、彼の止觀珠林十五經などに説き宣へおかせ玉ふ大略なるぞや。人々よ油斷し玉ひぞ、油斷じ玉ひたらんには、をしつけ愛目を見給ふぞきと。良樂は口に苦く、忠言は耳に逆ふと申せば、尋常の極樂地には面白くは覺ゆじ、なれども大地は打ちはづすとも違ひはなき物語なるぞや。時に聽衆に一人あり、講座間近く進み出て有り難や貴やな。者回如何なる勝縁にかゝる



不思議の勝會に逢ひ、未曾有真正の所説を承る事、かへすくも有り難けれ。洩季末代の習ひ、筋なき賤賣の鄙僧のぬれ手に栗の極樂咄しをのみ聞きて、來世は心易き事にのみ覺えて、毎日限りもなき罪業を積み重ねて、懲りもなくもとの三途の畜里へ立ち歸りて、無量劫數を経て果しもなき苦患をうくる事は、露知らずて孩提の童子の無智なるか如く、牛羊犬豕の昏愚なるに齊しく、徒らに日々衣食をのみ求めて、飽き足る果てしもなく、我れも人もやみやみと受け難き人身を失ふ事、飛彈の邊土の我々にかさらず、大凡扶桑六十州の間、西は筑紫博多の浦、東は都賀留合浦の果て、京も田舎も押し並へて、此の經の影にて佛になり、此の佛の徳により淨土に生る。一唱彌陀號即滅無量罪と有るからに、罪は何れと作りても消へ易きものを何程放逸に暮しても、佛には成りやすきものと心得て、心に任せて罪業を積み重ねて、何のわざもへもなく、月日を送りて貴さも賤さも皆盡く惡所に墮する世の中に、斯く未曾有の法會に逢ひ、大に驚き大に恐れて、俄に睡夢の覺りたるか如し。去りながら唯此の徳にて捨ておき玉は、何を便りにか生前限りもなき罪障を滅し、果しもなき惡趣を免かるゝ事を得ん。たとへば人の親の其の子を救へて云はく、汝が輩各々勤み進んで各々家業を勤めよ、必らず怠る事なけれ。油断したらんには、末には必らず

貧困に苦しめられて、辛き目を見るべきぞ。相かまへて油断する事なかれと種々教諭せんは、其の親兼ねて商法を勤むべき子には、宜しく金銀の本手を渡し、農業を勤むべきには、膏腴の田畑をもちり與へて、而して後に汝等常に働みつとめよ。油断する事なかれと云はく、頭を叩いて命に隨はん。若し本手をわたへず田畑を譲らず、農を勤めよ商を働めよと云はんは、其子何を便りとしてか農商を勤めん。今師我が輩に對し勤めよや、油断する事なかれ。油断したらんには、死後には必ず惡所に墮すべきぞと教へ玉ふは、さなから金銀の本手をわたへず田畑を譲らず、只家業を勤めよ油断はしすなど教ふる親の如し。我が輩も又左の如し。何れの道を修し、如何なる善を行してか、油断なく働み勤めてか、未來を助かるべきや。願はくは來世を助かるべき道じあらば、精しく教へ玉ひて、彼の恐ろしき惡處を救ひ助け玉ひてよ。熟らく願ふに世間一切の出家沙門を稱して、佛法僧の三寶の一數なりと歸命し尊信する事は、常に無量の法財を積み貯へ、勤めて大法施を行して一切を利益し玉ふ故なり。我れも人も罪も報も曾て知らず、死して三途に墮する事も又知らず、恰も赤子のばらばらひして井に赴かんに、盲者三三人其の傍に在りといへども、夢にも曾て知らず見ざるか故に、救ひ助くる心なきか如し。末代の出家沙門も又しかり、因果報應も



〔八趣〕一に生在  
地獄、二に生在餓  
鬼、三に在畜生、

曾て知らず、三途も六趣もさらく辨へなき故に、さながら盲者の赤子を救ふ心なきか如  
し。和尚大慈大悲宜しく是れを憐察し玉へ。予か曰く、善哉問ふ事、相持へて油断し玉ひ  
ぞ、油断し玉ひたらは、かならず三途にしづみ玉ふべきぞと唯云ひすておきたらんは、  
左ながら赤子の井に赴くを見て、危い哉、此の子は果して井に落つへさそとのみ云ひて見  
捨ておくか如し。我れに神仙長生不死の大還丹、即坐成佛の秘訣あり、眉毛を惜ます汝か  
鬘に傳與せん。謙んて精神を凝らして聽受し、打失する事なけれ。汝か輩即今外面五尺  
の形骸、男女有り僧侶あり、老幼あり尊卑あり媚醜あり、各々互に異なり。こゝにおいて  
憎愛妬害慳吝者執着雲霧のめぐり濁りか如く、波浪の限り飛ぶか如し。三毒懷に溢れ、五欲  
胸に凝る。日々多少の悪業習を積み重ね、晝夜に六趣に輪廻し、死してはかならず三途に  
墮す、叫喚兼合黒繩無間の大苦患一身に乘まり責む、三祇百劫を経て休罷有る事なし、其  
の受苦心も言葉も及ぶべからず。佛の云く、一切地獄の衆生の苦患、我れも詳に是れを  
説かば、閻浮提の衆生聞きて得て、皆盡く血を吐いて死すべしと。寔に恐るべくまことに憤  
ひべし。若し人如上三途の苦域を透過し、八難の險處を超越し、一超に如來地に直入し、  
涅槃の大彼岸に至らんと欲せば、謹んて精を静め心を凝らして、汝か臍輪氣海丹田の間を

これ三途なり。四  
に北朝軍城、梵語、  
此に勝處、四に生  
長壽天、これ天上  
なり、五に雙盲瘡  
瘡、七に世智辯聰、  
八に佛前佛後、此  
の八の中に生れた  
る者佛説を聞くこ  
と難き故に開法  
八難と云ふ。  
〔身心脱落〕永平  
道元禪師、在天童  
如淨禪師之處、一  
夜坐禪時、如淨示  
衆曰。衆禪者身心  
脱落也。師聞忽然  
大悟。直上三方丈、  
燒香。如淨問曰。  
燒香亦作麼生。師  
曰。身心脱落。如  
淨曰。身心脱落々  
々身心。  
〔風離金網〕江湖  
集に、理盡詞窮路  
亦窮。風離金網、  
鶴拋籠。風深鏡重

點檢せよ、全く男女の相なく僧俗の形なし。老幼尊卑富貴窮一、點の痕跡なし。是れ彼の  
黄成子かいはゆる至道の精香々冥々たり、至道の極香々黙々たる者なりや、こゝにおいて  
單々に點檢し、仔細に照願して晝夜に怠らざる則は、いつしか思想盡き妄情泯滅して、玉  
盤を擲擗し氷樓を推倒するに齊ふして、たちまち身心ともに打失せん。此において轉た進  
んで退かざる則は、計らすも一旦豁然として貫通して、十方虚空なく大地寸土なふして、  
事物の表裏精盡くさすと云ふ事なけん。是れ彼の永平の謂はゆる身心脱落、々々身心。  
直に是れ古人の謂はゆる理盡き言葉窮つて技もまたきはまる。風金網をはれ、鶴籠を脱  
する底の好時節、隻手の聲を聞く事、白晝に掌上を見るか如し。長河を撓いて酥酪な成し  
荆棘を變して梅檀林と成し、鐵を轉して金と成す底の時節、人間天上の善果是れに如かず、  
縦ひ汝萬戸侯の富貴を得るも、黄梁一炊半熟の夢、富四海を保つも、死すれば必ず捨て去  
つて惡趣に入る。是の故に言ふ、富は是れ一生の財、身滅すれば即ち隨て滅す。智は是れ  
萬代の寶、命終れば即ち隨つて行く。大凡世間一切諸有の有情、王侯より庶人に到り、老  
幼尊卑、僧俗男女、馬牛犬豕、豺狼麋鹿に到るまで、正因佛性の大事を具足せずと云ふ事  
なし。是れを實相眞如の日輪と名け、本有常住の月輪と云ふ。是れを失する則は、六趣輪

止談



【八趣】一に生在  
地獄、二に生在餓  
鬼、三に在畜生、

曾て知らず、三途も六趣もさら／＼辨へなき故に、さながら盲者の赤子を救ふ心なきか如し。和尚大慈大悲宜しく是れを憐察し玉へ。予が曰く、善哉問ふ事、相持へて油断し玉ひぞ、油断し玉ひたらば、かならず三途にしづみ玉ふべきぞと唯云ひすでおきたらんは、左ながら赤子の井に赴くを見て、危い哉、此の子は果して井に落つへきとどのみ云ひて見捨ておくか如し。我れに神仙長生不死の大還丹、即坐成佛の秘訣あり、眉毛を惜ます汝か輩に傳與せん。謹んで精神を凝らして聽受し、打失する事なかれ。汝か輩即今外面五尺の形骸、男女有り僧侶あり、老幼あり尊卑あり媚醜あり、各々互に異なり。こゝにおいて憎愛妬害怪吝執着雲霧のめぐり湧くか如く、波浪の漲り飛ぶか如し。三毒懐に溢れ、五欲胸に凝る、日々多少の悪業習を積み重ね、晝夜に六趣に輪廻し、死してはかならず三途に墮す、叫喚衆合黒繩無間の大苦患一身に聚まり責む、三祇百劫を経て休罷有る事なし、其の受苦心も言葉も及ぶへからず。佛の云く、一切地獄の衆生の苦患、我れも詳に是れを説かば、閻浮提の衆生聞き得て、皆盡く血を吐いて死すべしと。寔に恐るべくまことに懼むべし。若し人如上三途の苦域を透過し、八難の險處を超越し、一起に如來地に直入し、涅槃の大彼岸に至らんと欲せば、謹んで精を静め心を凝らして、汝か騰輪氣海丹田の間を

これ三途なり。四に北鬱單州、梵語、此に勝處、四に生長壽天、これ天上なり、五に摩訶薩、七に世智辯聰、八に佛前佛後、此の八の中に生れたる者佛説を聞くこと難き、故に問法八難と云ふ。  
【身心脱落】永平道元禪師、在三天堂如淨禪師之處、一夜坐禪時、如淨示衆曰、坐禪者身心脱落也。師聞然於大悟。直上三方丈、燒香事作摩生。師曰、身心脱落。如淨曰、身心脱落、々々身心。

點檢せよ、全く男女の相なく僧俗の形なし。老幼尊卑貧富醜媚一點の痕跡なし。是れ彼の黄成子かいはゆる至道の精香々冥々たり、至道の極昏々黙々たる者なりや、こゝにおいて單々に點檢し、仔細に照願して晝夜に怠らざる則は、いつしか思想盡き妄情泯滅して、玉盤を擲擗し氷樓を推倒するに齊ふして、たちまち身心ともに打失せん。此において轉た進んで退かざる則は、計らすも一旦豁然として貫通して、十方虚空なく大地寸土なふして、事物の表裏精麤盡くさすと云ふ事なけん。是れ彼の永平の謂はゆる身心脱落、々々身心。直に是れ古人の謂はゆる理盡き言葉窮つて技もまたきはまる。風金網をはれれ、鶴籠を脱する底の好時節、隻手の聲を聞く事、白晝に掌上を見るか如し。長河を掲いで酥酪な成し、荆棘を變して梅檀林と成し、鏡を轉して金と成す底の時節、人間天上の善果是れに如かず、縦ひ汝萬戸侯の富貴を得るも、黄梁一炊半熟の夢、富四海を保つも、死すれば必ず捨て去つて悪趣に入る。是の故に言ふ、富は是れ一生の財、身滅すれば即ち隨て滅す。智は是れ萬代の寶、命終れば即ち隨つて行く。大凡世間一切諸有の有情、王侯より庶人に到り、老幼尊卑、僧俗男女、馬牛犬豕、豺狼麋鹿に到るまで、正因佛性の大事を具足せずと云ふ事なし。是れを實相真如の日輪と名け、本有常住の月輪と云ふ。是れを失する則は、六趣輪

辻談話



論者海不出半  
生活音中。舊本に  
抛を脱に作るは誤  
れり。  
〔攪長河爲酥酪〕  
虛堂錄に、變大地  
爲黃金。攪長河  
爲酥酪。とあり、  
此の句諸本多くは  
文字誤れり。

廻の苦衆生流轉常没の凡夫となり、忽然として是れを得る則は、たちまち無上正覺を成して三界無比の大聖と成る。十力調御の如來と同じ。此れ等の大事を明らかにしめんかために、我れ常に人を勸めて隻手無聲の微妙音を聞かしむ。是れ彼の山姥が謂はゆる一丁空しき谷の響は無生音を聞きたよりと成るとは、是れ此の隻手の聲を云へり。今日は是れまで、明日また來り聞き玉へ。あめおこしあめおこし。

### 辻談議終

## 主心ね婆々粉引歌

白隱禪師

有がたいそや天地の御恩。あつたむむの程までも。夜と晝ともなふてはならぬ。  
ひるは餅く夜ら休む。雨露の御恩で五穀もみのる。するの野山の草木まで。君の御恩は山より高い。賤がわらやのはてまでも。繁昌めされし高代までも。風に草木のなびく様に。わすれまいそや御主の御恩。遠きあの世の後までも。親の御恩は海より深い。恩をしらぬは犬猫じや。孝行する程子孫も繁昌。おやばうさ世の福田じや。心短機な殿子の癖に。主の専途にや通はしる。忠と云ふ字を能く見れば。外へちらさぬ此の心。五尺餘のからだは持てど。主心なければ小童じや。武藝武術も第二のさたよ。どかく主心がおもじやもの。主心なければ明屋も同じ。狐狸も入りかはる。周の文武の太公望が。云ふておかれた名言がござる。武家の大事の三略の書に。驚悲亂りに起るはどらじや。武士に主心の定まらぬゆる。主心定まる修行じや。弓は鎮西八郎殿よ。鎗は真田よ太刀打や九郎。縦ひ此等を欺く人も。主のこゝろはの



専途の時に。主心なければ腰ぬける。主心至善二つはない。常に正しき此の心。唐の大和の物知りよりは。主心定まる人が好い。武士を絹布で食はせておくは。主の専途の一と小くち。多藝多能も先つさしおいて。主心定まる場所を知れ。主心至善定まる時は。持齋持戒も外にやない。有難いそや主心の徳は。太刀や劍の刃もたぬ。弓も鐵砲も届かぬからに。敵と云ふ字は更にない。空も月日も海山かけて。土も草木も皆主心。神とまします高間が原も。五欲三毒ないところ。民を新にするとは云へ。至善定まるまでの事。出家も沙門も高位も智者も。主心なければ皆民じや。宮はわらやよわらやは宮よ。主心一つが潮さかひ。上下萬民主心があらば。治めされども世は萬歳。嬉し目出度や主心の徳で。うたぬ隻手の聲も聞く。悟り迷ひを口には説けど。主心居らにや何じややら。袈裟や衣で見かけはよいが。主心すはらにやひよんな物。四國西國めぐるもよいが。主心なければむだ道よ。主心丹田氣海にみつりや。仙家長者の丹藥よ。丹を錬るには鍋釜入らぬ。元氣丹田にするまで。不死の丹藥望みな人は。つねに氣海に氣おけ。虚空界より長壽のものは。氣海丹田に住む主心。氣海丹田に主心が住めは。四百四病も皆消ゆる。主心お婆

婆はいくつになりやる。わしは虚空とおないぞし。虚空おやぢは死にやると儘よ。わたしやいつでも此通り。山河大地を我子にもてば。わしに不足な事はない。武士の身の上は覺悟がおもじや。生て一たび死ぬがよい。生て死ぬるは容易い事よ。主心お婆々に出逢てとへ。主の御恩で仕立たからだ。喧嘩などする不覺者。武士は健病も忠義の一つ。一度主君に上おくからだ。我身ながらも自由にやならぬ。大事くと守りましょ。内證つと合傍證同士にや。狗と云ふとも腹立つな。主の爲めなら無間の底も。修羅も紅蓮も辭退せぬ。命限りに切込む所存。是れが勇士の常の住。主心お婆やはとこらにござる。氣海丹田の裏店借りて。氣海丹田はとこらの程ぞ。臍の辻から二町下。臍のくるりに氣が聚れば。とりも直さず大還丹よ。最も貴とや還丹の徳は。須彌も虚空も碎て微塵。十方法界實相無相。見られてもなく見てもない。生死涅槃もきのよの夢。煩惱菩提の迹もない。墮してくるしむ地獄もないが。往いて楽しむ淨土もないぞ。此に二期の大事がござる。眞正得悟の智識に達はにや。世間多少の修行者共が。二三十年難行苦行。思ひはからず此場にとりや。もはや悟つた大隙あいた。おらは是れから心の儘じや。殺生偷盜も氣遣ないぞ。五逆十惡



好いなくさみよ。因果むくひもないからと。邪見斷無の我儘侍り。よその見るりも恐るしや。屬み求めし見性の法も。いまは地獄の種となる。もとの主心は皆消えさせて。魔縁天狗が入りかかると。過去の縁因拙い故に。終に真正の明師に逢はにや。悟後の修行の奥儀も知らぬ。もとの凡夫かいつと増し。今は漢末法滅の時。邪見邪法の起るも道理。支竺扶桑の三國ともに。眞の禪宗は地に落果て。殊に怪しき邪法がござる。曹洞黃葉濟家も共に。善知識じやと呼はるゝわるも。人に對する説法を聞けば。真正向上に禪法といふは。坐禪觀法に用事もないが。佛經祖錄も更に入らぬ。木地の儘なが眞の佛。佛求ひりや佛にまよひ。法を求ひりや法縛をうく。佛果菩提も夢中の夢よ。生死涅槃も飛ぶ鳥の跡。好さも悪さも皆打すて。木地の白地で月日を送れ。障りや濁ると溪河の水。問ふた學ぶな手出をするな。是れがまことの禪法だ程に。見ぬか佛ぞ知らぬか神よ。是れを聞くより彼の大勢の。無智や懶惰の役業のやから。扱ても貴い教化でござる。もはや是れから我々どきは。思ひよらざる生佛じやそ。くふてはこして寐るばかりじやと。並ひ睡るを脇より見れば。大勢並んで機を推すごとく。如何なり行く身の果やらん。佛法破滅の大前表よ。

〔俱盧孫佛〕一に拘留孫佛さし書す、釋迦牟尼佛出世以前に於ける七佛中の第四佛なり。  
〔疎山塔等〕疎山塔、牛過窟、乾峰三種、南泉遷化の事は白雲法語及蓮羅天笠の煎頭に出つ。  
〔白雲未在〕白雲禪師。語五祖演曰。有數禪自廬山來。皆有悟入處。教伊說亦得。有來由。與因緣同伊亦明得。教伊下語亦下得。惡處未在。  
〔僧女釋迦〕五祖問僧云。僧女釋迦。那個是眞底。

悟後の修行とはどの様の事ぞ。お婆々知てならうたふて見やれ。是れは大事を御尋ねとふよ。五百年來すたれた法じや。諸善知識も知らぬが多い。悟後の大事は即ち菩提。昔春日の大神君の。解脱上人に御告がござる。およそ俱盧孫佛より以來。たとひ天下の智者高僧も。菩提心なきや皆々魔道。菩提心とはどふした事ぞ。山まん婆女郎もうたふておいた。上求菩提と下化衆生なり。四弘の願輪に鞭打あて。人を助くる業をのみ。人を助くにや法施がおもじや。法施は萬行の上もりよ。有がたいぞや法施の徳は。たとひ佛口も盡くされぬ。法施するには見性がおもじや。見性はかりじやちぶさがほそい。細いちぶさじや子は出来ぬ。よい子なければ跡絶える。隻手音聲もどめ得て置て。此で休するや斷見外道。次に千重の荆棘叢を。残る事なく皆透過せよ。お婆々死んでも何國へござる。とめてたもれよ帆かけ船。四十九曲り細山路を。直に通らにや一分たぬ。風の色香はどのよな物ぞ。次に夢中の祖師西來意。最後萬重の關鎖がござる。之れが禪者のむなぶく病ぞ。關鎖なければ禪宗は絶える。命かけても皆透過せよ。むかし黃葉運大禪師。常に嗟悼し惜ませ給ふ。扱ても牛頭山宗融大師。常に横説豎説はすれど。未だ向上の關鎖をしらぬ。關鎖



「婆子燒庵」昔有婆子供養一庵。經二十年。常令二二八女子送飯給侍。一日令二女抱定日。正與歷時如何。主曰。古木倚寒巖。三冬無暖氣。女子歸舉示婆。婆曰。我二十年祇供養得箇俗漢。遂遣出。燒却庵。

なければ禪じやない。鯉魚も龍門萬重を超える。野狐も稻荷の鳥居はこすぞ。流石禪宗のめしやくいなながら。關鎖とほらにや分立たぬ。疎山壽塔に牛窓樓。乾峯三種に犀牛の扇子。白雲未在に南泉遷化。倩女離魂に婆子燒庵よ。是れを法窟の爪牙と名つけ。又は奪命の神符とも云ふ。此等逐一透過の後に。廣く内典外典を探り。無量の法財集つめておいて。三つの根機を救はにやならぬ。三つの根機の其中く。眞の種草を求むるかをも。眞の種草が眞實欲しか。法窟の牙と奪命の符と。鳥の兩羽を挟むが如く。是れがなければ種草は出来ぬ。是れが即ち佛國の因。とりも直さず菩薩の不行。たとひ虚空はき盡やると儘よ。こちらの弘願は果しやない。頼入ぞよ千歳の後も。ひとりなりとも當家の種草。婆々が心を能く參究せば。祖師の眞風は地におちやせまい。油断めさるなおまめでござれ。婆々は是れから御暇申す。

(法語集完)

### 主心ね婆々粉引歌終

明治二十八年十二月十七日印刷  
明治二十八年十二月二十日發行

正價金壹圓貳拾錢

編纂者

山田孝道

麻治區芝罘元町一丁目二十二番地

發行者

田原豊吉

麻治區豊洲河原町十二番地

印刷者

橘磯吉

京橋區弓町二十三番地

發行所

光融館

麻治區豊洲河原町十二番地

印刷所

三協合資會社

麻治區弓町二十四番地

版權  
所有



〔婆子燒庵〕昔有婆子供養一庵主。經二十年。常令二八女子送飯給侍。一日令女抱定日。正與庵時如何。主曰。古木倚與庵。三冬無暖氣。女子歸舉示婆。婆曰。我二十年祇供養得箇俗漢。遂遣出。燒却庵。

なければ禪じやない。鯉魚も龍門萬重を超える。野狐も稻荷の鳥居はこすぞ。流石禪宗のめしやくいなながら。關鎖とほらにや分立たぬ。疎山壽塔に牛窓樓。乾峯三種に犀牛の扇子。白雲未在に南泉遷化。倩女離魂に婆子燒庵よ。是れを法窟の爪牙と名つけ。又は奪命の神符とも云ふ。此等逐一透過の後に。廣く内典外典を探り。無量の法財集つめておいて。三つの根機を救はにやならぬ。三つの根機の其中く。眞の種草を求むるかをも。眞の種草が眞實欲しか。法窟の牙と奪命の符と。鳥の兩羽を挟むが如く。是れがなければ種草は出来ぬ。是れが即ち佛國の因。とりも直さず菩薩の大行。たとひ虚空はさ盡やると儘よ。こちらの弘願は果しやない。願入ぞよ千歳の後も。ひとりなりとも當家の種草。婆々が心を能く參究せば。祖師の眞風は地におちやせまい。油断めさるなおまめでござれ。婆々は是れから御暇申す。

(法語集完)

### 主心れ婆々粉引歌終

明治二十八年十二月十七日印刷  
明治二十八年十二月二十日發行

正價金壹圓貳拾錢

編纂者

山田孝道

麻布區芝罘元町二丁目二十一番地

發行者

田原豐吉

神田區駿河臺四紅樓町十二番地

印刷者

橘磯吉

京橋區弓町二十三番地

發行所

光融館

神田區駿河臺四紅樓町十二番地

印刷所

三協合資會社

京橋區弓町二十四番地

版權  
所有



光融館發行及發賣雜誌書籍

# 佛教通俗講義

第五十五號既刊○明治二十九年二月第六十號ヲ全部完結

定價一部郵稅共九錢  
 二十部同郵稅共一圓九錢  
 五十部同郵稅共三圓九錢  
 一百部同郵稅共七圓九錢  
 二百部同郵稅共一十四圓九錢  
 三百部同郵稅共二十一圓九錢  
 四百部同郵稅共二十八圓九錢  
 五百部同郵稅共三十五圓九錢  
 六百部同郵稅共四十二圓九錢  
 七百部同郵稅共四十九圓九錢  
 八百部同郵稅共五十六圓九錢  
 九百部同郵稅共六十三圓九錢  
 一千部同郵稅共七十圓九錢  
 以上全部完結  
 何稅共送五部同郵稅共九錢  
 目ヲ分本ニシテノ貴符ハ御斷申上候

## 師講及目科

- 般若心經……(完結)……大内青樹
- 八宗綱演……(完結)……織田得能
- 因明學……(完結)……村上專精
- 俱舍宗大意……(完結)……齋藤唯僧
- 十玄論……(完結)……高田道見
- 原人論……(完結)……大内青樹
- 天台西谷名目……(完結)……前田慧雲
- 三十唯識論……(完結)……齋藤唯信
- 梵文阿彌陀經……(完結)……南條文雄
- 維摩經……(完結)……島地獸雷
- 大乘起信論義記……(完結)……織田得能
- 附錄○宏智頌古一則……(完結)……大内青樹
- 寶鏡三昧……(完結)……釋宗演
- 卅三過本作法……(完結)……池原雅壽
- 大乘止觀頌……(完結)……釋清潭
- 菩提心論……(完結)……姫宮大圓
- 七十五法名目……(完結)……織田得能
- 華嚴學……(完結)……藤谷還由
- 佛說法滅盡經……(完結)……大内青樹
- 正信偈……(完結)……前田慧雲
- 渴仰要路……(完結)……江村秀山
- 佛教大意……(完結)……織田得能
- 碧巖錄……(完結)……大内青樹
- 質問解答……(完結)……各講師

第一號六版 第二號六版 第三號五版 第四號四版 第五號以下第十號迄三版 第十一號以下再版







如是等分と通取力 島地黙雷 歲寒窓放言 處淵老人

第六輯目次

人生の目的 寺田福壽 佛敎と厭世敎 赤松連城  
總合宗敎論 平井金三 佛敎と日本國 井上雲照  
利他ノ行ヲキク者ハ 島地黙雷 擇善ノ是非ヲ論ス 荻野獨園  
精神ノ世界 高原坦山 公私ノ是非ヲ論ス 荻野獨園  
天竺ノ聖賢トシテ 高田道見 如何ノ實狀ニシテ 荻野獨園  
佛敎ノ原理ニ根據 島地黙雷 如何ノ實狀ニシテ 荻野獨園  
佛敎ノ原理ニ根據 島地黙雷 如何ノ實狀ニシテ 荻野獨園  
佛敎ノ原理ニ根據 島地黙雷 如何ノ實狀ニシテ 荻野獨園

第七輯目次

器身ノ關係 島地黙雷 無佛益論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷  
佛敎ノ關係 島地黙雷 萬物ノ本體見論 島地黙雷

第八輯目次

佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷

第十一輯目次

佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷

第十二輯目次

佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷  
佛敎の歴史 島地黙雷 佛敎の歴史 島地黙雷

校訂大乘起信論義記 全

全一冊和裝 正價十六錢 郵送料四錢

此書、諸宗ノ敎科書トシテ採用セラレ佛敎初學者ノ必要ナルハ素ヨリ言ヲ待マテ而ルコト從來流布ノ書ハ  
價格不廉ナルガ上ニ印刷ナク印刷不明ニシテ讀ミ難ク且其數額分レハ携帶ニ便ナラザルニ付キ今般本館ニ  
於テ丁重ニ校訂シ送り假名ヲ正シ句讀ヲ施シ之ヲ鮮明ナル活版ヲ以テ上等洋紙ニ印刷シ讀讀ニ便シ上層及左右  
ニ充分ノ餘白ヲ存シテ書入レニ便シ三本五卷ヲ全一冊ニ纏メテ携帶ニ便シ特ニ非常ノ廉價ナルヲ以テ眞宗大谷  
眞中學校、東京哲學部、その他各宗敎校及ヒ購買會等ニ用務トナリ



# 禪學

禪學は放外別傳の的意を開拓し不立文字の玄旨を拈出し直に人心を指して見性作佛せしむるの活文字なり、大悟徹底の妙境に逍遙せんとする者は速に道の文字禪に参せよ

- 禪學第一號より第七號迄の目次中重要なものを擧ぐれば左の如し
- 講義の欄には○正傳三昧○禪機語○親參實究○神道○即心是佛○無情說法
- 山田孝道の法寶殿の心王銘續○釋哲慶師の證道歌(元結)○若生國榮師の寒山詩
- 史傳の欄には○鈴木正三○愚堂禪師○最也○桃水和尚○蒼龍老漢○鐵眼禪師○白隱禪師
- 法語の欄には○大智禪師○十二時法語○鐵眼禪師の神通妙用○天柱禪師の無明○拔隊禪師
- 澤水禪師の工夫疑團を示す事○夢想國師の神通妙用○五蘊○東嶺禪師の奉大聖寺宮○
- 漫錄の欄には○銅瓶鐵鉢餘談○懶菴涉筆○禪榻夜話○獨語○芝山隨筆○泥舟居士
- 論說の欄には○邪禪を破す初伽道人○禪學指針論高田道見○楞伽道人の邪禪論を讀て
- 口槍は所成を述ぶ松崎覺本
- 柳か所成を述ぶ松崎覺本
- 口槍は毎號大家の筆になる婆子燒庵の國補公淡川の極俊禪師に調する圖無着文珠
- 金牛和尚飯桶を持て舞を伴ふ神脚の國玄虎殿主が眉尖刀を揮ふて禪客と接するの圖
- 雜報欄には禪學に關する時事論評を掲ぐ
- 雜報欄には禪學に關する時事論評を掲ぐ
- 雜報欄には禪學に關する時事論評を掲ぐ

● 第八號には一大附録并發賣書籍目錄を添  
● 但七號と限り郵税壹錢也

● 定價 一部六錢 ● 十部前金五十七錢 ● 二十部前金一圓十五錢 ● 全國無遞送料  
● 一回定價 郵券代用一割増 ● 前金ニアラレバ一切發送セズ

## 佛家文人傳

全一冊

定價十二錢

郵送料二錢

本書は有名ナル佛家加藤咄堂先生ノ著ス所三十一文字ニ甚深ノ理ヲ單ム僧正遍照アリ 鳩立ツ深ニ高遠ノ想ヲ  
本行法師アリ草庵靜ニ書キ綴ク深草元政アリ禪ニ參シテ宇宙ノ美ヲ發ク松尾芭蕉アリ 鴛鴦ト云ヒ彼ト云ヒ佛  
教界ニ於ケル幾多ノ文傑ヲ捉ヘテ流暢綺麗ナル彩筆ニ上セテ評語ヲ挿ミテ一見其人ト爲リテ知ラシム佛敎文  
學ノ大ニ我文學界ヲ勵カス所以佛敎教理ノ宇宙ヲ吞吐スル所以歟ラ日本文學史ヲ知ラント欲スル者須ラク本書  
ヲ讀ムベシ

## 家庭新話一百題

美裝全一冊 實價六錢

九十四頁 郵税二錢

余輩が尚ほ頭是なき子供なりし頃慈母の膝に抱かれ暖かき愛の中に諄々として物語り給ひし猿蟹合戦舌切  
雀桃太郎の幼稚物語が如何に養育するの道に於て是等の観念が生長の如何に作用を示しつゝある乎を比  
到れば今日兒女の性情を汚して醜くするもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
すれば一層感の汚濁を穢して醜くするもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
腦を善くするに汚濁を穢して醜くするもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
もくもく一善なるを編みて家庭に教訓するもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
なるもくもく一善なるを編みて家庭に教訓するもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
なくもくもく一善なるを編みて家庭に教訓するもの多し其感念を免れ是を成るべき方法を見たりと云ふは佛  
神の助成の世に此種の手廻り此書は前二者を輝かして而も其長所を角張りたる格好にして裨益する所  
れは助成の世に此種の手廻り此書は前二者を輝かして而も其長所を角張りたる格好にして裨益する所



各宗中學寮  
及中學林漢  
文學教科用

# 和漢高僧傳

和本全三冊 定價金六拾錢  
全部出來 郵税金六 錢  
(此字引近刊)

本書ハ各宗中學寮并ニ中學林其他諸教科ノ漢文學教科用書ノ需用ニ迫ラレ博識高德ノ織田得能師特ニ意ヲ注  
イテ編纂セラルルモノナレバ其漢文讀本用ニ適切ニテ缺クル無キヤ昭ナリ昨年ヨリ既ニ京都本願寺清韓  
語學研究所大谷派本願寺中學寮ヲ始メ東京大谷派第二中學寮、越前福井大谷派中學寮、越中高岡大谷派中學  
寮、越後高田大谷派中學寮、美濃大谷派中學寮等ノ教科用書ニ採用サレルヲ以テ敢テ本館ノ警言ヲ要セザル  
ヘシ今又禪宗諸派ノ學林并教科ニモ採用ノ榮ヲ賜ハラントス弊館ノ光榮之ニ過キス

## 卷之上目次

道安●慧遠●羅什●法顯●達磨●曇鸞●真諦●慧文●慧思●南岳●慧遠●淨影●智顛天台●吉藏●杜順●道  
綽●玄奘●道宣●南岳●弘忍●善導●親基●慈恩●普光●道昭●慧能●曹溪●法藏●賢首●義淨●善無畏●一行●金  
剛智●行基●鑑真●不空●湛然●荆溪●善珠●秋篠●澄觀●清涼

## 卷之中目次

最澄傳教●空海弘法●宗密圭峰●真如●圓仁慈覺●義玄臨濟宗祖●  
仲算●光勝空也●良源慈慧●真興子●源信●知禮四明●子賡長水●  
勤秀●良忍●通宗開祖●貞慶●榮西●仁壽開祖●高辨明惠●辨長

## 卷之下目次

道元永平寺開基●親鸞淨土開祖●辨圓東國寺開基●日蓮日蓮宗開祖●祖元圓覺寺開基●容尊眞正●普門南無寺開基●  
藏然●紹運●持守開基●妙超大德寺開基●師範虎關●破石天龍寺開基●慧玄妙心寺開基●宗純一休●真盛長慶開祖●  
明忍●株宏●天海南光坊●宗彰●知祖●文政●隆琦●道光●慈山妙立●契沖●忍波●光  
謙●慈覺●慈覺白雲●普寂●伏光

## 講義

第一號七月十五日發行 每冊金八錢  
一部份代價金八錢 郵税金二錢  
半年分前金郵税金共五十五錢  
十二月十五日第六號發行

此講義は、大徳を得たり而し、前代諸師の講義に過たるの大徳あらんことを期せざる可からず夫れ、  
今に聞かざる北條時宗補正成  
將隆撰述して、英雄相闘ふの時に至り、  
新田義貞武田信玄上杉謙信則利家伊豆義元等、  
の典を講せざるを得ざるの時運亦た世人、  
學問老に請ひ禪學を須の典新を平易に講述し、  
才希くは江湖愛國慕道の君子陸續購讀の榮を照は、  
登音本社の幸のみならんや

- ◎ 參 同 契 講 義 (第三號にて完結) 大内青樹居士
- ◎ 學 道 用 心 集 講 義 木下吟龍師
- ◎ 座 禪 儀 講 義 高田道見師
- ◎ 寶 鏡 三 昧 講 義 (第四號より掲載) 大内青樹居士
- ◎ 第 一 號 題 字 通信大臣無邊依禪 渡邊國武君
- ◎ 宗 史 (第三號より掲載) 故東福通禪師
- ◎ 枯 木 集 故原坦山老師遺稿
- ◎ 首 楞 嚴 經 講 義 大内青樹居士校訂

## 禪論和解

全書冊

正價拾錢

郵税貳錢

近來禪學の流行を奇とし、一夜作りの禪書世に行はるゝに至る、之れ所學の爲め大に憂ふべきなり、抑も本書は、大徳禪師の「坐禪論」にて珍貴に洪  
川禪師の禪論を、宗演禪師の註を付せられたるものにして、文章平易、見性成佛の法門直指人心の法旨、既き得て餘蘊なし、實に本書は  
禪學初學者の好相なり



●**大乘起信論和解** 全壹冊 正價參拾錢 郵稅四錢  
本論は佛學深遠初學解し難き著むるに今大乘小乘の教理に委し、織田得能師の平易の文字を以て論文に註釋を施したる者品切に付今變更に訂正増補して再版せり

●**天人論和解** 全壹冊 正價拾五錢 郵稅貳錢  
本書者自序に曰く「余元々古人の書に就て難解の章句に疑々たるを解せざるなり然れども此論の如きは弘く世に行れて佛教初學の課本となれり故に止を得ず其書に照し和解を試む」を而して第一版既に品切れに付更に訂正増補して再版せり學界の諸彦一讀詠味あれ

●**天台四教儀和解** 全壹冊 正價參拾錢 郵稅四錢  
本書は天台四教儀に和解を附したるものにして五時八教の教列一三觀の觀法の大要を窺ふには有益なる良著也

●**台宗二百題補助記會本** 全貳冊 紙數八百五十ペー、實價七拾五錢 郵稅拾錢  
此書は本邦四大本派本願寺大學寮に於て四百題を限り印刷頒布せられしものにして今漸く弊館に十五部の殘本あるのみ古版絶版して古本だも世に絶へてなし入用の諸師此際至急申込あれ

●**羅佛事情** 全壹冊 正價貳拾錢 郵稅四錢  
此書は佛敎及も繁盛なる暹羅國の事情を織田得能師在暹三ヶ年の間に實見せられし儘を記載せしものにして一讀能く南方佛敎の何たるを知るべく以て斷魂驚動すべし

●**三國佛教略史** 和本參冊 實價六拾參錢 郵稅八錢  
本書は印度支那本邦三國佛敎の源流より各宗諸種の編纂傳蹟に三る迄細大遺すなく一目下に瞭然たらしむ

●**迦牟尼佛** 定價卅錢 特別割引貳拾五錢 郵稅四錢  
第一編 釋迦牟尼大聖尊 ● 第二編 釋迦牟尼佛の系統 ● 第三編 釋迦牟尼佛の傳記 ● 第四編 佛敎の本領と宇宙の大觀、可知不可知の佛敎、佛敎の實義、宗教的佛敎、釋迦牟尼佛の世界觀、釋迦牟尼佛の哲學組織 ● 第五編 論 釋迦牟尼佛の大觀して二三の間難脱解に及ぶ、初通の解、須彌山の解、釋迦牟尼佛の定に入りて三千世界を知り得たる理由、釋迦牟尼佛及び其滅後の光景を通過して現今の佛徒に教す

●**佛教和讚三百題** 中本全參冊 正價參拾五錢 郵稅四錢  
地獄、觀音、血盆、迦葉、七七、鴨耳等の和讚を大集せし也



コ-3470

あ



~~109~~ / 88.84  
~~192~~ Y19







019645-000-1

188.84-Y19ウ

禪門法語集

山田 孝道/編

M28.12

ABG-0426

